
とある虚けの反攻物質 《アンチマター》

Mirage wolf

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある虚けの反攻物質《アンチマター》

【Nコード】

N9131U

【作者名】

M i r a g e w o l f

【あらすじ】

虚ろな瞳の少年はくじゃん。を多用する女性に助けられる。実験

体名称

『 反攻物質 』 虚ろな少年はやがて、瞳に光を宿し……………虚けへと変わる。

H o l l o w 0 (前書き)

活動報告で考えた能力をもった人間を主人公として小説化。とある
のSSは難しそう……。まあ、長い目で見てください。

H o l l o w

「ダメだな……もう使い物にならん」

「実験が少々辛すぎたのでしょうか？ いずれにしても再開は不可能ですね」

「わずか五歳で超能力者^{レベル5}相当の能力を持ち、絶対能力者^{レベル6}に最も近いと言われた反攻物質^{アンチマター}も所詮は人間の子供ということか」

いかにも実験に失敗した科学者らしく討論をする白衣の研究者たち。その視線は前方の『モノ』へと向けられていた。

それは手術台のような無機質で、冷たい金属の鈍い輝きを放つ台の上に横たわっている——人間だった。

年齢は……小学校中学年程度であろうか。小柄な体系からそのようなことは理解できる。しかし、その姿はかなり異質。

骨に張り付いたかのように肉の厚みが無く、直線的な腕。

宗教の聖人像のようにやせ細り、肋骨の形が浮き出ている胴。

腕と同じような脚。

かろうじて亜麻色とわかる、黒ずみのようなもので汚れた頭髮。

そして、瞳孔が開いているようにも見える、光を灯さず何も映さな

い、薄く開かれた黒い瞳。

「でも、死んではいけないのですよね？ならば目覚めるまで待ったほうがよろしいのでは？かなり貴重な実験体ですよ」
モルモット

「確かに、死んではいけない。だが、コレコレの精神は完全に破壊された。コレはただの肉の塊……あるいは能力を宿した器に過ぎんよ」

「それにコレを目覚めさせたら我々に復讐しかねん。コレは危険だ。学園都市を丸ごと滅ぼすほどに………な」

「統括理事長が提唱された『インヘルノ・クルス荒廃せし地の十字架』はついに夢に終わったか………」

「いっそ処分した方がよいかもしれん。コレが本当の意味で目覚める前に」

科学者たちは討論を続ける。先ほどと変わらないように。唯一変わっていることといえば科学者たちの視界にはもう横たわる少年は入っていないかったということ。

少年は生きていた。科学者が言ったように、様々な実験によって精神をほぼ完全に破壊されたが、確かにその魂も、心臓も鼓動することをやめてはいなかった。

（シヌノカ？ジブンハ？）

虚ろな瞳の少年は思考する。―――――処分。
不要なものや余分なものを、捨てる、売り払う、消滅させる、
など適当な方法で始末すること。つまり自分は殺されるのだ。適切
な手段、恐らく最善の方法で。

（マアドウデモイイカ）

思考は有していても感情の消えた少年は自らの『死』など、どうで
もよかった。

『反攻物質』 アンチマター

元々置き去りで、名前のない少年はそう呼ばれていた。この研究所
が存在している超能力者を生み出すための都市―――――学
園都市では 測定不能や効果の薄い無能力者。レベル0
スプーンを曲げる程度の日常では役に立たない力 レベル1 の低能力者。
低能力者レベル1とほとんど変わらない程度の力の異能力者。レベル2
日常生活において活用可能で、便利と感じられる力 レベル3 の強能力者。
軍隊において戦術的価値を得られる程の力の大能力者。レベル4
単独で軍隊と戦える程の力の超能力者。レベル5

そして、いまだ存在しない絶対能力者^{レベル6}。
という能力の段階が存在する。

いまだに概念のみで、存在しない絶対能力者^{レベル6}。それを除けば超能力者^{レベル5}が最高であり、『反攻物質』^{アンチマター}は最も絶対能力者に近い超能力者^{レベル5}だった。

この世に存在するあらゆる素粒子の逆の性質をもった素粒子、またはこの世の現象と逆の現象を発生させられる物質を生成し、操作する。

それが、『反攻物質』^{アンチマター}の能力。大雑把に言ってしまうと『反物質』を自在に操れるということだ。

反物質とは、質量とスピンが全く同じで、構成する素粒子の電荷などが全く逆の性質を持つ反粒子によって組成される物質。例えば電子はマイナスの電荷を持つが、反電子（陽電子）はプラスの電荷を持つ。中性子と反中性子は電荷を持たないが、中性子はクォーク、反中性子は反クォークから構成されている。

反物質は物質と衝突すると、対消滅という現象を起こし、質量がほぼ100%エネルギーとなって放出される。

そのエネルギーはアルミニウムの一円玉（1グラムのアルミニウム）と適当な反物質1グラムを接触させ、対消滅させただけで、電力換算すれば約2500万kw^{キロワット}。東京都の総電力約二時間分に相当する。

熱量換算すれば約90兆キロジュール。広島に投下された原子爆弾「リトルボーイ」の放出した熱量の約1.4倍。

TNT爆薬換算すると、その爆発力は約21.5キロトン。これも「リトルボーイ」の約1.4倍である。

今最もエネルギーが高いとされる核融合はその反応を開始・維持するために莫大なエネルギーが必要であるため、差し引きで得られるエネルギーは質量の1000分の1よりもっと少ないが、対消滅は物質を反物質をくっつけてやるだけで勝手に反応が起こってエネルギーを放出するため、ほぼ100%そのまま利用出来る。しかし、そんな都合のいいことがあるほど現実には甘くない。

反物質は何でもかんでも対消滅を起こしてしまう。空気でも水でも人体でもだ。超真空の中で、物質に触れさせず大掛かりな装置で磁場を発生させ、容器に触れないように宙に浮かべる形で固定するか、保存が出来ず、今の科学では人工的に高エネルギーの粒子を、粒子加速器という非常に巨大な装置を使って作り出し、それらを衝突させて反粒子を作りだし捕獲することではか反粒子を得ることができない。

以上のような反物質を簡単に生成、操作できてしまう『アンチマター反攻物質』という能力はかなり強力といえる。その気になれば地球を丸ごと消滅させることも可能かもしれない。

「そうだな……廃棄した方がいいかもしれん。――
なによりも世界のためになア!!」

この研究者の言葉が引き金となった。―――――そうだ。そうだ！こんな危険物はさっさと廃棄した方がいい！我々は世界を救う英雄となるのだ！と、研究対象が使い物にならなくなった途端に狂信者のように眼を血走らせながら、叫ぶ。叫ぶ。叫ぶ。叫ぶ。

（ウルサイナアハヤクシロヨ）

そんな考えが通じたのか、血走った眼をした研究者は少年に近づく。
――― 一歩。また一歩。

《……………ヴ―――ヴ―――ヴ―――！！》
ヴ―――ヴ―――！！

突然鳴りだした警報。なんだ！？なにがあった！？ 退避だ！逃げろ！！と慌てふためく研究員。
そんな人間とはうって変わって未だに虚ろな瞳で慌てふためく人間を見つめる少年。

ドガアアアアアアアアアアツツ！！

爆発音。ひいつ、と怯える研究員たち。その姿は先ほどとは全く違い、血走っていた目は「この世の終わり」とも言いたげなモノに変わり、膝を崩して項垂れる人間も多かった。

「——————全員即座に行動を停止するじゃん！アンタたちがその子供を使って最悪の実験をしていることはわかってるじゃんよ！」

じゃんという言葉を多用する女性の掛け声が合図となり、警備員のような格好をした人間が次々に飛びだし、研究者たちを抑え込んでいく。不思議と暴れる研究者は一人もいなかった。皆虚ろな表情と瞳でなんの抵抗も無く、ねじ伏せられる。

「……こいつはいくらなんでも酷すぎるじゃんか……。救急車はどれくらいでくるじゃん！」

少年に寄り、その姿を見た女性は近くの人間に叫ぶ。—————あと二十分はかかるそうです。

「そんなノンビリしてたら間に合わないじゃんか!？」

女性は悔しそうに唇を噛むと、一転。何かを決意したような表情で少年を見つめ—————腕に抱えた。

（オイオイナニヲスルキナンダコ
ノオンナ）

表情は全く変化していないが、思考する少年。疑問だった。この女性の行動が。女性は近くにいた人間に軽く謝罪し、現場を任せると、腕に少年を抱えたまま全速力で走りだした。軽いとはいえ、人間を抱えたまま、女性の脚力でここまでのスピードが出るのか？というほど早く。

―――――大丈夫だ。絶対に助ける

と、何度も呼びかけながら、髪を乱れさせ、息を切らし、汗を横に流しながらも走った。一度も止まることなく、走った。

（ワケガワカラナイダガ―――――）

―――――悪くない。

少年の意識があるうち、最後に思考したのはそんな人間らしいことだった。

Hollow

小鳥がさえずるように清々しいとは言えないが、普通の朝。

学園都市の某所にある最新設備満載の教員用4LDKマンション。その一室で亜麻色の髪少年は小さな寝息をたてながら、ベッドの上で寝ていた。

微かに香る胡椒や鶏がらのような中華風の臭い……待て、朝から中華？

「有りえねえだろ オオオオオオオオオオオオオオオオオ
ツ！！」

ボタンッ！ 少年はドアをこれでもぶつ壊れないのが不思議。と
いうくらいの勢いで前方に開くノブ式ドアを開ける。……ドアは

『へっ、てめえの乱暴さなんて慣れてんだよ!!』

もちろん言わないが、壁とドアを繋いでいる金具すら無傷。いや、実際は多少なりとも傷ついているだろうが、この少年がこのマンションに暮らし初めて八年ほどの年月が過ぎている。その中でこんな乱暴したのは一回や二回ではない。少なくとも五十回以上はしているはずだ。なのにこのドアは未だに破壊されず――――

『お返しだッ!!』

「!」――ぐえつつ!
「?」

――おまけに壁の反射を利用して仕返しま
で律義にしてくる。

あがががががががががっ! 丁度ドアが顔面にジャストミ
ーとした少年は苦しみもだえながらも、反射によって閉まったドア――
――もとい偉そうに立ち塞がる壁を憎々しそうに睨みつ
ける。

「……珍しく早起きかと思ったら……なにバカなことしてるじゃん。
早くメシ食べないと学校送れるじゃんよ」

ガチャリ。偉そうな壁の先から普通に入ってきたのは緑色のジャ
ージに白いエプロンをはおった長髪の女性。彼女の名を「黄泉川
愛穂」という。

「……………^{チャーハン}炒飯ですか姉さん?」

「よくわかったじゃん。さすが炊飯器は万能調理器じゃん♪」

朝から炒飯……悪くはないが、朝は白米と味噌汁＋納豆がいいのだが……

得意げに大きく出た胸を張る女性に少々文句を言いたくなる少年。

随分遅くなってしまったが、名を「黄泉川 来栖くるす」という。先ほどを姉と呼んだように「黄泉川 愛穂」の弟である。……血の繋がりはないが。

——— およそ八年前。一特例能力者多重調整技術研究所《とくれいのうりよくしゃ たじゅうちようせいぎじゅつ けんきゅうじょ》。通称…『特力研』を黄泉川の部隊が制圧した日。

当時、ただ能力名『反攻物質』アンチマターと呼ばれ、実験により衰退していき^{くるす}た来栖を抱えて黄泉川は救急車を待たず、病院へと走った。

当時の来栖にもわかっていた通り、肉体的な死はかなり近かったらしい。それを回復させたのが第七学区の病院にいるカエル顔の医者だ。『冥土帰し』^{ヘヴンキャンセラ}と呼ばれるその実力は年齢に相応の肉体まで状態を回復させた。

だが、本当の問題は精神だった。実験によりほぼ完全に破壊された精神は一年やちよつとで元に戻るものではなかった。精神に精通した医者があらゆる手段を尽くしても結局変わらない。そんなことがしばらく続いた毎日。

——ある日、病院にいる来栖の見舞いに来た黄
泉川は言った。

『アンタ、今日から私の弟になれじゃん』

（ハ？）

それは唐突。唐突過ぎた。——本気でこの女
は何を考えているのか……？当時の来栖はかなり疑問に思った。
弟。つまりこの女の家族になれ。と、いうことだ。

（マ アイ マ サ ラ ド ウ デ モ イ イ カ）

何も考えずに来栖は言葉を発さず、一度だけ頷くと、黄泉川は嬉
しそうに微笑み——

「じゃあ、行くよ——来栖^{くるす}」

「……クルス？」

「ん？なんだしゃべれるじゃん。来栖^{くるす}ってのは、お前の名前。いい
名前じゃん、クルスって十字架って意味じゃん？ついでに私が命名

じゃん」

――つまり自分は「黄泉川 来栖」か。……
黄泉は仏教なのにクルス十字架はキリストなんて半端な名前だな。

この時から『反攻物質』は「黄泉川 来栖」として生活をしていくことになる。

――よほど環境がよかったのか？ 黄泉川の行動がよかったのか。不明だが、約一年と半年で来栖の感情は復活。以前とは比べ物にならないほど、人間らしくなった……のだが……

「はあ……だるい。なんで俺が補習なんか……やっぱり、かったりい……！ 学校休む！」

「お前が授業サボるからじゃん。ふざけたこと言っていないでさっさと出るじゃん。あんまり小萌センセに迷惑かけるなじゃんよ。それじゃ、いつてらっしゃいじゃん！」

ばたん。炊飯器で作られた妙にパラっとしてうまいのだが、朝にはあまり食べたくない炒飯チャーハンを速攻で食し、着替えた来栖が「だるい」という言葉を発すると半ば強制的に姉から玄関の外に放り投げられた。

姉が「くじゃん」を多用するように来栖は「だるい。かったるい」

などを多用するようになってしまった。

そのせいか、普通以上に整っている顔立ちをしているのに常時だらしない表情をしているので、浮ついた話は皆無。極力面倒くさいことはやらない。……まあ、困っている人がいたら助けるかな？

「はぁ……あんまり姉さんに迷惑かけるのもアレだな……。仕方ない」

ため息を吐きつつも、タンタンツ、と履きかけの靴を直しながら学校へ向かうスタンバイをする――――
クラウチングスタートの体勢で

「――――目指せ、学校一位」

ダッ。コンクリートの固い地を強く蹴り、スタートの加速を最高の状態へ。50m走5秒前半はいくであろう走りで来栖は疾走する。階段を下り、塀を飛び越え、街の人間をうまく避けながら、砂埃を少々立てながら高速で疾走するなかで、「きゃあっ！ちよつとアンタ！危ないじゃないの！って、待ちなさいよ！」なんて、とある中学生の声が聞こえたが、止まれと言われて止まる人間はいない！

「……って、アナタなんで俺についてこられるの！？俺これでもかなり脚は速いって自負しているんだが、まさか……筋肉少女！？」

「違うわよ!! 自分に電磁加速を与えて一時的に走力を上げているのよ!!」

「『リニア・アクセル磁気加速』かよ!! 『グラビティ・アクセル辰気加速』は使えないよな?」

「なによそれ!!」

むう。中学生にこのネタはあまりにもコア過ぎたか……

走りながらふと、道路の端に備え付けられた時計を見ると――

――8時15分。

「……やべえ。学校一位は消えたか……まあ、今更どうでもいいか。かったるいし」

今更無気力になった来栖は――キキキキキキ
イイイイイイツツ!! 靴の踵を道路に擦りつけ、急ブレーキ。多
少前進したが、恐ろしくバランスの取れた状態で停止した。だが、
隣を走っていた中学生少女は――

「……へっ!?! き、きやあああああああああああああああ
ああっつ!!」

どぼーん。

急に停止することが出来なかった少女は橋に差しかかったところで……川に落下。小規模な水しぶきを上げた。

「……なんか……すまないな。だが、俺には補習があるんだ……。くっ、心苦しいが上条のように君を助けることはできないッ!」

いかにも助けたいけど、理由があるんで。みたいな最もらしいことを言って来栖は中学生のお嬢様女子とは思えない飛んでくる罵声を背に学校へ向け、何食わぬ顔で耳を塞ぎ、走り出した。

H o l l o w 1 (後書き)

ここで主人公の能力などを紹介します。

黄泉川 来栖

年齢16 身長172cm 体重53kg Blood type o

基本的に無気力。口癖は「だるい。かつたるい」。偶に「じゃん」が語尾に付く。元々は置き去り（チャイルドエラー）で特力研で実験を繰り返され、精神が崩壊した日に、黄泉川の部隊が特力研を制圧。黄泉川によって直接病院に運ばれ、以降黄泉川の弟として生活中。

亜麻色の髪に普通以上に整った顔つきをしているが、基本的にだらしない表情しかしていないので、モデルことはあまりない。

能力名…『反攻物質』
アンチマター

この世に存在するあらゆる素粒子の逆の性質をもった素粒子を引き出し、操作する。及び、この世の物理法則を逆の法則を生み出す物質を生成し、操作する。

つまり反物質の生成、操作＋一部の物理の法則逆転。一定距離の物質を総て反物質に変換することも可能。

反物質化された空間とされていない空間ではライデンフロスト現象が発生し、常に対消滅を起こすと何もない空間が発生する。自分を反物質化することで反物質で構成された空間でも自分の被害も防げる。

実際、対抗する物質の反対の性質をもった物質を生み出すので垣根提督が使用する未元物質は理解さえすれば逆の性質をもった物質を生成し、相殺できる。が、膨大なエネルギーが発生する可能性がある。

物理法則である重力の逆の性質を持った反重力場を発生させるを物質生成し、纏うことで高速飛行などができる。反電子の兵器、陽電子砲は撃つとガード不可能超高速の兵器だが、 γ 線が出て周囲に被害を及ぼしたり、周囲を全て反物質化しないと自分も被害があるため、使い勝手がいいとは言えない。対消滅によって発生するエネルギーは膨大すぎなければ有る程度制御可能。

H o l l o w 2

「はい。それじゃ先生プリント作ってきたのでまずは配りますー。それを見ながら今日は補習の授業を進めますよー？」

高校生になり、一学期経^たつ。来栖はそれまでに研究所以外の施設しか知らなく、外の世界は好奇心にあふれていた。が、「いやいや、これは現実^{リアル}じゃないだろ！」と思うことは一つしかなかった。

一年七組の担任、月詠小萌^{つぐよみこもえ}は教卓の前に立つと首しか見えなくなるというとうんでもない教師だった。身長は一三五センチで、安全面の理由からジェットコースターの利用をお断りされたという伝説を持つ、誰^{だれ}がどう見ても黄色い安全帽^{あんぜんぼう}に真っ赤なランドセル、ソプラノリコーダー標準装備の十二歳にしか見えない、学園七不思議に指定されるほどの幼女先生だ。この先生を見たときは本気で言ってしまったものだ。

『えっと……担任の先生のお子さん……かな？』

もちろん。そんなことはなくその後、入学式初日で説教一時間＋新学期初のコンプレックスの卵。

ついでにコンプレックスの卵っていうのは文字通り、逆さにした生卵を、何の支えもなく机の上に立ててみうって事で、^{サイコキネシス}念動力専攻の人間だって脳の血管切れそうになるまで踏ん張ってようやく卵がコケない

ようにする、ふざけた課題だ（念動力が強すぎても卵を割ってしまう。難易度超高）。例によって成功しなければ朝までマジで居残り。さらに追い打ちをかけるように朝、ようやく成功し家の玄関を開けたら————案の定。目にくまを作った姉が仁王立ちしていた。……その先は想像にお任せする。

「はぁ……まったく、だるいなア。補習とか、なんであるんだよ……誰得だよ」

「なんや。くるくるは小萌ちゃんに会いとうないんか？くるくるはロリ好きやろ」

突然、前に座っている学級委員。通称…青髪ピアス（男）がくるつと、方向転換して来栖の方へ向く。

「……アンタと俺と一緒にするな性犯罪者。そして、「くるくる」はヤメロ。どこのドリル屋さんだよ、俺は」

「性犯罪者とは失敬やな。まだ犯罪はしとらへんで！。で、くるくるはどんな娘が好みなん？」

まったく、へんな愛称をやめる気が無い青髪に少々イラッときたが………どんな娘が好みか。考えたこともなかったため、なんとなく考えてみることにした。

「…………年上の巨乳で黒髪ロング？緑のジャージで、体育教師？口癖がくじゃん……アレ……これかなり身近の人のように思えるのだが……」

「……いや、身近どころかどう考えてもくるくるの姉さんやないか！くっそー、身近に美人がいる人間は羨ましいなあっ！そうやろ、カミちゃん！」

「…………えっ？……ああ、そうだな」

来栖の斜め前に座っているツンツン頭の少年。上条当麻はどこか遠いところを見ているような瞳で、曖昧な返事をする。……いつもはこんなのではなく、青髪ともうひとりとバカやってる人間のはずなのだが、今日はどこか憂鬱な感じだった。

「上条、なにかあったのか？三文字以内で済ませられる悩みなら聞いてやるぞ」

「いやいや、三文字は少な過ぎじゃありませんかい、黄泉川さん！せめて三十文字にして！」

「やだ。なんで俺がお前にそこまでサービスしなければいけない。

それに元々悩みなんて聞く気はないしな」

「ひどい！上条さん今日初めて傷つきました！」

「はいそこっ！ それ以上一言でもしゃべりやがったらコロンブスの卵ですよー？」

勘弁してくれ……。妙ににっこりとした笑顔の小萌先生に半ば恐怖を感じながら、先ほどとはうって変って、プリントに黙々と取り組む。

「センサー？ 上条クンが窓の外の女子テニス部のひらひらに夢中になってまース」

――うるせェよ！青髪エセ関西人！！

結局、夏休みの補習のはずが、とぼっちりを食らって完全下校時刻まで上条とともに拘束された。

「……、不幸だ」

「うつせえな。不景気な顔してんじゃねえよ、辛気臭え。あーあ、だりいけど、徒歩で帰るしかないか。俺はこっちだから、ほんじゃあな」

「……ああ、またな」

力なく返事する上条と商店街近くで別れ、来栖は歩き出す。

学園都市の電車やバスの最終便は下校時刻に合わせてある。ギリギリではほとんど間に合わない。そのため、来栖も上条も徒歩でしか下校できなかった。

黄昏時の道を静かに歩きながら、来栖は懐からメモ帳のようなものを取り出し、開く。

「えっと……買い物はない。――……………ん
？『今日は帰りが遅くなるじゃんよ。友達でもいいからちゃんと誰かと一緒に夕飯食べるじゃん』」

どうやら、姉がメモ帳に事前に書き込んでいたらしい。精神治療を

していた時の癖で、未だに誰かと自分がいないときは誰かと一緒に飯を食べるように言われている。……別に今更気にしないが、子供扱いされているみたいでなんか嫌だ。

「……また、上条のところでいいか」

前回は上条のところで夕飯をとった。正直、誰でもいいのだが、青髪はパン屋に居候している身で、悪いだろうし、上条の部屋のとおりである土御門はいるかどうかわからない。最善策はやはり、上条の部屋だった。

「どうせカップラーメンだし、なんか食材でも買っていくか……」

ちょうどタイムセールの時間だったことを思い出して、来栖は近くのスーパーに文字通り、飛び込んでいった。

——この先、消去法を選択によって出会うものを『反攻物質』^{アンチマター}と呼ばれた少年は知らない。

H o l l o w 2 (後書き)

ここで、ヒロインをどうしようか？まあ、氷華かオルソラを一人にしたいのですが、あとふたりほど欲しいですね……。ご意見あったらけるとありがたいです。

H o l l o w 3

「得した♪ 得したなあ♪」

タイムセールという戦争を勝ち抜いた来栖は乳白色のビニール袋に戦利品をこれでもかと、詰め込んだものを持ちながら、嬉しそうな表情で上条のマンションへと歩き向かっていた。

「卵1パック52円に砂糖1kg50円、鶏ももが70円。凄いでしたな。戦ってきたかいがあったぜ……まあ、パックの白米が少々高かったが、デザートに少々お高いプリンまで買えたし良しとするか！」

ほくほくとした気分と表情で、上条の住むマンションのエレベーターの呼び出しボタンを押す。

少々、経つとエレベーターの降下を知らせる静かな音とともに金属の扉が開き、それに乗り込む。

降下の時と同じ音をたて、地面が上昇し、やがて上条の部屋がある階で止まった。

「……………は？————熱っ!？」

エレベーターを降りた来栖が感じたのは熱さ。火災現場のような光景の炎が燃え盛るコンクリートの通路。ドロドロの石油の塊のようなものを中心とした炎の巨人。そして――

「……ん？ 人払いに漏れたのか……？ 悪いけど、ここから去ってくれないかな」

教会の神父が着ているような、漆黒の修道服。肩まである金髪は夕焼けを思わせる赤色に染め上げられ、左右一〇本の指には銀の指輪がメリケンのようにギラリと並び、耳には毒々しいピアス、ポケットから携帯電話のストラップが覗き、口の端では火のついた煙草が揺れて、極めつけには右目のまぶたの下にバーコードの形をした刺青が刻み込んである。
明らかにこの科学の街では場違いな人間だった。

「……オイ、クソガキ。その変な炎魔人さん？ がいる先には俺の知り合いの部屋があるんだよ。テメエが去れ。臭いんだよバーコード野郎」

「バっ……バーコード野郎だって!？」

「黄泉川!？ お前なんで来たんだよ! さっさと逃げろ!！」

…………アレ？上条クン？

炎魔人（？）の陰から上条が叫んでいることに気がついた来栖だが、未だに状況が全く分からない。…………どうなってるんだこりゃ？

「かぁゝみじょうくウウウウウウウウウウン！！なんかイフリートさんの相手していて大変そうだが、状況を説明しろ」

「魔術師だ！！」

「あぁっ！？…………なに、この不良ぶってるガキが？」

「魔術師だ！！」

来栖はいぶかしげに自分の目の前に立っている長身で神父服の男を見る。

かなり必死になっている上条の言葉を嘘だと思いたくはないが、到底信じられることではなかった。

魔術師――――――オカルトやその他の類に該当し、

魔法や魔術、呪術を使い、常人には成しえないことを実現する者の総称。…………こんなものだろう。

科学の街学園都市におとぎの国の住人か……。誠に信じがたい話だ

が――

「さっきから人を馬鹿にしたように……！^{Ash To Ash}灰は灰に――――」

神父服の男――――ステイル・マグヌスは忌々しそ
うにつぶやくと、右手に炎剣を生み出し初める。

「――^{Dust for Dust}塵は塵に――――」

さらにもう一本。左手には青白く燃える炎剣^{えんけん}が音もなく伸びる。

「――――^{Squeamish Bloody Road}吸血殺しの紅十字！」

（まあ、…………面白そうではあるかな……）

――――ドガアアアアアアアアアアアアアアアアツ
ツ――！

二本の炎剣が無防備に立つ来栖と衝突し大爆発を巻き起こした。

「……よ、黄泉川アアアアアアアアアッ!!」

死んだ。確実に死んだ……! そう思った上条は魔女狩りの王を受け止めながら、あらん限りの声で叫んでいた。

上条は来栖の能力を知らないが、同じ高校にいるということはそこまで強力な能力を有しているわけがない! そう思っていた。だが――

「っ………ったく少し遅れたせいで卵ちゃん一個犠牲になっただろうが……弁償しなくていいから殴らせろ」

左手に持っていた買い物袋を地面に置いた状態で、傷一つなく来栖は立っていた。右手にはなにやら目がくらむほど眩しい、光り輝く光球のようなものを持ち、それを握りしめ――
――砕いた。

「なっ………一体どうやって!?」知りたいなら、少しばかり教えてやるよ」

「俺の能力の一部として、反物質の生成、操作ができる。OK? そんなで、俺の前に適当な反物質の壁を生成して、炎に含まれる酸素やらなんやらの物質と衝突すれば、どーん。対消滅が起こります。ついでに、爆発は対消滅によるものな?」

「だがっ！対消滅で発生するエネルギーはどこへいった!？」

先ほどの一瞬で起こった出来事と、来栖の説明に取り乱すステイル。そんな様子に来栖は「やれやれ」と、面倒くさそうに肩をすくめ首を振る。……まだわかっていないのか。と。

「さっき砕いたモノがエネルギーの塊だよ。アンタにぶん投げてもよかったが、この建物ごと破壊しかねないし、俺も上条も危ない。よって、消滅させた。俺は対消滅によって発生する核爆弾くらいのエネルギーなら自分でどうにでもできるんだよ。消すことも、武器にすることも……」

不意に、先ほどまで買い物袋を持っていた左腕を来栖はに前方――
――ステイルへ向ける。

（なんなんだ……なにをやる気なんだ!？）

言い表せぬ恐怖を感じたステイルは怯えながら後ずさる。魔術には精通しているものの、科学にはそこまで詳しくない彼には来栖がこれから何をするかなど、想像もつかなかった。

「――収斂。――なあ、陽電子砲
って知ってるか？」

「……………は？」

「知らないやまあいいんだ。原理は荷電粒子砲って武器と同じなんだけど、対消滅を起こすせいでこちら一体全て陽電子化しないと撃てないモノなんだが……」

そうつぶやく来栖の突き出された左腕。そこに粒子のようなものが収束していき、やがて膨大な輝きを放つ。

プシュー。恐らく来栖とステイルが会話している内に上条が起こしたのであろう。スプリンクラーが起動し、来栖とステイルをずぶ濡れにする。ステイルにとっては致命傷となるかもしれない水。だが、彼は目の前の光景の恐怖に支配され、そのことを考えることなどできなかった。

「荷電粒子砲の威力に加え、対消滅によるエネルギーで物体を破壊し尽くす——————って、いかなり危険な兵器なんだよ！」

ドシユウウウウウウウウウウウウツツ！！！！

左腕から放たれた巨大な光線は一直線に、茫然として、回避行動も
取ろうとしない魔術師ステイル・マグヌスへと向かい。その身体を
全て覆い尽くした――
――。

H o l l o w 3 (後書き)

後書き やっぱり有る程度、発生するエネルギーも制御できなければ何にもできずに、ただ地球破壊爆弾を有しています。状態になりかねませんよね。感想、評価、ご意見、お待ちしております

H o l l o w 4

「……………ふう。さすが、上条。『
イマジン・ブレイカー
幻想殺し』はある意味最強だな」

「お、お前……心臓に悪いことさせるなよ！ま、マジで死ぬかと思
った……」

へなへなど、その場に力なくへたり込む上条。――
その背後には赤髪の魔術師、ステイル・マグヌスが白目をむいた状
態で、気を失って倒れていた。

――つい数秒前。来栖が陽電子砲をステイルに
向けて放った瞬間、飛び込んできた上条が右腕に宿る力。『イマジン・ブレイ
カー幻想殺
し』でステイルに直撃するであろう陽電子砲を防いだ。……………実
は来栖はこのことを予測済み。そして、本気で死の恐怖を感じたス
テイルはその場で気絶。術者がいなくなったためか、『イノケンテイ
ウス魔女狩りの
王』も消え去った。

「とにかく、その子をもってずらかるぞ」

「え、どうしてだ？」

「テメエが火災報知機鳴らして、スプリンクラーまで動かしたからだよ！！」

ああ、そうか！とようやく理解した上条は修道服と思わしき、服を纏った少女を抱えて走り出す。来栖もしっかりと、スーパーという戦場で勝ち取ったビニール袋に入った戦利品を持ってそれに続く。

（面白いことになってきた……しかも『無気力感』を感じない。いずれ大事になるだろうな）

上条の背中で眠っている修道服の少女――

インデックス

禁書目録を見る来栖の表情は普段とは比にならない――

――獲物を見つけた捕食者のような、獰猛で危険なものだった。

しばらく消防車と救急車サイレンが鳴り響いた表通り。その近くに

ありながらも人の目にはつきにくい汚い路地裏で来栖と上条。そしてインデックスは地に座っていた。来栖と上条、二人の表情はどこか疲れたようで、悔しげだった。

「……つまり、能力開発を受けた人間は『魔術』とやらを行使することはできない。そんなものであつてるよな？」

「うん……………。そうだよ……あなたたち『才能ある人間』では……『才能ない人間』のために作られた魔術^{システム}を使うことは……、できない……………」

来栖の問いに、途切れ途切れで答えるインデックスの回答を聞いた上条は、くそっ！と地面を殴る。

インデックスが説明した魔術とは、超能力の才能のない人間が、超能力者のマネをしたから生み出されたもの。そして、『才能ある人間』と『才能ない人間』は回路が違う。だから、能力開発のための『時間割』^{カリキュラム}を受け、たとえスプーンを曲げられなくても、脳を開発されており、本当の無能力者^{レベル0}というのは存在しないのである。つまり、この都市の生徒は絶対に魔術を行使することは不可能。

「……待て、確か魔術ってのは『才能のない』一般人なら誰でも使えるんだったな？」

「……え？うん」

「なにか思いついたのか？」

急に希望を持ったような表情になる上条。少々疑問になる来栖だが、
ん？一般人……そういうところか。

「一般人」という単語で理解に至った。

「教師なら能力開発は受けていない……そういうことか？」

「ああ、……あの先生、この時間でもう眠ってるなんて言わねーだろうな」

「……失礼な話、眠っていても可笑しくはないかもしれない」

来栖と上条は同人物を重い浮かべる。

ふたりのクラス担任、身長135cm、教師だが幼稚園にいても全く違和感のない人物————月詠小萌を。

それは路地裏から歩いて十五分くらいのところにあった。

戦前から存在し、東京大空襲も乗り切りました！という感じの超がつくほどボロい木造二階建てのアパート。通路に洗濯機がドカンと置いてあるそこが、月詠小萌の住み家だった。

来栖が高校初日の入学式で大変な説教を受けた時――――

「なにかあったら、ここに来るです。黄泉川ちゃんはいろいろ抱えてそうで、心配になるですから」

なんて、母性溢れる言葉と共に住所の記載されたメモ用紙を渡されたため、表札を確認する必要はなく、スムーズに『つくよみこもえ』とひらがなで書かれたドアプレートへと到達できた。

ぴんぽんぴんぽーん、と二回チャイムを鳴らしても………返答なし。少タイラついたのか、上条は思いっきりドアを蹴破る事にしたらしく――――ドゴン！ と上条の足がドア板に激突して凄まじい音を立てる。

だが、ドアはびくともしなかった。律儀にもこんな時まで上条は『不幸』らしく、足の親指の辺りでグキリと嫌な音を聞いたような……気がした。

「……ッ!!」

「どけ上条。警備ロボを10m以上ふっ飛ばした俺の脚で――――」

——そのふざけた扉をぶち壊す!!」

「わわわわわわわ、対新聞屋さん用にドアだけ頑丈なんですー！
今開けますから壊さないでくださいー!？」

来栖はチィッ、となぜか舌打ち。上条は涙目で素直に待ってりや良
かった、と思っていると、ドアががちやりと開いて緑のぶかぶかパ
ジャマを着た小萌先生が顔を出した。のんびりした顔を見ると、位
置の関係で上条が背負っているインデックスの背中の傷は見えてい
ないようだった。

「うわ、黄泉川ちゃんに上条ちゃん。新聞屋さんのアルバイト始め
たんですか？」

「シスター背負って勧誘する新聞屋がどこにいる？」上条は不機嫌
そうに、「ちよっと色々困ってるんで入りますね先生。はいごめん
よー」来栖も便乗するように「すいませんねー。こちらにも事情が
あります」

「ちよ、ちよちよちよちよっとーっ！」

ぐいぐい横に押される小萌先生は慌てて来栖と上条の前に立ち塞^{ふさ}が
るように、

「せ、先生困ります、いきなり部屋に上がられるというのは。いえそのっ、部屋がすごい事になってるとか、ビールの空き缶が床に散らばってるとか灰皿の煙草が山盛りになってるとか、そういう事ではなくてですね!」

「うわゝ。煙草くっさいですねゝ。コラッ!今でもそんな体なのにもっと成長しなくなっちゃうでしょ!!」

「す、すいませんですー……」

「うん。まさにその通りだな……じゃねえーよ!先生、コイツ怪我してるんだ!」

「?上条ちゃんギャグですかー……って、ぎゃああ!??」

「あ、気付いていませんでした?」

「上条ちゃんかみじょうの背中が大っきくて怪我けがしてるって所まで見えなかったんです!」

突然の血の色にあわあわ言ってる小萌先生をぐいぐい横に押して来

栖と上条は勝手に部屋へ入る。

なんていうか、競馬好きのオッサンか、多額の借金を抱えて酒と煙草に頼るしかなくなった中年の住んでそうな部屋だった。ボロボロの畳たたみの上にはピールの缶がいくつも転がり、銀色の灰皿には煙草たばこの吸殻すいがらが山盛りにされている。現実リアル、部屋の真ん中にはガンコ親父がひっくり返しそうなちゃぶ台まであった。

「先生の肺と肝臓を見てみたくなりましたよ……今度健康診断に一緒に行きましょうか？」

「え、遠慮するです……」

「そ、残念」

言葉ではそう言っているが、全く残念そうでない来栖。上条は散らばっているビール缶を蹴散らして場所を空けていた。布団を出している余裕もなかったため、ボロボロの畳の上に傷が床に触れないよう、慎重にインデックスをうつ伏せに寝かせた。敗れた服の布が遮っているせいで直接傷口は見えなかったが、赤黒い染みが液体が漏れるように溢れ、広がっていた。

「き、救急車は呼ばなくて良いんですか？　で、電話そこにあるですよ？」

小萌先生がブルブルと震えながら部屋の隅を指差す。何故か黒いダイヤル式の電話だった。……なぜいちいち昭和風なのやら。

「―――出血に伴い、血液中にある生命力が流出しつつあります」

「!?―――上条、これはなんだ？」

インデックスは相変わらず倒れたままだったが、倒れたまま、まるで壊れた人形のように顔を横倒しにしたまま、静かに目を開けていた。

蒼ざめた月の光よりも冷たく、時を刻む時計よりも静かな瞳。それは来栖にかつての自分を思い出させた。

―――過去の自分と同じ、人間としてありえないほど完璧な、『冷静』なる瞳。

「―――……っ！悪い、上条。俺は先に帰る。インデックスが平気だったら連絡くれ！」

「えっ?―――おい！」

「黄泉川ちゃん!？」

上条と小萌が後ろで叫ぶが、来栖は振り返らずにボロアパートから飛び出した。

あの瞳を見てはいられなかった。まるで昔が蘇るようで――――

突然飛び出した来栖に呆然とする上条と小萌。だが、明らかに様子がおかしかったのはふたりにもわかった。

「まったく、なんなんだよ……」

「黄泉川ちゃん……ビニール袋忘れてるです……」

二人がそうつぶやく空間には、ぽつんと持ち主に置いて行かれた食材の入った袋が取り残されていた。

H o l l o w 4 (後書き)

うゝん。本当にヒロインどうしよう……なんでもいいんで意見くれたら嬉しいです。次は……恐らくねーちゃんと来栖がやり合うのかな？

感想、評価、ご意見、お待ちしております。

H o l l o w 5

「そうか、インデックスって子は回復したのか……すまなかったな、急に飛び出したりして……」

『まだ熱みたいなのは出てるけどな。まあ、驚いたけど気にする必要はねえよ。お前にも事情があったのだろうしな』

「そう言ってくれると助かる。じゃ、」

ああ、と電話越しに上条の返事を聞くと来栖は携帯の通話をピツ。切って、ズボンのポケットにしまう。

昨日。ボロアパートから飛び出した来栖はそのまま自分と姉の住む、教員用4LDKマンションに帰宅した。遅くなると言っていた通り、そこそこ遅い時間なのにも関わらず姉はまだ帰宅していなかったのが、今回は幸いし、ばれてもいないので特に咎められることもなかった。

（それにしても……魔術師ねえ。前は能力で無効化できたものの……どこまで通用するか……）

ついこの間戦闘した魔術師、ステイル・マグヌスは炎を操る魔術師

だったため、反物質の障壁でどうにかできたが、物語に出てくるようなオカルト……つまり『天罰』や『竜の吐息』ドラゴンブレスなどのような原理不明で理解できない攻撃を繰り返されたら、回避に徹するしかない。

最悪、陽電子砲をぶっ放したり、エネルギーの塊をぶつけてしまえばいい話だが、陽電子砲に含まれる反物質が対消滅する際に発生するγ線——つまりエネルギーを抑制することは距離によっては難しい。エネルギーの塊を投げつけるとすると、地面に触れただけで爆弾になってしまう。下手すれば自分もおしゃれだ。

（となると、自然法則の逆転が要になってくるか……）

自然法則の逆転というが、実際はそんなことではない。実際にできるのは自然法則の一部とされてきた物理法則の逆転だ。

物理法則の逆転はあくまで物理学の中で提唱されている法則を逆転させることができることである。だが、自然の法則を逆転させることができてしまえば実質、時間を巻き戻しできたり、全てをなかったことにできてしまう。

———そんなことができるのは本物の神だけだ。

（魔術師とやらにも上位階級なんかあったら、そんなことできるヤツもいるかもしれないがな……）

これまで全く想像もしえなかった存在との相対。自分でもよくはわからないが、この事件が簡単に終わるはずがない。そう確信していた。

いつも通り締まりのない顔だが、そこから想像もつかないほど神経を集中し警戒しながら、来栖は学園都市の人ごみの中へ紛れ込んでいった。

上条とインデックスがいるボロアパートの一室――
――そこから六〇〇メートルほど離れた、雑居ビルの屋上で、
ステイルは双眼鏡から目を離れた。

インデックス
「禁書目録に同伴していた少年の身元を探りました。……禁書目録
は？」
かのじよ

ステイルはすぐ後ろまで歩いてきた女の方も振り返らずに答える。

「生きてるよ。……だが生きているとなると向こうにも魔術の使い手がいるはずだ」

女は無言だったが、新たな敵よりむしろ誰^{だれ}も死ななかった事に安堵^{あんど}しているように見える。

女の歳^{とし}は十八だったが、十四のステイルより頭一つ分も身長が低かった。

もつとも、ステイルは二メートルを超す長身だ。女の身長も日本人の平均からすればやはり高い。

腰まで届く長い黒髪をポニーテールにまとめ、腰には『令刀^{りょうとう}』と呼ばれる日本神道の雨乞^{あま乞}いの儀式などで使われる、長さ二メートル以上もある日本刀が鞘^{さや}に収まっている。

ただし、彼女を『日本美人』と呼ぶのは少し抵抗があった。

格好は着古したジーンズに白い半袖^{はんそで}のTシャツ。ジーンズは左脚の方だけ何故^{なぜ}か太股^{ふともも}の根元からばっさり斬^きられ、Tシャツは脇腹^{わきばら}の方で余分な布を縛ってヘソが見えるようにしてあり、脚にはヒザまであるブーツ、日本刀も拳銃^{けんじゅう}みたいな革^{ホルスター}のベルトに挟むようにぶら下げてある。

こうして見ると西部劇の保安官が拳銃の代わりに日本刀を下げているようにも見える。

来栖がこの格好を見たら絶叫しそうなもので、香水臭い神父姿のステイルと同様、まともな格好とは思えなかった。

「それで、神裂^{かんざき}。アレは一体何なんだ？」

「それですが、あの少年の情報は特に集まっています。少なくとも魔術師や異能者^{たぐい}といった類ではない、という事になるのでしょうか」

「何だ、もしかしてアレがただの高校生とでも言うつもりかい？」

ステイルは口に唾^{たばこ}えて引き抜いた煙草^{にら}の先を睨^{にら}んだだけで火をつける。

「……やめてくれよ。僕はこれでも現存するルーン二四字を完全に解析し、新たに力ある六文字を開発した魔術師だ。何の力も持たない素人が、裁き^{イノケンティウス}の炎を防げるほど世界は優しく作られちゃいない」

ステイルの最強の魔術が顕出した姿^{ウス}——————————魔女狩りの王。それを防いだ正体不明の右手。アレがただの一般人ならまさしく日本は神秘の国だろう。

「そうですね」と、神裂——は目を細め、

「……むしろ問題なのは、アレだけの戦闘能力が『ただのケンカっ早いダメ学生』という分類カテゴリとなっている事です」

この学園都市は超能力者量産機関という裏の顔を持つ。

五行機関と呼ばれる『組織』に、ステイルや神裂——その上の『組織』は禁書目録の事を伏せるとはいえ、事前に連絡を入れて許可を取っていた。名実ともに世界最高峰の魔術グループでさえ、敵の領域フィールドでは正体を隠し続ける事は不可能と踏んだからだ。

「情報の……意図的な封鎖、かな。しかも禁書目録の傷は魔術で癒いやしたときた。神裂、この極東には他に魔術組織が実在するのかい？」

ここで彼らは『あの少年は五行機関とは別の組織を味方につけている』と踏んだ。

他の組織が、上条の情報を徹底的に消して回っていると勘違いしたのだ。

「……この街で動くとなれば、何人も五行機関のアンテナにかかるはずですが」

神裂は目を閉じて、「敵戦力は未知数、対してこちらの増援はナシ。難しい展開ですね」

それはまさに勘違いだった。上条の幻想殺しは『異能の力』を相手にしない限り効果はゼロ。つまり学園都市の身体検査に使う測定機械「身体検査に使う測定機械」に傍点」でチカラを測る事ができ

ない。よって、不幸にも上条は最強クラスの右手を持っているのに^{レベル0}無能力扱いなのである。

「しかし、問題はあの少年よりももうひとり……ですよね」

「……ああ、目覚めたとき、生きていたのが不思議だったよ。確かに僕はあの時『死ぬ』はずだった」

突然現れた少年の左腕から放出された、あの膨大な光の奔流。いかなる生命にも破滅を与える陽電子砲が眼前に迫る瞬間。それを思い出したのか、ステイルは少々身震いしながら淡々とつぶやいた。

「もうひとりの少年については身元は探れました。しかし……」

「？ なんだい」

どこか暗い表情をして言い洩る神崎の様子に疑問を覚えるステイル。数秒経っても何も言わない神裂に催促をしようとするが、必要なかった。

「名前は黄泉川 来栖。16歳。〇〇高校一年。家族は同居している姉だけ。それしかわかりませんでした……」

「……もつと詳しい情報は？もしかしてなかったとでも言うのかい」

「……ええ、それ以外は全て『末梢』されていました。……能力も含め」

「『末梢』だって!？」

ふざけるな!そんなことがあっていいのか!？あまりにも予想外すぎる神裂の言葉に怒鳴りたくなったステイルだが、申し訳なさそうにする神裂の表情を見てはそんなこともできなかった。

学園都市最強である七人のLEVEL5能力者でさえ、有る程度の情報公開がされているのに名前、年齢、家族環境くらいしかわからない。しかも、初めから載っていないのではなく、『末梢』された。

――――つまりは学園都市の上位に君臨する機関が意図的に情報を抹消し、そのほぼ全てを隠蔽した。

そう考えるしか、ステイルは納得できない。科学の街が外部の人間を嫌うように外部の敵へと情報を渡さない。……よく考えられている。つくづく敵地の恐ろしさをステイルは感じた。

「神裂、もうひとりは君に任せる。僕では恐らく力不足だろう」

皮肉でもなんでもなく、ステイルは神裂に言った。半ば自虐とも取れるが、この場合は立場をわきまえているといった方が適切だろう。

「わかりました。それで、あなたの受けた攻撃というのは？」

「……情けない話、あの少年の左腕から放たれた光が間近に迫ったときに頭を打ったのか、よく覚えていないんだ……あの少年がなにを言ったのかも。ただ、光線兵器の類だと予想するよ」

「……そうですか。それにしても――
――」

「……ああ、楽しそうだよね」

何か激怒しながら少年の頭にかじりついている少女と、両手を振り回して暴れている少年の姿が窓に映っている。赤髪の魔術師は双眼鏡も使わず、六〇〇メートル先を見て眩つぶやいた。何か、とてつもなく重い。重い液体を吐き出すかのように――

H o l l o w 5 (後書き)

うゝん。やっぱり、禁書目録の小説を書いているときは禁書目録の
o pとかe dを作業用B G Mにすると、はかどるなあ。

感想、評価、ご意見などお待ちしております。

H o l l o w 6

「黄泉川 来栖」という人間は一度知り合ってしまったえば誰もが、「ああ、コイツはだらけだ」と思ってしまう人間である。もちろんその認識は全く間違っていない。基本的に厄介事からは逃げる性格だし、上条のように困っている人を放っておけない性分でもない。

そんな彼がなぜ、『魔術』インデックス『禁書目録』といういかにも厄介そうな問題に首を自ら突っ込んでいるのか？簡単だ。彼にとっていま直面している問題は

――――
退屈ではない。

ただ、それだけ。高校の授業はもちろん、自分の行動。学園都市を歩いているときさえ、彼は退屈なのだ。

既知感。いわゆるデジャヴュといわれるヤツだ。幼いころの実験のせいなのか不明だが、彼が受けた授業、教師の話、歩いた道など、ほぼ全てに「これを知っている、経験している」といった感情が湧く。だからこそ、来栖は姉と過ごす時間、上条や青髪、土御門とバカをする。というもののしか『退屈でない』と感じることができなかった。

しかし、これから永遠に続くと思われていた既知感はたった一日

……いや、数分か数時間で崩れ落ちた。

「おっふる♪ おっふる♪」

来栖と上条の隣で、両手に洗面器を抱えた安全ピンだらけの修道服の――――――――――インデックス禁書目録と呼ばれる少女によって。おそらく洗濯したのだろう。後ろにあった血の跡は無く、真っ白になっていた。

「ねえ、ねえ、くるす、とうま！ ジャパニーズ・セントーにはコーヒ―牛乳があるって、こもえが言ってた。コーヒ―牛乳って何？ カプチーノみたいなもの？」

「……カプチーノとかエスプレッソが出てくる銭湯って凄いシユール……。んーなんというか、コーヒ―が少量で、砂糖が多め。大半が牛乳って感じか？ どうだ、上条」

そんなもんだろ。と上条。そういえば、つい先ほどインデックスの願いで銭湯に向かう途中に名前を聞かれたので来栖は名乗った。名前の由来の通り、『クルス』とはキリシタン用語で『クルス十字架』。それに苗字は『黄泉川』。聞いた瞬間に「くるすは十字教徒なの？ 仏教徒なの？」って聞かれたものだ。もちろんどちらでもないと答えたが。

「そういえば、お前にやデカイ風呂は衝撃的かもな。お前んトコつてホテルにあるみたいな狭っ苦しいユニットバスがメジャーなんだろう？」

「んー？ ……その辺は良く分かんないかも」

不意に言った上条にインデックスは本当に良く分からないという感じで小さく首を傾げた。

「私、気がついたら日本こちにいたからね。向こうの事はちよつと分からないんだよ」

「……ふうん。何だ、どうりで日本語ぺらぺらなはずだぜ。ガキの頃ころからこっちにいたんじゃ、お前ほとんど日本人じゃねーか」

ん？ なら英国は異国イギリスの地といっても過言ではないのか？ 来栖が聞いた限り、インデックスは「イギリス教会まで逃げ込めば安全」と言っていた。地元ではなく、異国の地へと助けを求めて逃げる。どこか映画化でもされそうな話だ。

「あ、ううん。そういう意味じゃないんだよ」

と、インデックスは長い銀髪を左右に流すように首を振って否定

した。

「私、生まれはロンドンで聖セントジョージ大聖堂の中で育ってきたらしいんだよ。どうも、こっちにきたのは一年ぐらい前から、らしいんだね」

「「らしい？」」

考え込んでいた来栖と上条が曖昧あいまいな言葉に思わず眉まゆをひそめた所で、

「うん。一年こっちにきたときぐらい前から、記憶がなくなっちゃってるからね」

インデックスの表情を見た来栖は驚愕した――
――笑っていた。

本当に、生まれて初めて遊園地にやってきた子供のように。
完璧すぎる笑顔。逆に完璧過ぎて、その裏にある焦りや辛つらさが見て取れた。

「最初に路地裏で目を覚ました時は、自分の事も分からなかった。だけど、とにかく逃げなきゃって思った。昨日の晩ご飯も思い出せないのに、魔術師とか禁書目録インデックスとか必要悪ネセサリウスの教会とか、そんな知識ばっかりぐるぐる回ってて、本当に怖かった……」

「……じゃあ。どうして記憶をなくしちゃったかも分かんねーって訳か」

上条にうん、という答え。くそつたれが……。魔術師への、そして自分への怒りを上条がつぶやくと

「————あー。悪い、どうやらタオル忘れちゃったみたいだ。悪いけど先、行っててくれ」

不意に、思い出したようにやっちゃった。と言いたげな、ぼつの悪そうな顔で来栖が言った。

忘れもののしちゃダメなんだよ！と、インデックス。ごめんごめんと来栖は謝る。

「タオルなら俺の貸すけど？」

「野郎の使ったタオルなんているかボケ。ほらさっさと行きなよ。すぐに行くから」

申し出を断ると、早く来いよー！という上条と、早くするんだよー！。というインデックスに道化師のような胡散臭い笑顔で手を振りながら、その姿が完全に視界から消えるまで見送った。

「……………さて、こんばんはお姉さん。アナタも僕と『銭湯』行きませんか？」

「その申し出は謹んでお断りさせていただきます」

そりゃ、残念だ。と、聞こえてきた女性の声に対し、心でつぶやく。

声は突然、本人は十メートルぐらい先の、広い三車線道の中心に立っていた。

先ほどまで何もなく、誰もいない目の前の三車線道路。そこに女性突然出現した。

「あの不良のガキが言ってた『人払い』ってヤツか……。好都合といえど都合だが……」

「よく覚えていますね。その通りですよ。ただ、この一帯にいる人に『何故かここには近づこうと思わない』ように集中を逸^そらしているだけです。多くの人は建物の中でしょう。ご心配はなさらずに」

ご説明どうも。いつもの様なだらしない表情ではなく、目の前の存在を『敵』とみなし、睨みつけながら吐き捨てる。

女はTシャツに片脚だけ大胆に切ったジーンズという……まあ、趣味は人によって違うだろ。で済ませられる範囲だった。が、

腰から拳銃^{けんじゅう}のようにぶら下げた長さ二メートル以上の日本刀が周囲の空気さえも凍える殺意を振りまいていた。刀身は鞘^{さや}に収まっ

て見えないが、まるで古い日本家屋の柱みたいな歴史を刻んだ漆黒の鞆が、すでに『本物』を裏付けていた。

——この女はヤバイ。

この女性の連れであろう魔術師、ステイル・マグヌスにも危険とは感じたが、来栖の目の前で腰に差した武器も構えずに佇んでいる者はその比ではなかった。妙に肌に触る冷たい汗のようなものが、頬を伝って首元まで流れる。

「黄泉の川に十字架^{クルス}、ですか——————なんとも複雑な反応をしざるを得ない真名^{まな}ですね」

「最初はそう思ったよ。だけど、姉さんがつけてくれた名前だ。俺という存在の証でもある。綺麗なお姉さんでもバカにしたら怒るよ？……で、お姉さんは？」

「ご気分を害したのであれば謝罪します。私は神裂火織、と申します。……できれば、もう一つの名を語る前にそこを通してはくれませんか？」

「……もうひとつ？」

「魔法名、ですよ。……ああ、あなたは知りませんでしたね。つまりは……『殺し名』です」

殺し名。そこから思考するに、その名を相手に名乗った場合は相手を殺す。と、いうことだろう。

危険。危険危険危険危険危険危険。おそらく彼女はそれを名乗った瞬間に本当に殺しに来るだろう。最高に危険な感じがする。だが――

「……ああ、……………」

やはり決まっているルートを進むのは楽しくない。人生に『既知』なんてあったら最悪だ。全くもってつまらない。

――だから。

黄泉川来栖は善意でも、魔術師に追われる少女に同情したわけでもなく

「悪いけど、ここから先は通行止めだ」

そうですか。短くつぶやくと神裂火織はその腰に差した得物に手を添える。

ただ、自分の人生を……目の前に有る『未知』を愉しむために
黄泉川来栖は猛禽の様に広げた左腕を空へと突き出し、構えた。

H o l l o w 6 (後書き)

ああ、ねーちゃんにフラグを立てるか……思案中。……夏休み有意義に使わなくてはな……。

H o l l o w 7

「ひとつだけ……ひとつだけ聞かせてはくれませんか？」

相対する魔術師————神裂火織は腰に差した二メートルほどの得物に手を添えながら静かに、問う。
対し、どうぞ。と返す。聞かれる問いなんて予測はついていた。

「では、あなたは————」

「善人……ではありませんよ」

来栖が短く、神裂の瞳を見据えながら述べる。それが、開戦の合図となった。

一瞬。本当に一瞬だけ。空間が歪んだように、神裂の右手がブレ——消えた。

「ッ!？」

アレはマズイ。危険だ。脳内が危険信号を発する、その前に来栖は行動していた。

瞬時に左手に超微量の反物質を生成。それを手放し、空中に漂う粒子に衝突させ――――――
エクスフローード
爆発。

空中で対消滅を起こし、爆発によって捲き上がった地面の破片を盾にして敵の攻撃を防ぐ作戦だ。敵の攻撃が得体のしれないモノの場合、反物質の障壁は危険すぎる。これなら刀による攻撃も防ぐことは可能に加え、捲き上がった破片によって目くらましにもなる。最善の防御手段――――――だが、

来栖が防御のために捲き上げた破片ごと、目に見えない『何か』は風を唸らせ、恐るべき速度で襲いかかってきた。

「――――――チィッ!!」

脚に力を込め、瞬時にバックステップ。だが、それだけではあの『何か』を避けられない。それはわかっていたからこそ、脳で瞬時に最善の策を思考し、施行する。

――――――決定。バックステップをしながら、空中で先ほどと同じくらい超微量の反物質を生成、落とす。もちろん空中粒子と反物質は反応し、

ドン

ドンッ！

ドン

対消滅を起こし、爆発する。防御のためではない、攻撃の勢いを殺すのと自分を後方に吹っ飛ばすための行動だ。

あの見えない何かが、刀の純粹な斬撃によるものなら何回かの爆発で殺せる。まさか、あの刀が伸びているわけではあるまい。予想は的中していたのか、爆発で少々吹っ飛びようやく地に足がついたときにはなにも襲ってくることはなく、無傷。と、言いたかったが爆発による破片が身体にぶつかったのだろう、脛辺りに小さい傷を作っていた。……魔術師がこれだけか？

「何度でも、問います」

アスファルト

地面の破片の煙が晴れた先で、一本。二本、三本四本五本六本七本————都合七つもの直線的な『刀傷』が平たい地面の上を何十メートルに渡って走り回る。様々な角・度からランダムに襲う『刀傷』。それは鋼鉄の扉に生爪なまつめを剥はがす勢いで傷をつけていた。

————しかし、来栖はその場で一步の動かずに佇んでいた。元々武器など有していないが、全てを消滅させることもできる最強の両手もだらんと力なく下に垂らしたまま。

「……ッ……」

頬、肩、腕、脚。全身にまんべんなく襲う痛みに顔が歪むが、全くと行って致命傷になるレベルの傷などひとつもなかった。むしろ下手したら道端でつまずいて転んだ方がまだ怪我のレベルが高いかもしれない。かなり精密に計算された、本当に『剣』を極めた者にしかできない。まさに達人の為せる技だった。

「私は、魔法名を名乗る前に彼女を保護したいのですが」

チン。と刀を鞘に納め、そのまま右手を刀の柄つかに触れたまま、神裂は憎悪も怒りもなく、本当にただの『声』を出した。

「……………く、」

可笑しい。可笑し過ぎる!!

嘆きでも、相手の力が強すぎる故の自虐でもなく、ただ可笑しくて可笑しくて、滅多に歪むことのないその口を三日月のように歪め、黄泉川来栖は声を出さずに……………笑っていた。

「何が可笑しいのですか？まさか、絶望してやっきになったというわけではありませんよね。それなら恥じることはありません。ロンドンでも十指に入る魔術師を相手に、三十秒も保てばかなり……」

―――」

「…………あー。すいません、変な勘違いしないでくれますか？まだ全然やる気ですよ」

先ほどのまでの笑いも、相手を睨みつける敵意の眼光もそこにはなかった。あっけらかんと、友達と世間話でもするかのように、何の警戒心も無く来栖は言い放った。

「…………どうして……………!!」

明らかに戦いをする人間の姿ではない。そんな様子の来栖に神裂は疑問を覚えた。なぜここまでするのか……。再度、『七閃』と呼ばれ、人を七回一瞬で殺せる技を目の前に向けて繰り出す。

本当に一瞬で人を七回殺せ、まさに瞬殺できる奥義。アスファルト地面を削り、周囲の物体を全て切り裂きながら迫る斬撃。来栖の脳内も危険信号をさつきから煩いほど発していた。

「…………やっぱ、お姉さん優しい人だよ」

回避行動も取らずに、先ほどと同じく一步のその場から離れずにつぶやくと、左手を前方へ向ける。

もしかしたら、左腕がバラバラになるかもしれない。既に来栖の能

力は発動していた。

そして、襲いかかる斬撃は――

「――な……………」

来栖に届くことはなかった。バラバラになるかもしれない突き出されている左腕も全くの無傷。にやりと、笑みを来栖は浮かべ、技を防がれたのか、何が起こったのかわからない神裂は一点を、相対する少年の驚愕の表情で見つめていた。

そんな神裂を一目見ると、来栖は自分の足元を見る。…………アスファルトやら、コンクリートやら鉄やら、そしてかなり見えづらかったが、七本。ピアノ線のような、おそらく『ワイヤー』であろうものが落ちていた。

「何をしたのですか……………」

心の動揺は隠しきれなかったが、できるだけ普通にただの『声』を出した、神裂。無視しているわけではないが、来栖は返答せずに七本のワイヤーを拾い上げ、掲げた。

「あのガキとは違うことを話すけど、アナタが力を加えた物質。つまりはこのワイヤーだ。それに対して、『慣性の法則』を逆転させ

る壁を作って、力の加えられた物質は停止するようにした。ということですよ」

物体に外部から力がはたらかないとき、または、はたらいていてもその合力が0であるとき、静止している物体は静止し続け、運動している物体はそのまま等速度運動（等速直線運動）を続ける。これが慣性の法則だ。

先ほど来栖が逆転させたのは厳密に言えば『運動している物体はそのまま等速度運動（等速直線運動）を続ける』という法則のみである。これにより、神裂によって力を加えられたワイヤーは『運動している物体は』停止し、地に落ちた。

慣性のもう一つの法則である『静止している物体は静止を続ける』という法則は逆転しない。逆転したら力を加えてもいないのに、物体が勝手に動き出す。なんて事態になりかねないからであり、今来栖が手に持っているワイヤーは神裂へと向かって行っただろう。

「さて、これだけでアナタの手を封じた。とは思わないけど……」

手に持ったワイヤーを全て手放し、今度は神裂ではなく、来栖が『ただ』話をするように語りかける。

「聞かせてくれませんか？アナタが『悪』になろうとしている理由

を

H o l l o w 7 (後書き)

実際、慣性の法則を逆にすると力の加えられた物質が停止する。かどうかは分かりません。間違ってたら『自分だけの現実』ってことにしてください。

……すみません。

H o l l o w 8

「まず、アナタは『魔法名』ってのを名乗っていないってこともあるだろうけど、俺を殺す意思が全く感じられない。おっそろしく正確に、致命傷どころか対した傷にもならない部分ばかり攻撃してる。間違っていないせんよね？」

全てがお見通しの様に、的確な答えを出し確認する来栖。対して、神裂は無言のまま何も言葉を発しない。

……凶星か。うつむいているのか、影が差した神裂の表情からは何も読み取れなかったが、無言ということは肯定と同意義だ。そう解釈して来栖は続ける。

「あのガキ……スタイルって言ったか？アイツは俺の存在を見止めると、普通の人間なんて簡単に溶けちゃうほどの炎で攻撃してきたことから、明らかに殺す気だった。交わした言葉なんて一言二言くらいだし、交渉するって気もなさそうだった。それに比べ、アナタはさっきから威嚇みたいな攻撃ばかりで、何度も退けと言っている。そんなアナタがなぜあの子を追う悪になっている？それにさっきから、アナタの顔は――――――」

自らの罪に苦しむ咎人のようだ。言いかけた瞬間、うつむいていた神裂は顔を上げ、対峙している黄泉川来栖という少年に対し口を開

いた。

「私だって、好きでこんな事をしている訳ではありません」

そんなことはわかっている。それをわかっているように神裂はさらに言葉を紡ぐ。

「けど、こうしないと彼女は生きていけないんです。……死んで、しまうんですよ」

悲痛を訴えるように信者のように、泣き出す前の子供みたいに神裂かわり火織は言った。

「私の所属する組織の名前は、あの子と同じ、イギリス教会の中にある——必要悪ネセサリウスの教会」

血を吐くように、自らを苦しめ戒めるように、言った。

「彼女は、私の同僚にして————大切な親友、なんですよ」

予想外。というわけではない。表情で確認することはかなり困難だったが、苦しむように攻撃を続ける彼女を見ていればそんな可能性も予測はできた。

それでも、耳を疑った。追われている側の人間――――
―――インデックス禁書目録と追っている側の人間――――神
―――かおり裂火織スデイル・マクススが同じ教会の、同じ組織に属しているということ。
つまり、神裂の連れであるもうひとりの魔術師も同じ教会の人間だということだ。

「…………なぜ、彼女を？俺は特に何も聞かされていないから彼女が何を抱えているかなんて知らない。そこも踏まえて説明、してくれ

ませんか？」

「……わかりました。ここまで関わってしまったらもう隠すこともありません。——彼女が抱えているのは『一〇万三〇〇〇冊の魔道書』。世界中で門外不出の品です」

「待て、あの子はそれを常時抱えているということですか？あの体の中に」

「……ええ」

短く、二文字で神裂はそのことを肯定した。

あの小さな、普通の少女より少し小さいくらいのあの体に『一〇万三〇〇〇冊の魔道書』？隠せるわけがない。服の下に隠し持てるにしても一、二冊が限界だ。……だが、嘘を吐いているようには思えない。——待て、『魔道書』？つまりは本。文字が書き記されたもの。

「——まさか……」

ありえない。本当だったら、インデックス禁書目録と呼ばれる少女。彼女は天才か、化物だ。

来栖は思考の先、到達した答え。アンサー頭をふり「妄念だ！」とかき消そうとする。だが、消えない。どうしてもその答えが『最善』だ、と

考えて離れない。

「気がついたようですね。あなたの考えは間違っていないですよ。彼女は……『禁書目録』は完全記憶能力を有している彼女の脳の八五%以上は、インデックス禁書目録の一〇万三〇〇〇冊に埋め尽くされてしまっているんですよ。……そして、彼女はあと少し、なにもしなければ死ぬ」

神裂は来栖の考えを一つも否定することなく、ただ事実を肯定した。来栖はそこまでインデックスと関わってはいない。だが、先ほどまでの銭湯に行く道で、上機嫌に「おっふる♪ おっふる♪」と歌っていた少女が完全記憶能力を有している。加えて、あと少しの間何もしなければ死ぬ」。とても事実として受け止められるには難し過ぎる問題だった。

「……………理由は？」

「言ったでしょう、彼女の脳の八五%は一〇万三〇〇〇冊の記憶のために使われている、と」

神裂は、小刻みに肩を震わせながら、

「ただでさえ、彼女は常人の十五%しか脳を使えません。並みの人間と同じように『記憶』していけば、すぐに脳がパンクしてしまう

んですよ」

何も言えない。何も言えなくなってしまった。つまり、神裂はこう言いたいのだ。

街路樹の葉っぱの数から、ラッシュアワーで溢れる一人一人の顔、空から降ってくる雨粒の一滴一滴の形まで……『忘れる』事のできない彼女の頭は、そんなどうでも良いゴミ記憶であつという間に埋め尽くされる。それによって、脳が膨大な記憶に耐えきれなくなり――――死ぬ。

人間というのは必要のない記憶、どうでもいい記憶はほとんど忘れてしまう。知らぬ間に脳内が整理をしているのだ。

インデックス
彼女にはそれが出来ない。今でも銭湯の何から何まで、忘れることなく記憶として積み上げられているのだ。

親友だったという神裂が言うのだから、それは限りなく確実に近い事実なのだろう。だからこそ、来栖は確認しなければならなかった。があった。

「……一年ほど前。彼女の記憶はそこから無くなっていると聞きました。消したのはアナタたちですね？」

「……………はい、私が消しました」

「記憶を消す前、彼女は何か異変がありましたか？」

「はい。とても、とても常人では耐えきれないほどの苦痛に耐えているかのように……苦しんでいました」

その時を思い出したのだろう。神裂は何かしたくても何もできない。救えない。自らの無力さを憎む。そのような感情が声から、表情から感じる事ができた。

同時に、来栖はあることへの確信に至っていた。神裂の言うことが本当なら、いや本当だとわかるからこそ、これ以上彼女ともう一人を『悪』にしてはいけない。

だから――

「やっぱり、このまま同じことをアナタたちに繰り返させるわけにはいきませんよ。……あの子のためにも……」

インデックス

今は『未知』を愉しむ。そんなことなど忘れて、この『間違った善人』を『本当の善人』にしようと。そう思う。

H o l l o w 8 (後書き)

基本的に来栖は女性（年上）に対しては変な丁寧語です。

個人的なことで申し訳ありませんが、感想くださると真に嬉しいです……いや、むしろ感想ください！

H o l l o w 9

「くるす……本当に大丈夫？ すごく、痛そうだよ……」

「平気だよ。大げさに包帯なんて巻いてるけど、怪我は大したことないから」

「つか、ホントにそれどんな事故に巻き込まれたんだよ」

結局、銭湯に行くことのできなかった来栖と上条、インデックスが小萌の家で再会したのは二日後の昼だった。正確に言えば、上条とは翌日に会っていた。

あと数時間。それが猶予だった。未だに心配そうな顔で、包帯を巻いてある腕や脚を見る彼女の、インデックス禁書目録の記憶を魔術師たちが消すまでの。

昨日、神裂の話を信じると同時に疑問を覚えた来栖はある約束を相対していた彼女と交わした。

「あと、……記憶を消す時間まで彼女と共に居させてほしい」
インデックス

もちろん反対された。だが、自分がステイルの焰を消し、神裂の『七閃』を防げたことは事実。能力については特に教えていなかった

が、その防御力評価せざるを得なかったのだろう。常に来栖か上条をインデックスの共とし、彼女をいかなるものからも守ることを条件として、『思い出を造る期間』を与えられた。

「（それにしても……）」

やはり、おかしい。

上条がなにか気に障る事でも言ったのか、上条のツンツン頭に思い切りかじりついているインデックスを見て、改めて思う。

神裂の話でも、来栖が疑問に思ったのは『完全記憶能力』についてのことだ。

完全記憶能力……その名の通り、見たもの聞いたものを全て脳に記憶し、忘れられない。ということだろう。忘れられないということから、精神の苦痛は激しいものかのしれない――――

――――だが、なぜそれで死ぬ？

インデックス

禁書目録。その意味は目次、索引。神裂は魔道書図書館とも言っていた。自分のかつての名前が能力名『反攻物質』^{アンチマター}だったように、その名がもしかしたら彼女の能力で、物事を完全に記憶しているのかもしれない。だからといって、完全記憶能力には変わりがないはずだ。

完全記憶能力の持ち主が初めて確認されたのは1887年。大な量の書籍を一回読んだだけですべて記憶し、さらにそれをすべて逆か

ら読み上げるといふ、常軌を逸した記憶力を持った男性が最初である。

他にも完全記憶能力者というのは存在していたが、天才的な能力を有しているにも関わらず、通常の学習能力に先天的な障害を持つものがほとんどだった。とあるイギリスの医者は彼らを『イデイオ・サヴァン賢い白痴』と名付け、後にこれは『サヴァン症候群』と改名される。

では、完全記憶能力を有している彼らはインデックスの歳のときにはもう脳がパンクして死んでしまったのか？ 答えは、否。少なくとも大半は四十年以上はこの世で生きていた。そして、脳がパンクして死んだなんて人間はひとりもない。なのに、彼女は一周期に記憶を消さなければ脳がパンクして死ぬ。というのはあまりにも筋が通っていない。そして、ほぼ意識がある時から反物質の生成、操作。物理法則の逆転なんて、高い演算能力を有する能力を行使し続けてきた自分だって、頭がパンクしてもおかしくはないはずなのに、こうして生きている。

——つまり、神裂やステイルの上司、『必要ネセ悪の教会』の人間がふたりを騙し、インデックスに何らかの『枷』をつけ、苦しめている。

そんなことをする理由までは不明だが、そう考えるのが来栖の脳内では『最善』だった。

しかし、構造は分かっているけどどう『枷』を排除するか。魔術に精通しているわけでもなく、関わったのなどつい最近。そんなことは見当もつかない。

「上条、俺は昼飯を買ってくる。リクエストは？インデックスも」

「あ、悪い。特に何でもいいぜ。金は後で渡す」

「おいしいものなら何でもいいんだよ！」

了解。小さく返事をする、小萌の部屋から出て近くのコンビニへと脚を向かわせる。上条にも神裂の条件、魔術師が記憶を消す時間。自分の仮説。全てを伝えたため、インデックスから離れることはないだろう。

しばらく、歩いていると人の気配が完全に消えた。――――

――魔術師による『人払い』。

「こんにちは。昼間から出てくるなんて珍しいのかな？魔術師」
クソガキ

「一応挨拶くらいしておくよ、能力者」
バケモノ

誰もいなくなった通りの角から現れたのは、赤髪のルーン魔術師、ステイル・マグヌス。

相変わらず幼い顔に似合わない長身とバーコードの刺繍。タトゥーそして臭う妙な香水らしきものが気分を悪くさせる。

「……ひとつ訊いてもいいかな？」

「戦う気はないことくらいわかってるから、どうぞ」

神裂との約束はこの魔術師にも伝わっているはずだから特に警戒もしなかった。現に、殺気や敵意のようなものを微塵も感じない。…それでも嫌悪しているのはわかったが。

「君はなぜ知り合って間もないあの子を守ろうとするんだい？ 単なる善意かい？ それとも同情かい？」

「どちらでもないよ。俺はただ――――――」

『未知』を愉しみたいだけ。善意なんてない。同情くらいしたかもしれないが、それだけで人を助けるほど出来た人間じゃない。吐き捨てるように言う。なるほど、とステイルはなぜか嬉しそうにやりと笑った。

「偽善と罵るか？ 別にかまわないよ。自覚してるし」

「……いいや、少し勘違いしていたかもしれないな。君の行動は善でも偽善でもない。ただ君は自分のために行動しているにすぎない。

僕が非難する理由はないよ」

ふー。と煙草の煙を吐き、くると向きを後ろに変えて、ステイルはそのまま来栖と逆の方向へと歩き出した。風向きのせいでステイルが吸っている煙草の服流煙が少々、鼻に入りごほごほ、とせきをしながら来栖はその背中を睨みつける。

「まあ、せいぜいあと数時間、彼女にできるだけの思い出を作ってるんだな」

歳下のくせに、上から目線の魔術師ステイルに罵声を浴びせようと、服流煙のせいで未だに声が出せない。そんな来栖をちらり。横目で見ると、ステイルは道路の角へと消えた。

本当に偉そうで、腹の立つガキだったが、「彼女にできるだけの思い出を作ってるんだな」と言ったことから、やはり彼も神裂と同じようにインデックスのことを大切に思っていると認識できた。

「……やっぱり、今更諦めるわけにもいかないよな。……まったく、ヒーロー上条みたいな役なんざ似合わないんだけどな………」

残り時間リミットは数時間。絶望的な状況かもしれないが、来栖には『希望』なんてすぐそこにある気がして――

H o l l o w 9 (後書き)

なんかステイルが大人っぽいのは気のせいか……？まあ、後悔はしていないが。

そろそろ禁書目録編もフィナーレです。感想、評価、ご意見などお待ちしております。

夜。約束の時間まで残りわずか。

インデックスは突っ伏したように眠っていた。眠りに就いたのは陽が落ちる前だったため、電気は店けられておらず薄暗い。

つい先ほど小萌は銭湯へ向かってしまい、この部屋には三人しかない。

「……なあ、その『枷』だか『首輪』だかを破壊できればインデックスは救われるんだよね？」

「恐らく、な。脳科学は少しかじった程度だが、完全記憶能力で人の脳がパンクするなんてことはあり得ないし、大体知識とか事象を記憶する脳の機関と思いつく出を司る脳の機関は全く別だ。知識の『一〇万三〇〇〇冊』をいくら増やしたところで、かつての神裂たちの思い出には全く支障はないはずだからな。……アイツらが所属する教会の人間がふたりにガセを長年の間信じ込ませていたのは絶対な事実だろう」

彼女——————————インデックス禁書目録。聞いた通り、世界中の門外

不出の魔道書『一〇万三〇〇〇冊』をその脳の中に内包している。

そんな彼女でもやはり、普通の少女だったのだ。

普通の少女が生きていくのに術式や技術は必要ない。だが、彼女を

野放しにしておくわけにもいかない。だったら、彼女が術式や技術なしで生きていけないように『首輪』を付けておけばいい。『たった一年分の記憶でも頭がパンクする』ように。

そして、ほとんど科学に関わりのない魔術師達どもたちが、何をしようと教会の意志に従わなければならないように――――
――――人の優しさや思いやりの気持ちを計算し、さらにそれを利用する悪魔の仕組みプログラム。それを何年も何年も仕組まれたままだったのだ。

「希望は持てたけど……どこにあるんだ？『首輪』なんて……」

「知るか。しっかりと捜せ、身体はどこかにあるんだったらお前が触れればぶっ壊れるはずだ」

白々しい様な態度だが、これでもかなり焦っている。約束の時間タイムリミットはあと数分も無いかもしれない。いや、ないだろう。今にも後ろのドアをこじ開けて魔術師二人が乗り込んできてもおかしくない。だから、来栖は上条の『右腕』に最後の希望を託した。

イマジンプレイカー
『幻想殺し』。それが上条の右腕に宿る最強の異能殺し。

名前の通り本来あり得ない事象……つまりは超能力や魔術を問答無用で、触れただけで破壊する。ステイルの魔女狩りの王を受け止めイノケンティウス

ることも来栖の陽電子砲を完全に破壊することもこの力が宿る右腕の前では当たり前、になってしまう。

その右腕が触れればインデックスの身体に仕込まれた『首輪』も破壊できる、と踏んでいるのだが……なかなか見つからない。

――身体は全て触れたはず……『首輪』
？もしかしたら……！！

「上条、インデックスの口に手突っ込んで、首の裏辺りを触れてみる」

「え？……そうか！まだ、内部には触れていないからか！！」

「そういうことだ。〇〇吐かせる勢いで突っ込め」

来栖の指示を受けて、上条は浅く呼吸を繰り返すインデックスの唇に半ば強引な感じで、右手の親指と人差し指を滑り込ませ、口を開いた。

――あつた！！

上条が歓喜で叫び、来栖が確認する。魔術紋ルーンというのか？見たことも無い妙な紋章が、一文字、真っ黒に刻まれていた。

「……………上条、お前しかできない。やれ」

「ああ!!」

上条は一度だけ目を細めると、意を決してさらにインデックスの口の中に手を突っ込んだ。

ぬるり、と。それ自体が別の生き物のように蠢く口の中に指が滑り込み。異様なほど熱を帯びた唾液が指に絡みつく。上条は不気味とも言える舌の感触に一瞬ためらってから、インデックスの喉を突くように、一気に指を押し込むと、

ぐっ、と強烈な吐き気にインデックスの体が大きく震えた———よな気がした。

パチン、と静電気が散るような感触を上条は右手の人差し指に感じると同時、

バギン! と。上条の右手が勢い良く後ろへ吹き飛ばされた。

「がっ……………!?!」

「何ッ!?!」

予想外の事態に、来栖はインデックスに目を向ける。そこには――
――ぐったりと倒れていたはずのインデックスの両目が静かに開き、その眼は赤く光っていた。

それは眼球の色ではない。

眼球の中に浮かぶ、血のように真っ赤な魔法陣の輝きだ。

(ヤバッ……)

何かが来る。確実に予感した来栖が能力を発動させる前に、インデックスの両目が恐ろしいぐらい真っ赤に輝き、そして何かが爆発した。

ゴッ！という凄まじくも鈍い衝撃と共に来栖の体はそのまま向かいの本棚へ激突する。どうように上条もふっ飛ばされたようで、本棚を作っている木の板がまとめて爆ぜ割れ、バラバラと大量の本が落ちる音が響く。能力を発動する直前だったため、もろに食らった。頭は守ったが、背中と脚の骨がきしみを上げている。ごふっ、と肺の空気と共に押し出されたのは……血。多量ではないがそのせいで口の中には鉄の味が広がった。

「――警告、第三章第二節。Index-Librorum-P

rohibitorum——インデックス禁書目録の『首輪』、第一から第三
まで全結界の貫通を確認。再生準備……失敗。『首輪』の自己再生
は不可能、現状、一〇万三〇〇〇冊の『書庫』の保護のため、侵入
者の迎撃を優先します」

目の前、インデックス禁書目録を見る。

のろのろと。彼女は、まるで骨も関節もない、袋の中にゼリーが詰
まっているかのような不気味な動きでゆっくりと立ち上がり、真紅
の魔法陣が宿った瞳で来栖と上条を射抜く。

「……ッ、あの時のヤツがまさか防御プログラムだったとはな……」

痛みに顔を歪めながら立ち上がると、改めてその瞳を見る。

やはり、感情など感じられない。アレは確実に人間の瞳ではない。

そう、それは先ほどまで眠っていたインデックスという少女ではな
く、『一〇万三〇〇〇冊』を守り、害為す者を排除しようとする防
ユリテイ御網だった。

「上条、へばったわけじゃないよな？」

「問題ねえよ。むしろ、嬉しいくらいだ」

無理して言っているわけではない。確かに上条の脚はフラフラだっ
たし、あちこちから血が出ている。来栖と同じように口からもわず

かな血を垂らしていた。

しかし、歓喜していたのも確かだ。その証に、

[illegible]

笑っていた。彼は、上条当麻は。魔術師でもなく、自分と自分の友人の力でこの少女を救える可能性が出てきた。そのことに歓喜していた。

目の前ではインデックスの眉間の辺りみけんで高圧電流の爆発が起き、四方八方へ雷が飛び散るような現象。かみなり

それは青白い火花ではなく、真っ黒な雷のようなもので、信じられないかもしれないがそれは空間を直接引き裂いた亀裂きれつのようなものに見えた。バギン！ と。二つの魔法陣の接点を中心に、ガラスに弾丸をぶち込んだように、空気に真っ黒な亀裂が四方八方へ、部屋すみずみの隅々まで走り抜けていく。まるでそれ自体が何人なんびとたりともインデックスに近づけまいとする、一つの防壁であるかのように。それは展開されていた。

だが、関係ない。

收斂」

静かにつぶやくと、左腕に電子の反物質、陽電子を生成し収束させていく。まだ、加速、発射はしない。本来攻撃に使用するはずの陽電子砲。しかし、下手に攻撃はできない上、反物質の障壁で防げる可能性は魔術に対しては皆無だろう。よって、今回の陽電子砲は予想以上に恐るべき攻撃が来た時への防御手段なのだ。

来栖が能力を行使している間に上条は走っていた。
たった四メートル。

もう一度、あの少女に触れるだけで全てを終わらせる事ができるのだ！と信じて。
だから、上条は『亀裂』へ——その先にいるインデックスの元へと走った。

その右手を握り締めて。
こんな残酷な物語の、無限に続くつまらないつまらない結末を打ち消すために。

「!？」

——————驚愕。上条がインデックスに触れる直前、
ベギリ————と、亀裂が一気に広がり、『開いた』。

ニュアンスとしては、人間を無理矢理引き裂いたような痛々しさ。
そして部屋の端から端まで達するほど巨大な亀裂の奥から、『何か』
が覗き込んで、

ゴッ！！と。亀裂の奥から光の柱が飛びだし、上条と来栖へと襲いかかった。

「なッ！！——————チィ！」

一瞬驚いたが、そんな暇はなく充分に収束させていた陽電子を一瞬で加速——————発射した。

「……ぐっ！」

反物質の生成、保管が難しいため、原理だけでフィクションの中でしかその存在が実証されていない陽電子砲。対消滅によって、相手の体を侵食しつつ、発生する高エネルギーで相手を破壊する。砲撃兵装としては今のところ最強の兵器だが、せいぜいあの光の柱と互角……いや、押されている！

しかも、かなり充分な陽電子を収束したため、物質ではないため対消滅は期待できないが荷電粒子砲としてかなりの威力は持っているはずなのに一ミリ一ミリ、わずかだが直径一メートルほどのレーザー兵器のような光に押され、後ろに後退させられていた。

押されているのは来栖だけではない。神の力でも殺すことのできる『イマジンプレイカー幻想殺し』。その前にはどんな異能も通用しない。——————

——だが、光の柱を受け止めている上条の右腕は吹き飛ばされそうで、上条が左手で右手首を掴みながらようやく維持しているような感じだった。

正直、こちらでも左手だけではかなりつらい。出力は問題ないが、体勢の維持が困難な状況だ。

と、考えているとドアの向こう側が騒がしくなった。

実は、大分前からドアの前で待機していた魔術師は異変に気付き、勢いよくドアが開いてふたりの魔術師が飛び込んできた。

「神裂！君が待っていると言ったのだから、何かあったら君のせきに――！！」

何かを叫びかけたステイルは、けれど途中で背中を殴られたように息を詰まらせた。目の前にある光の柱――――そしてそれを放つインデックスを眺めて心臓が止まったような顔をしている。

かんざき
神裂も目の前の光景が、有りえない。信じられないと、凛々しく孤高に見えたその表情を崩して絶句していた。

「……ど、『ドラゴン・プレス竜王の殺息』って、そんな。そもそも何であの子が魔術なんて使えるんですか！」

「騙されていたんですよ、アナタたちは！一年置きに記憶を消さなければインデックスは生存できないなんてのも、嘘。インデックスが魔術を行使できないのも嘘だったのですよ！」

来栖は事実を叫ぶ。かつて友人だったふたりの魔術師に届くように、左腕の掌から今までで最も膨大で、危険な光を放ちながら。

「……けど、だって……何が」

「じれってえ野郎だな、んなの見りや分かんだろ！ インデックスはこうして魔術を使ってる、それなら、『インデックスは魔術を使えない』なんて言ってた教会が嘘うそぶっこいてたっただけだろうが！」
上条は光の柱を吹き飛ばしながら叫んだ。「ああそうだよ、『インデックスは一年置きに記憶を消さなきゃ助からない』ってのも大嘘だ！ コイツの頭は教会の魔術に圧迫されてただけなんだ、つまりソイツを打ち消しまえばもうインデックスの記憶を消す必要なんかどこにもなくなっちゃうんだよ！！」

じりじり、と。後ろに下がりながら上条は叫ぶ。

二人の魔術師は、呆然ぼうぜんと亀裂きれつの向こう——インデックスの方を見たようだった。

「——『聖セントジョージの聖域』は侵入者に対して効果が見られません。他の術式へ切り替え、引き続き『首輪』保護のため侵入者の破壊を継続します」

知らない。教えられていない。目の前のインデックスはふたりにとってそんな存在だったのだろう。

有りえない。信じられない。だが、眼前の出来事は現実リアルで事実。

「……、」

ステイルはほんの一瞬、本当に一瞬だけ、奥歯が砕けるほど歯を食いしばって、

「————Fortis931」

その漆黒の服の内側から、何万枚というカードが飛び出した。

炎のルーンを刻んだカードは台風のように渦を巻き、あつという間に壁や天井や床を隙間なく埋めていく。それこそ、全身に般若心經を写した耳なし芳一ほういちのように。

インデックスという一人の少女を助けるために、ステイルは上条の背中に手を突き付け、その身体を支えた。

「曖昧あいまいな可能性なんて、いらない。あの子の記憶を消せば、とりあえず命を助ける事ができる。僕はそのためなら誰だれでも殺す。いくらでも壊す！そう決めたんだ、ずっと前に」

「ったく、今更……とりあえずとか言ってるじゃねえよ、クソガキ！！」

インデックスの放つ『竜王ドラゴンの殺息プレス』勢いが増しているのか、来栖の左腕の陽電子砲が勢いを失くしているのか、つい数分前までよりも押される間隔が長くなっている。それでも、息を吸って叫んだ。

「――――――――――
だろぅがッ!!」

――――――――――
テメエが英雄^{ヒーロー}になるのは今しかない

H o l l o w 1 0 (後書き)

一話で終わらなかったか……どうでもいいですが、総合評価が少し下がって少々ショック……

感想、評価、ご意見お待ちしております。

H o l l o w 11

(……………大口叩いたのはいいものの……………限界、か)

初撃の陽電子砲だけでは防ぐことが不可能。そのため、途中から急速に陽電子を生成、加速、発射を繰り返していた。加えて周囲を反物質に変換している。演算能力の使い過ぎでそろそろ脳も体力もかなり限界に近く、気を抜いたら一瞬で死にそうな予感すらしている。

横では上条がスタイルに支えられながらも左腕で押さえた右腕で対抗している。が、手首は少々歪んでおり、爪の辺りから真っ赤な鮮血が舞っていた。そして――――――――――グギ
リ。上条の右手の小指が妙な音を立て、折れた。

「――――……、っ！ かみ、じょ……」―――――――――― S
a l v a r e 0 0 0 ! ! 」

叫びかけた瞬間。上条の無防備になった顔面に光の柱がぶつかる直前、神裂が叫んだ。

それは日本語ではない。魔術師が相手を殺す場合に名乗る『殺し名』だ。だが、それは覚悟の『魔法名』だった。

神裂が自らの得物――――――――二メートル近い長さの日本刀を抜く

と、大気が裂けた。七本の鋼糸ワイヤーがそのまま大気を引き裂きながら、インデックスの元へと襲いかかる。来栖との戦闘で見せた技であり、『七閃』という奥義。

だが、それはインデックスを直接狙うものではない。

インデックスの足元——脆いもろ畳たたみを七本の鋼糸ワイヤーが一気に切り裂いた。

突然に足場を失った彼女はそのまま後ろへ倒れ込み、インデックスの『眼球』と連動していた魔法陣が動き、来栖と上条を狙ねらっていたはずの光の柱が大きく狙いを外す。

まるで巨大な剣を振り回すように、アパートの壁から天井てんじやうまでが一気に引き裂かれた。夜空に漂う漆黒の雲までもが引き裂かれる。来栖の放っていた陽電子砲も光の柱が射程から外れると消えた。

「……………羽…………？」

引き裂かれた壁、天井などの物体は木片を一片も残さず、代わりに破壊された部分は光の柱と同じような輝きを放つ純白の羽となった。夏の夜には不相応な雪のように、はらはら、と何十枚。桜の花びらのように舞い散る。

「それは『竜王ドラゴン・プレスの吐息』————伝説にある聖セントジョージのドラゴンの一撃と同義です！ いかな力があるとはいえ、人の身でまともに取り合おうと考えるいってください！」

神裂が注意を促す。『光の柱』の束縛から逃れた上条は、床に倒れ

込んだインデックスの元へ一気に走ろうとする。が、それより先にインデックスが首を巡らせた。巨大な剣を振り回すように、夜空を引き裂いていた『光の柱』が再び振り下ろされる。

「——————イノケンティウス魔女狩りの王！」

一瞬。身構える上条の前で炎が渦を巻いた。かみじょう人のカタチを取る巨大な火炎は、両手を広げて真正面から『光の柱』の盾となり、上条を守った。炎の魔人が持つ十字架がまるで罪から人を守るその意味を顕出しているようだった。

「行け、能力者！」

ステイルの叫び声が反響する。

「元々あの子の制限時間リミットは過ぎているんだ！何かを成し遂げたいなら、一秒でも時間を稼ごうとするな！！」

上条は一言も答えない。背後を振り返る事もしない。

そんなことをする前に彼は走っていた。ルーンがある限り絶対の魔女狩り王が『竜王の吐息』ドラゴン・ブレスを浴びて苦しむように吼える。それを迂回するように、インデックスの元へと寄り添った。

それを見届けると、来栖は糸の切れた人形のように膝を崩す。体力

も、脳も気力も全てが限界だった。

「―――――しっかりしてください!!」

がしっ、と身体を後ろから支えられる感触を得ると、神裂が背後にいた。……どうやら、倒れ込むのを防いでくれたらしい。申し訳ないので、立ちたいのは山々だったが生憎あいにくと脚が全く機能しない。目の前では上条が走っている。魔術師の願いを汲みとり、その意思を現実にするために。

「……………すいません、ホント。感動のラストの前で倒れるとか……情けない」

「いいえ、あなたは―――――上条当麻、上
!!」

間近にいらなくてもかなり響くだろう神裂かんざきの叫び声。もう手を伸ばせばインデックスの顔の前にある魔法陣に触れられる、そんな矢先。上条の上にはインデックスの『光の柱』が壁や天井を破壊した後生まれ、何十枚もの光り輝く羽。まるで粉雪のようにゆっくりと舞い降りてきたそれが、今まさに上条の頭上へ降りかかろうとしていた。

神裂があればほど狼狽しているのだ。危険ではないはずがない。魔術の類なので上条の右手で消すこともできる。だが、

「――警告、第二章第一節。炎の魔術の術式を逆算に成功しました。曲解した十字教の教義モチーフをルーンにより記述したものと判明。対十字教用の術式を組み込み中……第一式、第二式、第三式。命名、『神エリ・レマよ、何故私を見捨てたのですか』完全発動まで十二秒」

『光の柱』の色が純白から血のように赤い真紅へと変化していく。真紅の光を浴び続ける魔女狩りの王は再生スピードがみるみる弱まっ
イノケンティウスていき、『光の柱』へと押されていく。消されるのは時間の問題だった。

「……すいませんが、しばらくこの体勢を維持してください」

え？ 不意に口を開いた来栖に戸惑う神裂。しかし、なにかをすることは予測できたのだろう。支える腕に力が込めるのを感じ、確認すると左手を突き出した。

――――――――――
照準、光の羽。

掌から放たれたのは巨大な光。だが、それは陽電子砲の威力と比べると遥かに劣る。

拡散陽電子砲。と、でも呼べばいいのか、収束させることで威力の高い陽電子砲を収束させずに拡散させて発射した。当然、バラバラな光が放たれる。

しかし、それは広範囲に広がり、狙い通りに上条の頭上の羽を吹き

飛ばした。

（――――――あと……頼むわ……）

本当に限界を超えた瞬間、一気に脱力感が押し寄せる。気力もない状態でそれに抗^{あらが}えるはずもなく、神裂の呼びかけを耳に残しながら、意識は闇に沈んでいく。

――――――瞼^{まぶた}が完全に閉じる前、写した光景は右手を振り下ろされ、倒れるインデックスと

――――――光の羽を頭上に受けた上条当麻だった。

「―――――」　　「まったく、なにやらかしてそんなことになったじゃん……」

緑色のジャージの女性、来栖の姉である黄泉川愛穂は真っ白な病室で、身体を半起こしにしている弟を見てため息混じりに言った。
「見えてはいないが脚は包帯でミイラ男の様にグルグル巻き。左手なんて骨折した時の様にギブスはしていないが、首から吊っている。」

「アハハハハ………なんと申しますか……。人助けがエスカレーターしたらこんなことになってしまいました……」

ばつが悪そうに笑う、そんな弟を見る姉はジト眼。真実か真実ではないか、見極めているような顔だ。

別に嘘は言っていないが、やはり無理があっただろうか？と……

「そうか、よくやったじゃん」

怒るでも、疑うでもなく、姉はそれだけ言うとか来栖の頭を一度だけ優しく撫で「仕事があるじゃん。いつてくるじゃんよ」と、それに

来栖が「いってらっしゃい」と返すと手を振り病室を出た。
直後、入れ替わりのようにカエル顔の医者が病室へ入ってきた。

「君を診るのは二回目だけど、今回も前回は印象的で本当によく覚えてるよ」

「くははははははっ。本当に手間かけてすみませんね。感謝しますよ」

屈託なく笑うと、カエル顔の医者もつられるように笑った。かつての来栖を知っている彼だからこそ今の来栖に喜ぶことが出来たのだろう。

そして、今でもこの身体があるのはこの医者のおかげ。それを分かっているから社交辞令でもなく来栖は彼に感謝している。
不意に、来栖の口が開く。

「上条は……平気、でしたか？」

「……………ああ、平気さ」

「……………そうですか」

一瞬に言い渋ったのをもちろん来栖が見逃すはずがなく、理解した。

——— かつての『上条当麻』は死んだ、と。
脳細胞がやられたという話を聞いていたので、記憶が完全に『死んだ』。自分の生活、人間関係。魔術師と戦ったこともインデックスや来栖のことも覚えてなどいない。

「……もう一度、初めまして、かな」

ぼすん。起こしていた身体を倒れさせると、来栖は脱力したようにため息を吐いた。病室にはなにも無いし、カエル顔の医者と話すことも特にならない。このまま眠ろうか、そう思った時。

「君は幸せ、かい？」

医者が不意に尋ねた。友人を失ったことに悲しんでいるとも思われたのか。突然だった。こんな質問は誰にもされたことが無い。だけど、言うことなんて決まっている。一つしかなかった。

「ああ、——— きっと、幸せですよ」

H o l l o w 1 1 (後書き)

一巻終了です!! 長かったような短かったような……

吸血殺し編のときどうしようか……? 介入できそうにないし……いっそ飛ばすか?

感想、評価、ご意見お待ちしております。

H o l l o w 1 2

ついこの間の事件。魔術師やら禁書目録やらと関わった日から数日経っていた。それ以降はいたって普通の毎日。

姉と食事を取り、家事をする。記憶を失ってしまった上条のフォローをバレないようにするのは少々大変だが、別段変わったことなど特にはない。が、一つだけ変わったことがある。

『既知感』の喪失。今までほぼ全ての事象に「経験したことがある」「知っている」という感情を抱いたのだが、あの日。そう、まさにあの日だ。既知感を抱かなかった魔術とやらの事件に関わったその日から、既知感が喪失した。まるで積み上げられていたものが一気に崩れ、消えてしまったように、毎日の事象になにも感じなくなっていた。

これはありがたい！素直にそう思いたいところだったが、不思議とそうは思えない。予感がするのだ。

踏み入れたのは未知の領域。ここから先は何が起こるか不明で、何が起こっても不思議ではない非日常への誘い。^{ついで}普段の何も変わらない平和で、暖かな日常へは戻れない。そんな予感が。

（深く考えても今は仕方がないか……………）

予感。そうただの予感だ。あくまで現実になったわけではない。ど

うせ、また退屈で変らない日々が続いていくはず――
――ピリリリリリリリ。

「？」

ベッドの脇に置いてある携帯電話が着信の有を音で告げる。現在、朝の二時を過ぎたあたりで明らかに電話をかけてくる時間帯ではない。それはまるで来栖が起きているのを見越していたようにも思えた。

（無視……………できないか）

真夜中の二時という時間帯はほとんどの者が眠りにについている。それは体育教師と警備員アンチスキルの仕事をしている姉にも言えることだ。このまま無視し続けて着信音が鳴り止まなかったら仕事疲れで就寝中の姉を起こしてしまうかもしれない。結局、迷惑をかけるわけにもいかず、嫌々ながら携帯の上部をスライドさせる。表示は『非通知』。怪しいと思ったが、通話と書かれたボタンを押した。

「……………もしもし……………？」

『久しぶり――――いや、初めましてかな？』
『反攻物質』
『アンチマター』

電話越しに聞こえた声は正体不明、だった。そう形容するしかない。
電話越しでは顔こそ見えないが声で性別、年齢などがある程度推測
することは可能だ。しかし、声の主は全く推測できない、想像でき
ない。

それは男にも女にも聞こえ、大人にも子供にも聞こえ、聖人にも凡人にも聞こえる声。威厳こそ感じられないかもしれないが、妙な雰囲気は感じとることができた。明らかに普通の人間ではない、それこそ住んでいる世界、次元が違うような……そんな気さえる。

「……アンタ、俺のことを能力名で呼ぶってことは俺の能力開発を担当していた人間か？」

『反攻物質』と呼ぶ人間は来栖の力を研究していた研究者のみ。しかも、姉の部隊によつてあの場にいた研究者は全て捕まつたはず……ならば考えられるのは今まで逃げてきた残党。だが、そんな残党が今更何の用だ？ そんな疑問に応えるように声は言った。

『いや、私は研究者ではないよ——学園都市統括理事長、とでも言っておこうか』

「はあっ!？」

学園都市統括理事長。それは要するに学園都市の事実上支配者のようなものだ。普通の学園の理事長の様にあらゆる決定権を持ち、命令できる頂点の存在。来栖は一瞬耳を疑った。が、はっきりと聞こえた声が残っている「学園都市統括理事長だ」と。

「……信じられない。と、言いたいのが学園都市のNO. 1だって言うアンタが俺に接触する理由に心当たりがないわけじゃない……魔術師のことか、禁書目録のことか……俺自身のことか……」

『正解は三番目だ。相変わらず頭の回転が早い。流石は絶対能力者^{レベル6}に一番近い男だ』

「昔の話だろ。イヤなこと思い出させんな。今の俺よりもレベル6に近い奴なんて何人もいるだろ？」

『さてな……どうだろうか』

「……結局アンタは俺に何をさせたいんだ？」

昔の話を持ち出したり、質問には曖昧な答えで返したり。そんな電話越しの相手————学園都市統括理事長に来栖は頭にきていた。かつて絶対能力者^{レベル6}に一番近いと言われていたのは事実。そしてそれを知っている者はかなり限られている。来栖は覚えていないが久しぶり、と初めに言ったのは『反攻物質^{アンチマター}』と呼ばれていた時代の彼に

会ったことがあるからだろう。

初めましてと言ったのは自分に名前が与えられ『黄泉川来栖』という存在とは初めての会合となるからと推測できる。本物と考えるしかない。書庫^{バンク}の情報は必要最低限のことを残して抹消されているため、知っているのは上層部の人間だけだ。本物の学園都市統括理事長。そんな存在が、「暇だったから話し相手をしてくれ」などという用件でかつての研究対象を訊ねるはずがない。どうせロクでもない話だ。そう思ったが、

『特に何も。世間話のようなものだよ今回は――
――ではな、良い夢を』

「ハア？何を、ちょ――――――」

プッ。回線が切れる音の後、ツーツーツという音が暗い部屋で静かに響く。啞然として何も言えない来栖の手元には通話時間と料金の表示されたディスプレイが周囲を白く照らす光を放っていた。

「まさか、さっきのアレがイヤな予感の正体じゃねえだろうな……」

忌々しそうにつぶやくと、黒いスライド式携帯の上部をカシュッ。収納し元のベッド脇に放り投げるといかにも不機嫌そうな表情でベッドに背中から倒れ込んだ。本当に嫌な予感の正体が先ほどの電話だとは思っていないが、彼の心には『学園都市統括理事長』と名乗る人物との会話が何かの前兆のように思えてならなかった。

「さて、『反攻物質^{アンチマター}』。君はどんな可能性を私に示してくれるのかな」

窓が無く、ドアも無い。室内と呼ぶにはあまりにも広大な空間には、一切の照明がない。それでいて、部屋は星のような光に満たされている。その部屋の中央には巨大なビーカー。直径四メートル、全長一〇メートルを越す強化ガラスでできた円筒の器には、赤い液体が満たされている。その内部で逆さに浮いている『人間』学園都市統括理事長————アレイスター・クロウリーは薄ら笑いを口元に浮かべながらつぶやいた。

元・最重要研究対象『アンチマター反攻物質』。黄泉川来栖の行動をアレイスターは十年以上前から観察していた。

『幻想殺し』との関わり、禁書目録との接触。イギリス清教第零聖堂区『必要悪の教会』ネセサリーウス所属の魔術師との交戦。全てを漏らすことなく観察していた。全ては彼の『プラン』の為に。

唯一を残して彼の、アレイスターの言う『可能性』というものは理解できないだろう。それに、誰もがアレイスターが『アンチマター反攻物質』に対する処遇について疑問に思うだろう。

——なぜ、プランの重要存在を自らの手元に置かず、完全に野放しにしておくのか。

——なぜ、彼の経歴、能力を含めない必要最低限の情報しか残さず全て闇に葬ったのか。

それは当人を除けばいかなる人物にもわかるまい。いかなる『人物』には——

モニターに映ったとある映像を見るアレイスター。その口元は三日月のように歪み、どのような感情を抱いたのだろう。感激か狂喜か、彼は——笑っていた。

H o l l o w 1 2 (後書き)

実はアレイスター結構好きです。原作でも脳内ボイスが関さんでしたが、アニメもそうだったとは……………

次はおそらく二巻飛ばして欠陥電気編に入りたいと思います。

感想、評価、ご意見お待ちしております。

H o l l o w 13

いつもの買い物。そう、そのはずだった。

熱い季節には絶対的に必要な物がある。冷えている飲み物や食べ物などのそれらは絶対的に必要なものだ。と黄泉川来栖は思う。

クーラーや扇風機などの機器を利用して、冷却効果を得ても良いのだがそれによって体調を悪くしたり、喉を痛めたりしてしまうこともあるだから最低限の利用しかない。

だから、食事などの必要な行動の一環で自らの身体を冷やす。と、いうことで姉がこれまたどのように調理したのか、ラップに包まれていた万能調理器と称される炊飯器製冷やし中華を食した後、アイスでも買おうと思いつく近くのコンビニを訪れた。そこには明らかにおかしい光景があった。

「……………」

カラン、カランカラカラカラカラ。無言でBlackと書かれた黒色の缶コーヒーを何本も何本も……一つのことに集中している。カゴに缶コーヒーをひたすら投げ入れるという動作を何度も繰り返している白髪の少年がいた。

「……………」

顔も合わせていない相手に失礼だが、「異常」だろう。

二十本以上もカゴ入れられたコーヒーク缶は見ているだけで、何か妙な気分を催す。この本数をまさか一日で全部飲むとは思わないが、少年の動作を見ていると慣れている。そんな感じがした。

少なくともこんなことをしたのは一、二回ではないだろう。よほどコーヒーク好きなのか知らないが、少年の体はおそろしく肉つきなく、腕も脚も木の枝のように細かった。コーヒークが健康を害しているとも思える。

——どこかで見たことがある。

白髪少年は昔の自分がそのまま成長したような姿をしていたからか、そんな感情を抱いた。

ようやくカラカラという音が止む。少年の手にはおよそ三十本くらいの缶コーヒークが入ったカゴ。見ていたことに気付いていたのか、レジに向かう途中、睨むように来栖に視線を合わせると——

——驚愕の表情を浮かべた。

「……な、ん……テ……メエ……が……」

紅く染まった瞳を大きくを見開いて、聞き取れない様な微かな声で少年の口から漏れた。聞こえない来栖は少年がなぜ驚いているのか、何を言っているのか全く不明で？マークを浮かべることしかできない。

少年は驚愕の表情で来栖を睨んだまま、

「おい、テメエ――――」

――――ヴ――――ヴ――――ヴ――――来栖のではない。おそらく少年の携帯のバイブ音だ。「チッ」と舌打ちすると、来栖の横を通り過ぎてそのままレジへと向かった。

(……………クサイ。もの凄く……………)

会計を済まして出ていった少年の背中を今度は来栖がガラス越しに睨んだ。――――血の臭いがもの凄い染みついたような……………そんな臭いがした。

もちろん、常人にはそんなこと分からないだろう。それに血が染みついたような臭いというのは別に返り血の臭いがするというわけではない。何人も殺してきた……………そんな殺人鬼のような危険な香りをする、ということだ。それに、やはり見覚えのある。絶対にどこかで会ったことがある。疑問は確信へと変わっていた。

(……………実験の可能性が高いか……………それも胸糞悪イような、最悪のヤツ。探ってみるか)

適当なカップアイスを自分と姉の二つ分購入すると、自分の記憶の中にある研究所の一つへと歩き出した。

研究所は見つかったが、さすがに昼間は少々人目につきやすいということもあり、潜入したのはその日の夜だった。それに今日は姉の帰りが遅い。

よくわからないが、自分より先に侵入した人間がいたらしく警備はザラでそんな施設に無断侵入することは簡単だった。

コンクリートの地面を歩いてゆく中、ところどころに置いてあった機会は木っ端微塵と言うほどに壊され、情報をそこから得ようとするのは無理。結局、現在は何を研究して、どんな実験をしている施設なのかは分からずじまいだった。

「……………ん？」

破壊音、爆発音、そして雷のようなビリビリと言う音。そんな音が来栖のいる場所、現在は警備員を警戒して角ダクトの上の前方から聞こえてきた。音が遠く感じないということは、近く。実験でも行われているのだろうか？……いや、電撃音ならまだしも、明らかに鉄がコンクリートの床に叩きつけられるような音や爆発音が連続し過ぎている。実験ではない。予測するに、先に侵入した人間が警備の人間と交戦している。

（エレクトロマスター発電能力者と……………無能力者……………かな？）

音だけ予測するならそう思える。エレクトロマスター発電能力者は確実だろうが、もうひとり爆発を任意にすることが出来る能力者だとも考えられなくはない。だが、予測は的中。

角ダクトの上、来栖の視線の先ではエレクトロマスター発電能力者と思われる、帽子をかぶった茶初の少女と、やはり無能力者。金髪でベレー帽のようなものを頭にのせた少女が戦闘中だった。そして茶髪の少女が金髪の少女を追いつめるような形になる。

「今のうちに聞いておきたいんだけど、アンタ達を雇ったのは誰かしら？……………義理立てとか考えない方がいいわよ。この施設はイカれた実験の……………」

「あ————。いーから、そーいうのお」

雇い主の目的、殺す相手が善人とか悪人、その人間が歩いてきた人生。そんなものは結局、どうでもいい。金髪の症状は口元にうつすら笑みを浮かべながら、言い放った。随分な数の人を殺してきたような言い方をする。いや、本当に何人も殺してきたのだろう。先ほどの爆弾などの攻撃には容赦というものが感じられないし、普通になが死ぬレベルのものなんていくらでもあった。……正確に自分と相手の歳は不明だが、自分と同じくらいだろう。それくらいの人間が『闇』の仕事に関わっている。そんな事実には嫌気がさしてくる。

「それと私を追い込んだつもりみたいだけどー」

ボンッ。部屋の入り口の辺りから爆発音がすると————
ーガララララララッ！——ズンッ！！大きな音を立て、巨大な鉄製と思えるシャッターのようなものが降り、入口を完全に塞いだ。これで背後には逃げられなくなった。そういう作戦だろう。

「結局っ！追いつめたほうが追いつめられてたつてのは、よくある話な訳よ！！」

加えて周りをよく見ろ、とまで言う。シャッターを閉めただけでまるで勝ったような言い草と口調だった。

「……………ん？って、……………！！」

「へっ！？」

頭上からの声に、茶髪の少女は少々、間の抜けた声を上げる。

来栖が乗っていた角ダクトが崩れ、中から大量のぬいぐるみ……つまりは爆弾だ。茶髪の少女の頭上に来栖と共に降り注いだ。急な出来事だったため、来栖は体勢を崩しながらもなんとか着地した。

だが、一番驚いたのは戦闘中だったふたりの少女だろう。何の気配も感じさせずに、突然現れたのだから。

「アンタ何……って、あの時の補習高校生じゃない！」

「……？ああ、どうも。なんか見たことあると思ったら電撃女子中学生さん。アナタでしたか」

「電撃女子中学生って何よ！私は御坂^{みさか}美琴^{みこと}って名前がちゃんとあるのよ！」

そこまで気に触るようなあだ名ではないと思うのだが、変な自己紹介をする御坂さん。

なんとなく見たことがあると思ったら、夏休み補習の朝。共に爆走して、最終的に川に落っこちたとある中学生だった。……たしか、

常盤台中学の人だったか？

そんなふたりに完全に無視されている金髪の少女は少々狼狽しているように、

「侵入者インベーターがもうひとり……聞いてない！！だけど、退路は塞がれ、身を守る盾も無い！！」

どこから出したのか、両手の指先に挟んだダイナマイトと思われる円筒型で先に火がついたものを、床に張り巡らした導火線のようなものへ器用に六本。狙いを外さず床へと投げた。

「……ちい、アンタのことは後！下がって！」

了解。女子に守られるのはなんとも男として情けない話だが、現在自分が出来ることと言ったらここら辺一帯をふっ飛ばしたりするにとぐらいだ。加えて無能力者に使うような能力ではない。それに、この少女……御坂美琴の能力がどれほどのものか興味もあった。

ぐっ、と御坂が腕に力を込めると、電気が床に走る。そして磁力によるものだろう。床が持ちあがり、火花が走る導火線を断ち切った。

このときに来栖は確信する――
超能力者だ。
レベル5

エレクトロマスター
発電能力者自体はそこまで珍しいというわけではない。だが、レベルによって汎用性、攻撃力などはかなりの差がある。先ほど御坂が持ちあげた床は重さも面積も結構なものだ。それを、1m以上も持ち上げられる。大能力者^{レベル4}ではできない芸当だ。
御坂は持ち上げた壁のような床を踏み越えると、バチバチと掌に雷を生成して金髪の少女へと迫る。

「覚悟はいいかしら」

敵も御坂が超能力者^{レベル5}だと気がついていいることは、床を持ち上げたときに見せた驚愕の表情から窺えた。無能力者^{レベル0}と超能力者^{レベル5}の差は絶対的だ。5が0を倒せるのは当たり前のようなもの。だが、金髪の無能力者^{レベル0}は不敵な笑みを浮かべて、床に何かを落とした。――
――スチール缶のような円筒型の物体。そのレベルが外れる……閃光手榴弾！
スタングレネード

（……今警告しても間に合わない。だったら……）

レバーが外れて約四秒。爆発が起こるその間に眼を閉じ、脚に力を込め走る。目標への到達ルートと距離はほぼ確実に把握した。下手したら壁に激突するか、地雷でも踏むかもしれないが確実に成功するという確信があった。

———カッ！スタングレネード閃光手榴弾が弾け、強烈な光と音を周囲に撒き散らす。反応がやはり遅れた御坂は防ぐ術もなく、モロにその効果を受けた。

それを隙とみた金髪の少女はニツ、と笑い、スカートの裏から小型の魚のようなミサイルを三つ。指にはさみ、狙いを視覚と聴覚を失った御坂へと向けた。

（自信満々の能力者を嵌めたこの瞬間が最っ高ーに快感な訳よ！！）カイカン

プシュ。煙を尾に引きながら、小型のミサイルは御坂へと向かい――

――爆発した。

ぬいぐるみ爆弾に誘爆したのだろう、規模は小型手持ちミサイルとは思えないほど巨大になっていた。

仕留めた。立ち込める煙の中にひ、と笑う。

「にゃーはっはっはっ！ま、結局私にかかればこんなもん――」

――」

高く笑う声は続かなかった。煙が晴れ、倒れていない御坂が見えたわけではない。では、なぜか？掴まれていたからだ、帽子の載った金色の頭を。女性ではない、男性の掌が。

頭を掴まれているため、振り返ることはできないが、その存在はもうひとり……完全に正体不明で、急に出現した男の侵入者だと、いうことは絶対的な確信があった。

そして侵入者

インベーター

黄泉川来栖は告げる。

「行動停止しろ。お嬢ちゃん」

フリーズ

ドーター

H o l l o w 1 3 (後書き)

ヤバイなんかフレンダ生存ルートを作ってしまいそうで怖い……

次の会でついにあの人が………本編より大分早いご登場。

感想、評価、ご意見などお待ちしております。

「さーて、キリキリ吐いてもらおうかしら……この計画を主導している面子は？^{メンツ}アンタ達を雇ったのは誰？」

「……………」

壁に追い込まれ、来栖と御坂が見張っているため逃げることもできない金髪の少女は御坂から情報の開示を要求されるが、全くの無言。さすがは裏の仕事を行ってきた人間と言うべきか、仲間や雇い主の情報を簡単に教えてくれるほど甘くない。……少々、気が引けるが仕方がない。来栖は逃げられないように頭を掴んだままの右腕に力を込め、金色の頭を万力のように締め上げた。

「……………ひぎっ!？ やめてやめて、痛い痛い!! 頭潰そうとするのやめて!？」

「さっさと吐いてください。このまま締める続けると自慢(?)の金髪が全て消え去りますよ? もっとも……………」

閃光手榴弾の光は眼を閉じて防げたものの、音は食らってしまい耳鳴りがする。そのせいで、彼女が何を言ったかあまり聞こえなかったが、大体は予想がつく。

丁寧口調が冷たさを感じさせる来栖が視線を移すと————ガッシャーン。音を立てて倒れたのは壊れた大型の機械。プスプスと黒い煙を上げながらそれは沈黙している。破壊したのはもちろん、

「黒焦げになりたくなかったら、3秒以内に答えなさい……」

バチバチと掌から紫電を放っている御坂美琴だ。ひい、と頭を掴んでいる少女が恐怖の声を上げる。もつとも目の前で電撃を浴びて黒焦げになった機械を眼にして、恐怖を感じない人間なんてそうそういないだろう。その反応は普通だ。そして恐怖を植え付けた本人はそれを利用して完全に脅迫している。

自分は助かりたいから仲間を売ってしまおうか、という気持ちと絶対に仲間を売らないという気持ちは黒焦げの機械と御坂の電撃の威力を眼にした少女の中で全くせめぎ合っておらず、表情から察するに自分が黒焦げになりたくないから仲間を売るという選択肢一択だけとなっていた。

「……」

少女が口を開いた瞬間————来栖と御坂は地を蹴り、後ろへと跳んだ。つい先ほどまでふたりがいた地点、眼

前に通過するのは来栖が放つ陽電子砲に似たような巨大な光。それは先にあった鋼鉄へと衝突。いや、壁を溶かし、やがて消滅した。

人なんて簡単に消滅させることができるであろう、殺人レーザーが向かってきた方向、金髪の少女によって閉ざされた扉にはドロドロと鉄が融解したような断面の巨大な穴がぽっかりと開いており、中からふたり――――夏場だというのに半袖のコートを着た来栖よりもやや黄味が濃い亜麻色の髪の女性。もうひとりはお操着……のようなものにピンクのジャージズボンを穿いた黒髪の少女。

確認するまでもない。このふたりは囚われた仲間を救出、及び侵入者の排除を遂行しに来たのだろう。闇の人間がまた女性だということに驚くが、そんな暇はない。向こうは先制攻撃をしている。

――――完全に殺す気だ。

だが、現在は奪還した仲間に説教でもしているのか、注意はこちらへと向いていない。チャンスとは思わないが、少なくとも数十秒はこちらへと攻撃する素振りはないと見える。

「……御坂サン、なんか近くにあるヤツでいいですからなるべく巨大なものをあの人たちにぶん投げてくれませんか？」

「わかったけど、サンはいいわよ。アンタの方が歳上みたいだし……で、アンタの名前は？」

「…………黄泉川、来栖。と申します」

「そ、じゃあ——————————」

磁力で持ち上げたのは大きなタンク。それを弾丸とまでは全然いかないが、結構な速さで投降した。

油断しているのか、説教が未だに続いているのかは知らないが、三人はこちらへと視線を向けていない。普通このままいけば直撃——
——————————————————
のはずだが。

一瞬、風を切る音で近づいてくる物体の存在を察知したのだろう。リーダーと思わしきコートの女性が右腕を迫りくるタンクへと向ける。すると、鉄製のタンクはぶつかるはずだった面から徐々に分解されているのか、ボロボロの塵になって消し飛んだ。続いてその右腕に光が集中し、一本のレーザーを放つ。

もちろんレーザーに当たった機械類は先ほどのようにボロボロの状態へと変化しているが、来栖と御坂には傷一つない。

御坂は磁力で壁へと張り付き、そのままパイプなどを投げつけ攻撃する。だが、今度は腕に集中した光がレーザーではなく、円形の盾のようになり、向かってくるものを全て塵に還した。

攻撃をしていないことから来栖は無能力者とも思われているらしく、全く攻撃の矛先が向いてこない。「雑魚はあとで」ということだろう。実際、そう思われていた方が来栖にとって都合がいいのだが、なんの能力も使わずに金髪の少女を捕まえたのは自分なのにごか馬鹿にされたようで嫌な気分だ。

そんなことを思っていると、リーダーの女性はどこからかシャープペンの芯ケースのような小型の透明ケースを取りだした。中には白い粉末状のモノが入っているとわかるそれを背後の黒髪ジャージの少女へと投げ渡す。

(……能力増強薬の一種か……?)

薬を服用した人物の能力は攻撃系の能力ではなく、サポートに適した能力としか不明だが、明らかに纏っている雰囲気が先ほどと違う。電撃とレーザーが飛び交う戦場を心が無い人形のような瞳でじつ、と睨みつけている。

戦況はあまり芳しく^{かんげ}ない。あらゆる方向から飛び交うレーザーを御坂は避けるしかないが、対する相手は自分に向かってくる御坂の電撃を反らしている。……ん? 反らしている……? なるほど、原理は分かった。ここは自分が適材だ。

「御坂サーン! ここは俺に任せて、先進んでくださーい。後で、結果は聞かせてくださいねー!」

「は? ……アンタ、何を……」

御坂は来栖の能力を知らない。もちろん、御坂と会って一度も使っていないからである。

だが、自分もこんなところで道草を食っているわけにもいかない。計画を止めなくてはならないのだ『妹達』^{シスターズ}のために。

自分に先へ行けという少年——————黄泉川来栖の表情は何か策が有ると、読みとれた。御坂は電撃でダクトを破壊した。周囲には煙が充満し、敵の視界を遮る。

向かうのは敵がレーザーで空けた大きな穴。途中、敵の方向へと歩む来栖とすれ違う。

「……絶対に死ぬんじゃないわよ。すぐに私も戻るから」

「ええ、期待して待ってますよ」

返答を得ると、御坂は振り返らずに穴へと入り消えた。そして——

——煙が晴れる。

「何アンタ、女逃がしてヒーロー気取りのつもり？ムカつくわね」

「別に、そんなつもりはない。ただ、厄介なんですよ、あんまり人がいると……ね」

「まあ、時間稼ぎのつもりだろうけど………意味ねエええええんだよオオオオッ！！」

絶叫のような叫び、加えて飛んでくるのは巨大な一筋の光。鉄なんて簡単に溶かしてしまう殺人レーザーだ。しかし、来栖は事前に回避行動も取らず、左腕を前方へと突き出す。予想が正しければこのレーザーの支配権を奪える！

「―――――なっ！？」

予想は的中。敵から放たれた一本の巨大なレーザーは来栖の左腕、掌の中心で光球となって宙を浮いていた。

自分の放った攻撃が相手の手元で形を変えて存在している。それを目撃した女性―――――学園都市にわずか七人しかいない超能力者^{ベル5}であり、第四位を冠する麦野沈利^{むぎのしずり}は一瞬、その光景に眼を疑った。……いや、正確には麦野だけでない。背後にいる黒髪ジャージの少女、滝壺^{たきつぼりこう}理后、麦野たちが来るまで御坂と戦闘していたフレンド^{フレンド}セイヴェルンのふたりも自分たちのリーダーで、絶対的な強さを誇る人物の攻撃を自らの手に納めたという事実を信用するのに時間を要した。

「やっぱり、電子操作系の能力か……つくづく俺は運がいい」

「お前何言っ―――――！」

その先は続かなかった。言葉が出なかった。口を開いた麦野の約1

cmほど、その地点を麦野が出したのとは少々違った光の一閃が通り過ぎていった。そして、先にある鋼鉄の壁、十メートルはあろうその壁を文字通り、消滅させた。

麦野の能力『メルトダウナー原子崩し』。それは本来『粒子』又は『波形』のどちらかの性質を状況に応じて示す電子を、その二つの中間である『曖昧なまま』の状態に固定し、強制的に操ることができる。そして操った電子を白く輝く光線として放出する。これが彼女の放つレーザーの正体だ。

来栖の能力『アンチマター反攻物質』は反物質の生成、操作のほか、物質を一時的にその物質に対して反物質へと変換することが出来る。つまりは、いくら強力なレーザーといえども結局は電子。それを自分に到達する直前に電子の反物質、陽電子へと変換。その後、自らの手中で陽電子を加速、自分で生成する手間を省いたが威力は申し分のない、陽電子砲を発射した。

一見、簡単そうだが陽電子でなければ扱いが難しいため、速攻で返すなんて芸当はできない。だから、運が良かった。と言ったのだ。

そんなことを知らない麦野はバカにされた。そう解釈したらしく、

「――――舐めんナアアアアッッ!!」

計六本ほどか、全身からレーザーを来栖へと向けて放つ。――――だが、

「……黙っていれば美人というのはこうゆうのをいうのか？ま、数打てば俺がくたばるなんて考えを持っていないとして、どっちにしろ――――」

来栖が自らの支配下において返す、レーザーの変化した陽電子砲の数も計六本。麦野や滝壺、フレンドに当たるほんの僅かな地点を通り、背後の物体全てを消滅させる。破壊ではない消滅。来栖の能力を把握していないとはいえ、麦野との戦闘能力の差は明らか過ぎる。麦野は確信してしまい、来栖はその事実を突き付ける。

「――――ワタシアンタじゃ俺コイツには届かない」

ピリリリリリリリッ！一瞬の静寂が支配した戦場に不釣り合いな音が鳴り響く、それはどうやら来栖のズボンの右ポケットに入っている携帯電話から鳴ったもので、「やべ、マナーにしてなかった」と、緊張するべき場面にあっけらかんとした来栖。そして、着信の主を画面で確認すると……まさかの「黄泉川 愛穂」……姉だ。すぐさまボタンを押し、電話に出る。その前に「電話の最中に攻撃してもいいけどうっかり、返す攻撃に当たっても知らない」と念を押しておく。

「……やあ、姉さん。今日は遅くなるんじゃないの――――」
「――――すぐに帰ります……」

電話を切ると、来栖は何やら沈んだ表情でため息を吐く。絶対に説教だ。

「そういうわけなんで……帰ります。次に会うときはこんな戦場はやめてほしいですね———では」

「ちょ、待ちな———」

言い終える前に来栖は天井に陽電子砲を打ち、穴を開ける。破片で麦野たちの視界が遮られ、来栖はその視界から消える。

煙が晴れると、もちろん先ほどまで戦闘していた男はいない。天井から逃げたのだ。自分が手も足も出ず、勝ち逃げされたようで不機嫌な表情の麦野は背後の滝壺に近づき、一応安全の確認をする。

「滝壺、あの男のヤツ記憶した？」

「？うん、一応あのAIM拡散力場は記憶したけど………」

「なら、いい」

そのまま帰るぞ、と本来の依頼を忘れていいのか、興が削がれたように言うリーダー、麦野に若干いつもと違うような印象を抱いた滝

壺とフレンダ。

――――絶対にあいつの正体を突き止めてやる！

ふたりの部下に背を向けて歩く麦野の心には来栖に対する闘争心なのか、よくわからない感情が渦巻いていた。

H o l l o w 1 4 (後書き)

むぎのんフラグはまだ立っていません。まだ先です。

次から原作の欠陥電気編に繋がっていきますね。

感想、評価、ご意見お待ちしております。

H o l l o w 15

世界の常識上、時間を止めることは不可能と言われている。それは科学が発達し、多数の能力者を抱える学園都市でも通用する常識である。

時間が止まらないように白髪の少年の行っている実験。それも止むことが無く継続されている。

絶対能力進化 レベル6シフト

それが実験の名称。白髪の少年、現在の学園都市第一位の超能力者^{レベル5}、一方通行を実験名称の通り、絶対能力者^{レベル6}へ進化させる実験。結局、研究施設から持ち出せた情報はそれだけであり、実験内容、研究者は情報を引き出す前にタイミングよく機械がぶっ壊れてくれたおかげで引き出すことは不可能だった。

さて、話は全く違う方向へと行くが現在、黄泉川 来栖は妙な場所にいる。ビルとビルの間にある細く、暗い路地だ。路地から見える光は大通りが近いことを意味しているが、注意して見ていなければ中の様子なんてわからないほど暗く、何かがあっても見えない。そんな『闇』だった。

「……………」

普段の彼のようにだらけた人間の瞳。だが、虚ろのように見える瞳の奥に何があるのか分かる人間は五人としないだろう。そんな瞳で無言の来栖が見つめる先には――――――破壊されている地面と倒れている人間。

服装を見ると、あまりガラのいい連中とは思えない五、六人ほどの人間が体のあちこちに釘や何かが刺さっていたり、本来曲がるべき方向ではない方向に腕や脚、指などが曲がった状態で転がっていた。その中のひとり、黒い半袖の服を着た大柄の男はガチガチと歯を鳴らし、眼からは滝のように透明の液体を流して腰を抜かしていたが、全くと言っていいほど無傷。たまたま見逃されたのか、それとも予定でもあったのか不明だが、他の人間では話にならない。この男に話を聞くしかない。……泡を吹いて気絶しているが。

「……………起きろ」

ベキッ。来栖の右足が気絶している男の頭部側面を叩き、小気味のいい音を路地に響かせた。もちろんかなり加減をしているため、転がった男にけがはないはずだが、ヒッ！と恐怖の表情で眼を覚ました男はしきりに来栖が蹴った部分を押さえている。まるでかなりの重傷を負ったような、そこまで大げさなものだった。

「な、なんだ。お、お前、アイツの仲間か！ ……あ……アイツに言われて、お、俺たちを始末しにきたのか！？」

「煩いぞ。アンタを始末する気はないが、アンタが俺の機嫌を損ねるようなことがあったら、始末する」

ヒッ！と再度恐怖の声で男が鳴く。もちろん来栖の言ったことは嘘だが、このように脅しておかないと事件のことをショックで忘れていたとしても思い出すことがないかもしれない。加えて、この男が錯乱して襲いかかってくる可能性もないわけではない。こういうときはハツタリでも絶対的な恐怖を相手に植え付けるのが最善だ。

「聞きたいことがある。コイツ等を襲ったのは白い髪でかなりやせ型の少年か？」

「あ、……ああ……。バケモンだ……。あれは……。バケモンだ……」

男はブツブツと何度も何度も「バケモンだ……」と繰り返している。肉体は平気でもどうやら精神の方をやられたらしい。別に不憫だとは思わない。

状況を予測すると、この不良の集団。武装無能力^{スキルアウト}集団の類かもしれない彼らがほんの出来心で学園都市第一位と知っていて、少年に噛みついた。そしてゴミクズの様に潰された。実に単純明快じゃないか。こんなヤツらを数万人単位で殺しても絶対能力者^{レベル6}になれるはずがないだろう。実験とは関わりなさそうだ。さっさとここから離れ

「…………クセエ…………血の臭いだ」

男に氣を向けていたからか、先ほどまでは感じなかった臭いが鼻を突く。路地の奥————曲がり角がある。その先には何があるのか？…………いや、予想なんてついてる。

————死だろ？

ブツブツ言っている男の脇をすり抜け、路地の奥へ、奥へ。微かな光しか届かない闇の道を一步、また一步と踏み出すたびに、何かが^の押し掛かっているような錯覚を起こす。だが、脚は進む。本能の赴くがまま、脳の指令を実行していく。

そして、角を曲がり新たななる闇へと対面する。

「————あア？ なんでンなところに————
————テメエは……」

白髪の少年、学園都市第一位^{アクセラレータ}。一方通行は振り返る。その足元には血だらけで横たわる少女。虚ろな瞳をしているその少女はかなりの重傷を負っているようだったが、辛うじて生きてた。疑問に思ったが、その顔はどこかで————つい最近にあったではないか、アレは学園都市第三位、常盤台の『^{レールガン}超電磁砲』御坂美琴の顔だ。

「……なるほど、大体は予測できた。その子が実験で殺す相手ってわけか」

「テメエ何だ？ 実験関係者か？ 何だがテメエの顔に見覚えあるんだが、科学者には見えねエ。何モンだア？」

そうか、覚えていないのか。……まあ、そこまで関わりはなかったから当然といえば当然だが。
一方通行は視線を横たわっている少女から、来栖へと移す。紅く染まった眼光が鋭く、睨む。

「あそこ特力研の出身者、って言ったら分かるか？ アクセラレータ第一位」

「……………何…………？」

アクセラレータ
一方通行の微かに歪む。記憶を掘り起こしている最中なのだろう。
その間、来栖は能力を発動、演算を開始する。

————— 逆転させるのは脚にかかる反作用。

「テメエ……………まさか、ア—————！！」

言いかけた、瞬間。タン、来栖が少し脚を踏みこんだだけで踏み込まれたコンクリートの地面は弾ける。そして、当人は常人では絶対に出せないスピード。まさに砲弾のような速度で、前方へと発射されるように跳んだ。

記憶が正しければ一方通行の能力は『ベクトル変換』。運動、熱、電気、光などあらゆるものに存在する『向き』^{ベクトル}を触れただけで思うがままに操作することが出来る。全てを消滅させることのできる反物質も素粒子。ベクトルを持っているため通用しない。下手すれば自分に被害がある。

だから、ここは実験相手の少女をさっさと捕まえて、逃げるのが得策だ。自分が死ぬかもしれない危険な策だったが、不意を突いたせいか、見逃したのか知らないが一方通行の横を音速に達する速度で駆け抜けることは可能だった。――そして、通り過ぎざまに手を伸ばし、血だらけで倒れていた少女の服を掴み、抱える。……お姫様抱っこ状態だ。

「……どう、して……？ あなたは……と、ミサカは……」

「舌嚙むから喋らない方がいい。直ぐに着くから――」

優しくそうに微笑む。そんな来栖だったが、内心は結構な恐怖心が占めていた。

―――――背後から化け物が腕を伸ばして掴んでくるかもしれない。

そんな『死』の恐怖を背にして、振り返らずに走っている。振り返ったら現実になりそうで、そんな勇氣はない。今はただ、この娘を生かすためだけに走れ。そのことだけを考えろ。

御坂美琴と同じ顔をした少女は苦しそうに眼を瞑^{つむ}っているが、トドメを指される直前だったのだろう、呼吸はそこまで乱れてはいなかった。だが、重傷には変わりなく、出血多量で死ぬ可能性も充分ある。

治療などできるはずもなく、できることは唯一医者^{いしや}の元へと走ることだけ。―――――まるであの時の姉の立場に自分がなったようだ。

「―――――絶対に助ける。だから、安心しろ」

こんなときにかける言葉が安っぽいものしか思いつかなくて、姉の言葉を使ったが効果はあった。抱えられるだけだった少女は来栖の首に腕を回し、しっかりと抱きついた。死にたくない、死にたくない！そう、心の叫びが聞こえているような……そんな気がした。

路地を抜け、商店街に飛び出す。その際に叫び声を発したり、驚愕の表情で血まみれの少女を抱えた少年へと視線を送る人間は多数いたが、すべて無視した。――――――オイ、止まれ！そんな声も聞こえたが止まるつもりなんて、全くない。

ただ、走る。手にある暖かさが消えないように、消さないように。
第七学区の病院へと

H o l l o w 15 (後書き)

あ、やべえ。予定になかった御坂妹にフラグ立てちまった。……ま、いいか。

……どうやって一方通行倒そう……。まあ、倒せる方法も無くは無いですか……

感想、評価、ご意見などお待ちしております。

飾り気のない部屋。時計と机、ベッドにパソコンと白い壁紙のその部屋は高校生の少年が住む部屋にしてはあまりにも物が少なすぎた。その部屋の主、黄泉川 来栖は每晚自らが眠るベッドの脇に腰かけていた。

来栖の視線の先、汚れ一つない純白の布に包まれて眼を閉じているのは茶髪でどこか虚ろげな瞳の少女。細かい部分を除けばその顔はつい最近知り合った中学生の少女、御坂 美琴に瓜二つで遠目では見分けがつかないほど酷似していた。

先日、かなりの速度を出して第七区の病院、前に世話になったカエル顔の医者がいるところへ走ったが、怪我自体は大したことがないらしく（あの医者にとっては大が）入院することにはならなかった。だが、やはり『実験』で殺されるはずだったのだ。どこかに放置しておくで今度こそ本当に殺される可能性がある。だから一時的処置として教員用4LDKマンション——つまりは黄

泉川姉弟宅に居候という形で住まわせることにした。

幸い、部屋も余っている上、姉も「同居人が増えたのは嬉しいじゃん」と簡単に納得してくれた。いや、本当はなにか事情があることは分かっているのだろうがあえて聞いてこないのだろう。いい姉を持ったものだ。

「気分はどうだ？ 腹は減ってるか？」

「気分は悪くないです。食欲は――――」

ぐう。中学生の少女に似合った可愛らしい空腹を知らせる音が鳴った。失礼だが少々笑いたくなってしまった。

「……あります、とミサカ顔を半分隠しながら答えます」

恥ずかしかったのだろう、白い布団の上に持ち上げて顔を半分隠している少女はちらちらと眼を逸らしたり、合わせたり。まるで餌を待っているような子犬のようだ。と、来栖は表情に出さないように心の中でつぶやきながらベッドから立ち上がると、ばたん。扉を閉めて台所へと向かった。

「…………あの人はどうして…………とミサカは誰もいない部屋で一人
呟きます…………」

作ったものは簡単な粥だ^{かゆ}。病人ではないが体にあまり刺激を与えないものを食わした方がいいだろうという考えから、ネギと味噌を少々入れたものにした。まるで風邪をひいた人用の食なので正直、文句の一つでも言われるかと思ったが、何も言わずに完食した。……何も言われないとそれはそれで妙な気分だが、まあ良しとしよう。自己完結すると粥の入っていた小鍋と盆を机に置き、少女に向き合う。

「さて、すまないが実験の内容を聞いてしまった以上、君を外出させるわけにはいかない。研究所に戻るなんて言語道断だ。いいね？拘束するようですまないが、しばらくはここに居てもらう。何か質問は？」

「……では、一つだけ。一つだけでいいので聞かせてください、とミサカはあなたに質問の許可を求めます」

「……………どうぞ。答えられる範囲なら答えよう」

「あなたはなぜ実験に関わろうとしたのですか？と、ミサカは理解できないあなたの行動の理由を問います」

理由……ねえ。

感情のこもっていない様な瞳で見つめる少女。あまりいい言葉ではないが、やはり実験のために作られ人と関わりを持たず、『暖かさ』を知らないこの少女は論理的なことしか理解できないのだろう。かつての来栖も感情で行動することなどなかったように。そしてそれはあの少年————学園都市最強を誇る一方通行にも言えることだろう。だから、

「————止めたいんだ、友達^{アイツ}を」

え？ そんな声が少女の口から漏れる。————今、この少年は何と言った？ 止める？ 誰を？ 学園都市最強の一方通行^{アクセラレータ}を？ 無理だ。無理に決まっている。そんな心の内を読み取ったように来栖は続ける。

「……まあ、俺がアイツに勝てる確率は億に一つくらいかもしれない。————だがな、アイツもそろそろ孤高の存在なんて気取ってないで、素直に表^{いっち}に出てくるべきだと思うからさ……」

どこか遠く、儚さを感じさせる口調。曖昧な表現かもしれないが、少女はそう感じた。同時に『感情』というものが芽生え始めていたが、そのことを自覚するのは今ではない。

今は寝てろ。来栖が静かにつぶやくと、覚めていた少女の瞳にまぶたがゆっくり、ゆっくりと降りてくる。眠気など少し前に無くなっ
てしまっていたのに、だ。その言葉はまるで暗示のように、少女の
脳内に反響する。やがて、瞳が閉じられる。

来栖はすう、すう。と立てる寝息を確認すると少々崩れていた布団
を直し、机の上に置いてある小鍋の盆を取ると、なるべく音をたて
ないように足元にも気を配りながらゆっくりとドアを閉め、部屋の
外へと出る。

盆を台所へと置き、片づけを済ませると、ズボンの右ポケット。そ
こにある携帯電話を取り出し、スライドさせて出現した下半分のボ
タンを素早く押し、番号を打ち込んでいく。

――――――――――
発信先『上条 当麻』

トゥルルルル、トゥルルルル――――――――――ピッ。

しばらくの呼び出しが止み、聞きなれた音が聞こえると、相手が通
話できる状態だということを認識する。

来栖ははっきりと、より簡潔に。現在、一番信用が置ける相手に対
して、要件を述べる。

「上条、もしも俺が――――――――――」

H o l l o w 1 6 (後書き)

ああ、短い気がする……。宿題やらやるが多すぎて執筆が遅れてしまいました……。申し訳ない。

本当に一方通行にどうやったら勝てるのやら……。大丈夫か反攻物質……

感想、評価、ご意見などお待ちしております。

夜。闇色に染まる空に浮かぶ、青白い光で暗き道を照らすのは今宵の三日月。

冷めたような光を放つそれは裂けた口の様で、『刑場』へと自ら向かう少年――――黄泉川 来栖を嘲笑うかのように空に有り続ける。

人の気配も、機械が駆動する音も無く、ただ物静かな工業地帯の一角。そこは列車の操車場、もしくは車庫と思わせる場所で、学校の校庭ほどの広さの大地には線路と同じ砂利が敷き詰められ、列車が走っていたであろう線路が十本以上、平行にズラリと並んでいる。

操車場を囲むのは貨物列車やトラックが運ぶような金属製のコンテナ。それはいくつか積み重ねられ、積み木のようなその高さを三階建てビルに匹敵するほどとなっている。

そして、乱雑なコンテナが入り組んだ道を作り上げ、操車場の周囲に迷路を形成していた。

「――――よオ。テメエの昔を知ってる人間としちゃ、こんな無意味なコトテメエがするとは思わなかったけどなア……――――
――――八年ぶりだったか？ 『反攻物質』
アンチマター

「正確な日数を求めないなら、八年ぶりとなるな。 久しぶり一方
ラレータ アクセ

通行」

静かな闇の中心で学園都市最強の能力者、一方通行^{アクセラレータ}。周囲と同化するようなその姿を晒すように、そして受刑者を待つ処刑人の様に細い腕をわざとらしく広げた状態で直立していた。

言うまでも無いだろうが、細いのは腕だけでなくその身体全体。来栖の記憶の中に有る過去の彼は少なくともここまで酷くはなかった。それはかつての『一方通行』^{アクセラレータ}よりも『反攻物質』^{アンチマター}としての自分がそのまま成長した姿の方がはるかに近いと感じる。それほど酷く、変わってしまった姿だった。

「なあ、オマエはさ、……ホントに絶対能力者^{レベル6}になれるなんて信じてるのか？」

ピクッ。闇に浮かぶ白い髪の少年。その眉が僅かに吊りあがった気がした。

ざくざく、と砂利を踏み締めながら一歩。一歩、また一歩。開いている距離を少しずつ詰めていく。

足取りは……重い。進んでいるが、進むごとにそれは重くなっている。目の前に存在している者への恐怖を体現していた。

「超能力者^{レベル5}は学園都市に七人しかいない。そして、オマエはその頂点だ。……ただでさえ、一人で軍隊と戦闘して勝てるレベルのヤツらの遥か上に立つ人間がそれ以上を求めた先に有る結果なんてモン

は――――」

「ペラペラ、ペラペラ。なにオマエ？今更説得なんて、くっだらねエマネしてんじやねエぞオツ！！」

絶叫。そして一方通行の足元に存在している小石が一直線に、来栖のいる方向へと弾き飛ばされる。

音速を超える速さ。フルメタルジャケット完全被甲の弾丸よりも有に上の威力を持つそれは当たれば人間の体など簡単に吹き飛ばすだろう。――――
――――だが、それを……………殴り飛ばした。

「――――――へエ……………！」

正確には右手を前方へと突き出しただけ、しかし、一方通行は感心するような、そんな表情で口を歪める。アクセラレータそんな一方通行の耳が一瞬、風を切り裂く音を捉えた。次にはドオン、という爆発音のよう――
――――振り向くと、背後にあったものは鋼鉄製の車庫。ただし、その閉じられた扉…………シャッターには大きく削り取られたような、まるでクレーターのように圧倒的な破壊力を持つ物体が衝突した痕跡が存在していた。

「…………オイオイ、オマエって確か反物質の生成と操作だった気がスンだけだよォ…………俺の記憶違いか？まア、どうでもいいンだけだよ

オ！！！」

一方通行が地を踏みつける。
アクセラレータ

その衝撃の『向き』が変換され、一方通行の足元に寝かされていた鋼鉄のレールが二本、ぐにやぐにやとバネに弾かれるように直立する。そして、一方通行は裏拳で目の前のクモの巣でも払うように、直立したレールを弾き飛ばした。
アクセラレータ
うらけん

それはほんの触るような、ほとんど力をかけていない動作。にも拘わらず、ゴォン！！と寺だか教会だかの鐘を鳴らしたときのような金属を打つ轟音が響き渡った。

くの字に曲がった二本の鋼鉄製レールは、小石には負けるものの砲弾のような勢いで来栖へと向かう。

———それも殴る、蹴る。———弾く。

普通では碎けるのは拳と脚の骨だ。しかし、自ら砲弾と化したレールへと向かい、それを殴り、蹴り飛ばす来栖には一切の損傷も無い。……当然だ。今の来栖が能力によって逆転させているのは”反作用”という法則だからだ。

反作用とは『ある物体に力が働くとき、力を及ぼしたものに同じ大きさでで正反対の方向に働きの力を返すこと』である。

例えば相手を横から平手打ちしても倒れず、自分の手にも痛みがあ

る。これは反作用によるものである。では、これを逆転させたらどうだろうか？

普通、鉄のレールを殴っても自分が痛みを感じるだけで、レールは僅かに動くだけであろうが、反作用を逆転させることのできる物体を纏った拳で殴れば拳にかかるレールの力は全てレールの元へと返される。よって、鉄のレールだろうが高速の小石だろうが全てを弾き返すことが出来るということだ。

———だが、そんなことができるくらいで『ベクトル操作』に通用するわけではない。

「こんな程度じゃねエよなア！見せてみるよ、元・第一位イツ！！」

爆発した。一方通行の背後へと足元にあった砂利が、別に爆発物を使用したわけでもなく、ただ脚を踏み込んだだけで。

脚にかかる運動量の『向き』を変更したのだ。まるで、足の裏にロケットの噴射装置がついているかのように、たった一踏みで七メートルほどの距離を一気に、一瞬で詰めた。

そして突き出される両手。通常の間人なら突き出されている腕に当たってもなんの問題も無い。だが、一方通行の両手は猛毒よりも性質の悪い、ある種兵器と言っても差し支えない。

回避方法———決定。死の手が身体に触れる直前、来栖の足元も爆散し、身体が後方へ跳ぶ。一方通行が行った

ものと同じように見えるが、こちらは脚にかかる『反作用』を逆転させ、加速力を得た。路地裏で御坂妹を救出する際に使用した能力と同じである。

(……っでも、いつまで持つやら……)

追う相手に逃げる来栖。体力手には上だが、能力的には劣っているかもしれない。……いや、正確には勝っている。

——だが、能力を完全に行使したらどうなるだろうか？反物質を操るだけでない。物理法則を逆転させることが出来るのだ。物理法則を逆転させる能力を完全に行使すれば、いかなるモノも反射し、操作できる一方通行でも倒せるだろう。しかし、それは相手に『死』を齎すことと同意味なのだ。

「……………ッ……………」

物理法則を逆転させるということは容易なことではない。一時的とはいえ、世界の法則を変えていることには変わらない。相当の演算能力を有する。長時間行使できるものではないのだ。頭痛を伴うのも当然、能力が使用できるのはあと数分だろう。——

——その間に上条と御坂が目的を遂げるのが先か、それとも殺さずに一方通行を倒すのが先か。

後者は限りなく無理に近い。逃げ続けている間にも思考を続けているが、それに対する答えは全て『不可能^{Not}』。おそらくこのまま思考していても能力が切れるほうが先だろう。

前者、黄泉川 来栖が一方通行と戦闘している間、御坂 美琴と上条 当麻が全ての研究機関を破壊する。こちらも無理に近いかもしれないが、少なくとも前者よりは確率も高い。何も逃げている時間内に全て破壊するのではなく、今日中に全ての研究機関を破壊することが出来れば以降の実験は継続不可能となる。

(……まあ、どちらにしろ俺は死ぬかな……)

瞬間――能力が切れ、脚が――
――止まった。

「鬼ゴッコは終わりですか？ おら、さっさと逃げなきゃ鬼が殺しちまうぞォ！」

挑発的な笑みを浮かべながら放たれた左手の一撃。それ自体は細い腕から放たれたものなので大したことはないはずだ。……なのに、受けた来栖の腹部には太い丸太で殴られたような衝撃が有り、大きく後ろへと、まるで風に乗った花の様に吹き飛ばされる。

「……………ガ……………ア……………ッ……………!!」

計算していたのだろう、背後に有ったのは鋼鉄のコンテナ。その物体へとかかなりの勢いで叩きつけられた。

衝撃で肺から空気が押し出され、強制的に吐きだされる。

空気だけでない、共に吐きだされたのは……血。腹部の感覚でもわかるようにそれは内臓の一部が潰されたことを意味していた。

呼吸が少々困難になってきたあたりを考えると肺に穴でも空いたと思っておいた方がいいかもしれない。ズルズルと、叩きつけられたコンテナの側面から地面へと滑るように降下し、砂利の地へと身体が落とされる。――ズボンの右ポケットの中では携帯電話がマナーモードであり、着信を知らせるべく振動している。だが、取らない。取る必要もない。

「――――アクセラレータ――一方通行ア………」

「あア……？」

ゆっくりと、一步一步。わずかだが、確かに進んでいる目の前の少年に、来栖は口元から血を垂らし、ニイと口を歪めて笑う。そして――――
告げる。

「――――俺たちの勝ちだ」

H o l l o w 1 7 (後書き)

一話じゃ終わらなかったア……次回が短くなりそう。

次回はまたまた本編では登場が遅いあの人がでるかな？

感想、評価、ご意見などお待ちしています。

H O l l o w 1 8

「俺たちの勝ち……だとオ……？」

学園都市最強、超能力者の頂点。そう呼ばれる少年、一方通行は目の前で無様にコンテナに寄りかかり、体勢を維持している。そんな口元から血を垂らしている瀕死の少年、『反攻物質』アンチマターが絶望的な状況で口元を歪め、笑みを浮かべながら放った言葉を一瞬疑った。……俺が、負け？何言ってるんだコイツは。ついに頭でもイカレちまつたか？と。だが、

「何度でも言ってやるよ。――――――テメエは負けた。俺たちの勝ちだ」

一方通行を見上げる状態の来栖は愉快に、愉しそうに。そして、勝利を確信したように、訳の分からない表情の少年に言い放つ。

「さっき連絡があつた……アンタの実験に協力している施設は全部、一つ残らず破壊した。……これで実験継続は不可能だろ……？」

.....

無言。実験継続不可能と告げたのにも拘らず、無言。そして表情も全く変わらない。相変わらず、コンテナに寄りかかっている来栖を見下したまま、何を考えているのかすらわからない。口が開く、飛び出した言葉は――

「――――――――――そんなモンはもうどうだっていいんだよ。今はな」

「……………は？」

「確かにイ、実験継続は不可能かもしれないけどオ……………オマエを殺した方があのクローンを何体も殺すより無敵に近づけンじゃねエのか。って考えたわけよ」

言葉が切れる。同時に腹部を強烈な衝撃が襲った。――――――――
――蹴られたのだ。

背後のコンテナは反作用を逆転させたせいでコンテナはへこみ、来栖に衝撃はなかったが、一方通行が放った『運動量』のベクトルを変換した上での蹴りの衝撃は殺せない。実際に蹴っている人間の力は貧弱なため、その身体から放たれた攻撃の衝撃を返したところではほとんどダメージにはならない。

『アクセラレータ一方通行』が蹴り続け、『アンチマター反攻物質』が食らい続ける。そんな中で一方的な暴力を奮い続ける一方通行は狂ったような高笑いをふたり以外の人間は存在しない夜の操車場に響かせる。

「アハハハハハハハハハッ！………テメエはいつからそんな弱くなったンですか？『表』の明るさで日和っちゃったのかアッ！？ 何とか言ってみろよ絶対能力者ッ！」

「……………ア……………エ……………」

無言、ではない。本当に、ほんのわずかではあるが、微かな声というより音。そんな儂いものが口から漏れている。だが、相手はそれを聞き取ることはできなかった。

高笑いが止む。表情だけが歪み、他の部位は全く機能しない。それを相手も分かっていたらしく一方通行は一度、ため息をついた。そして来栖の首を掴み、持ち上げる。

「テメエ何しに来たンだ？時間稼ぎか？その気になれば俺といい勝負ができるはずのヤツがこんな弱いわけねエだろ。舐めたマネしやがって……テメエは今や学園都市最強になった俺を殺すことを危惧してンのか？……本気を出すまでもねエってのか？」

若干の苛立ちの窺える声色で淡々と、満身創痍だがその耳に確かに届いた。———確かにそうだ。俺は一方通行アクセラレータを殺してしまふ。そんなことを危惧していた。……圧倒的な破壊と消滅。『悪人』の持つようなそんな能力しか、それしかなくて『幻想殺し』イマジンブレイカーなんて宿っているはずもない右腕が起こせるのは奇跡でも、なんでもなく『人を殺す』ことだけ。

——— ああ、『俺』は殺されに来ていたのか
……………

本当に実験を止めたいのだったら最初から相手アクセラレータに対して能力を使うべきだった。その気になれば一方通行が反射していない数少ないものの、『重力』を相手のいる場所だけ逆転させれば済んだ。

だが、それをしなかったのは何故か？ 人生で初めてとも言える友人を失いたくなかった。

相手はそう思っていなかったかもしれない。いや、研究者たちからアンチマター『反攻物質』に負けるなど毎日のように言われ続けていたのだから確実に一方通行あちらは自分のことを上にいるヤツ。と嫌っていただろう。なのに勝手な行動で頼まれてもいないのに「大量虐殺をしている友人を止める？」アホらしくてため息も出ないほど滑稽な話だ。……なんなら最初から行動なんて起こさなきゃよかった。正義の味方なんて気取らなきゃよかった。

——— なっさけねえなあ、兄弟。善人気取りはやめとけよ。

不意に、そんな声が聞こえた気がした。男性の声だが、一方通行アクセラレータではない。ぼやける視界だが一方通行は未だに来栖の首を掴んで宙に浮かせたまま、口を一切開いていない。では、誰だ？ 周囲には誰もいない。

――殺したくない？甘ったれたこと言ってんじやねえよ。殺^やらなきゃ、殺^やられる。テメエが負ける可能性なんか存在しねえんだ。テメエは『反攻物質』^{アンチマター}その気になりや世界だって破壊できる”絶対的存在”だろうが。

声は続く。周囲は白と黒の旧型テレビ映像のような世界に染まり、発電する風車も走る車も、人も。来栖の首を絞めている一方通行でさえも白と黒に染まり――――停止していた。色がある存在は黄泉川 来栖という人間だけ。そして聞こえるのは風の音でもなく、男の声。

――いいぜ、テメエができねえのなら俺の力を貸してやる。

声しか聞こえない。顔は見えない。だが、その声の主は獰猛そうに口元を歪め、笑った気がした。そして世界は色を取り戻し、時間は動き出す。

――『^{ダークマター}未元物質』の力をな……………！

「……………あア……………」

自分が掴んでいる少年、『反攻物質』アンチマター————黄泉川 来栖を
見ると、一方通行は首をかしげた。アクセラレータ

つい先ほどまで歪んでいた表情をしていた顔がぐったりと、まるで
糸の切れた人形のように、うつむいていた。腕も脚も、全てに力が
入っていないようにだらんと垂れ、死んでしまったようにも見える。

別にそれなら死んだ、とか気を失ったで済ませられる。アクセラレータ一方通行が
疑問に思ったのはそんなことではない。『反攻物質』アンチマターが、いつこん
な様子になったのか？一瞬でも眼を離していなかったにも関わらず、
眼球はその様子を捉えることができなかった。

「――！？」

轟！！ 風が唸る。同時に一方通行は掴んでいた腕を離され、来栖の身体から10mほどの距離へと弾き飛ばされた。能力を発動していたにも拘らず、だ。

――一方通行は吹き飛ばされると、風のベクトルを操作し着地する。体勢を立て直して、前方へと視線を移す。――

――そこには異形の光景があった。

「……………オイオイ、なんだそりゃア……………」

目の前にいた人物を、白い繭のようなものが包み込んでいた。いや、それは。一人でに広がり、周囲の風が再度唸らせるそれらは……………」翼” だった。

天使のような純白の翼。だが、その翼は三枚しかなく、その総べてが背中左側にしか存在していなかった。三枚の片翼、ということだ。

本来の姿は六枚の翼が存在している、と連想させるようにその姿はバランスが悪く、翼の存在する天使のように神々しいのではなく異形。

夜の闇なのか、影が差しているのかその表情は全く見えず、翼だけが闇に輝く。それは羽ばたくと一気に天へと昇り、月を覆い隠すように重なり広がる。

「ッ!？」

月を翼が覆い隠した瞬間、一方通行の全身が恐ろしいほどの寒気に襲われた。感情的なものではない。実際に一方通行アクセラレータの体内の温度は急激に下がっていた。全身が凍りつく、温度が奪われるまさにそういうべき感覚が襲っている。

「……………テ…メ……………エ……………何、……………しゃ…が……………つ……………た……………?」

酸素を絶え絶えに取り込みながら、問いかけるも相手は答えない。ただ、宙にその翼を広げ、見下すように空で佇んでいる。相変わらず月は翼によって覆い隠されたままで全くと言っていいほど、見えない。

（……………月に何かしやがったのか……………? いや、月光を食らったくらいでなんでこんなバカみてエな寒さになるんだよォッ!）

本当に体が凍りつきそうな寒さを抑え、四股に力を込めながら立ち上がり、能力を再設定しようとする。だが……………

「……………vjrp潰qw」

「!？」……………ガ……………ッ……………」

目の前には拳と変わって放たれた三枚の翼。咄嗟に回避に移ろうとしたが、間に合わず鈍器で殴られたような衝撃を腹部に叩きこまれる。ゴリゴリゴキッ!と鈍い音が一方通行アクセラレータの体内で炸裂し、あらゆるベクトルを『反射』する彼の体が勢いよく吹き飛び、コンテナを一つ破壊した。

「……………i w d f 終 w q」

夜の闇の中、翼を持った異形の魔人と化した黄泉川 来栖は穴の空いたコンテナの先……………倒れている一方通行アクセラレータの姿を確認すると瞳を閉じる。

三枚の翼はまるで体内に戻っていくように、徐々に小型化し、やがて完全に消え去る。

……………同時に来栖の身体が前のめりに倒れ、全身を地に打ち付けた。

H o l l o w 18 (後書き)

姿は出ていませんがお早い登場でございますね、あの人。見事、一方通行撃破……といたいところですが、こんなのでよかったのだろうか……

能力名『物質』とあるようにふたりとも何らかの只ならぬ縁があります。

感想、評価、ご意見などお待ちしております。

H o l l o w 19

三枚の片翼。聖書に登場する天使の翼と限りなく似通ったそれは『異能』の力を正体不明へと。月の光を正体不明の兵器に変え、全てを『反射』する一方通行の体を吹き飛ばした。

何らかの理由で発現したそれは体現者である黄泉川 来栖を人間の域から外へと超えさせただろう。

だが、本人は立ち上がらない。地に全身をつけたまま、まるで眠ってしまったかのように、その状態から少しの変化もなく。

一方通行は立ち上がった。足元の砂利を踏みしめ、度々に体勢を崩しながらもその体で地に立ち、一步、一步とザクツ、ザク、音を鳴らしながら倒れている来栖へとゆっくり、時々転げながら近づく。

「……やりや…できんじゃねエか………だがよ………俺の勝ちだ」

あと数歩。距離にして五メートルほど時間にして数秒。動かない相手へと到達し、自らが勝利を得るまであとわずか。『反攻物質』を殺せば自らは『無敵』になることができる。幾度も実験を行ってきた少年、一方通行は確信した。

——これで終わる。実験も嘯みついてくるヤツを排除する毎日も……！

腕を伸ばす。数ミリ単位も動かない相手に外すことなどなく、黄泉川 来栖の体は触れた瞬間に全身から弾けたように血が噴き出して……死ぬ。

決定事項。確実。絶対。全てが当てはまった。あと三メートル――視界は砂利の地面を間近に写し、相手は写っていないかった。

(……アレ……なんで全部縦に見えるんだ……?……俺が横向きになってるからか……)

顔を上げればあと一メートルほどのところに相手の頭がある。手を伸ばす――動かなかった。

腕を伸ばせ。脳が手を伸ばせと指令を送っても右手も左手も全くの動きを見せない。

脚を動かせ――動かない。両足もまた同じく全くの動きを見せない。唯一動くのは首から上だけであり、それ以外は一切機能しなかった。

(……チ、ク……ショウ……俺はまた……超えられなかったのかよ……)

唯一機能する首を動かし、来栖の脳天を睨みつける。だが、睨むだけで何もできない。動かない。

もしかしたら能力も使えなくなっているかもしれない。だとしたら能力者でもなくても、第三者がこの場に現れたとして、勝ち目はないだろう。

———いつも。毎度毎度そうだ。『特力研』^{あそこ}に居た時、そして今現在も。学園都市第一位となつたとしても、あと数センチ先の人間に届かない。

特力研では実験の最優先は『反攻物質』^{アンチマター}であり、当時の一方通行を^{アクセラレータ}凌駕していた。

つい先ほどまで完全に優勢だった。しかし、本気になったのか、わけのわからない翼が顕出した途端、優勢だった状況がまるで幻想のように正体不明で圧倒的な力で振じ伏せられた。

そして、気がついた。『反攻物質』^{アンチマター}という能力を持つ少年は学園都市に七人しか存在しない超能力者^{レベル5}の枠になど、存在していなかったのだということ。

第一位…一方通行 能力名 『一方通行』^{アクセラレータ}

第二位…垣根帝督 能力名 『未元物質』^{ダークマター}

第三位…御坂美琴 能力名 『超電磁砲』^{レールガン}

第四位…麦野沈利 能力名 『原子崩し』^{メルトダウン}

第五位…食蜂操祈 能力名『心理掌握』
メンタルアウト

第六位…不明 能力名『不明』

第七位…削板軍覇 能力名『未解明』

六位は不明だが、能力研究の応用が生み出す利益が基準で決定しているレベル5では確実に『反攻物質』アンチマターという能力は六位のはずがなかった。反物質を生成し、操れる他、物理法則を逆転させることのできる物質を生み出すことのできるなんて能力によって得られる利益は莫大だ。一位になっても可笑しくはない。

では、どこに存在しているのか
——『絶対能力者』レベル6だ。

普通の人間なら「有り得ない」の一言で終わらせてしまう。だが、かつての『反攻物質』アンチマターの存在と能力、そして現在、学園都市最強であり、本来傷つけることすら不可能の自分が地に伏せられている事実。

それは相手を『絶対能力者』レベル6だと認識するには十分過ぎるほど、一方通行の心を煮え滾らせる。

——自らが至りたかった到達点。何人もの御
坂妹を殺して、殺して殺して殺したにも関わらず未だに手にすることの許されない奇跡。

学園都市の頂点に君臨する少年は誰も傷つけないようにと、絶対的な力を求め、降りかかる火の粉を払うのではなく、火の粉が降りかかることのない毎日を欲した。

常人として生活しているが、絶対的な力を持つ少年は絶えることのない既知ではなく、見えざる未知を求め、同時に暖かなたった一人の家族と友人との毎日が続くことを望んだ。

学園都市の頂点に存在する少年、一方通行は『反攻物質』の少年、黄泉川 来栖があの日からどのような生活をしていたのか知るはずもない。しかし、彼の日常はさぞかし明るいモノだったのだろう、と。その表情から読み取れた。

その時、いや、今でも心の中で渦巻いているドロドロとした負の感情。——————コイツを見ているとイライラする。殺してやりたい。憎々しい。

自分の実力も解っていない癖に噛みつく相手にイライラすることはあっても、憎い。など、特別な感情を抱いたことは一度もない。なのに何回も顔を会わせた事のない亜麻の髪を持つ少年に対しては自覚しない内、負の感情はどんどん積み重なり、巨大化するように募り、肥^{ふと}っていった。

————それはなぜか？

アクセラレータ

一方通行は首を左横へと動かし、裂けた口のような三日月を見る。首を動かす一瞬、相對していた少年の顔を瞳が写した。

（……………そういうことかよ……………）

睨むような眼つき。それは脱力したように細められた。それを表すもののこそ出てはないが、その表情、その瞳はまるで幼い子供同士が喧嘩した後――――涙を堪えてこら鳴咽を漏らし、

(……………俺は……………)

二人を残して誰もいないはずの操車場。眠るように瞼が落ちていく
 アクセラレータ
 一方通行の視界が、数メートルまだ姿形は掴めないが確かに人型の
 影を写している。数は三人。だが、そんなこと今になってはどうで
 もいいと思えるほど、思考は透明で心は穏やかだった。

力、家族、友人。全て一方通行が手に入れることのできなかったモノを有している黄泉川 来栖――――『反攻物質』アンチマター

の存在を無意識の内に嫉妬し、憎いと思った理由、それは単純にして明快。閉じる瞼と沈んでいく意識。そんな中、学園都市最強と呼ばれる少年、一方通行は笑う。

「アイツが羨ましかったのか」

H o l l o w 1 9 (後書き)

宿題やら積みゲー消化やらで忙しく更新が滞っていた作者でございます……申し訳ありません。

欠陥電気片はそろそろ終了です。感想、評価、ご意見などお待ちしております。

H o l l o w 2 0 (前書き)

誠に更新遅くなりまして申し訳ありません。これからは一定のペースで更新できるように頑張りますので、これからもよろしく願います。

H o l l o w 2 0

――お前は偽っている。

嘘をついている。虚飾している――――――そんなことを言われたような覚えがあるのは何故だろうか？

言われたこと自体を覚えていないのではなく、確実に信用できるとは言わないが八割程度の信用ができる自らの記憶をいくら掘り起こしてもそんなことを誰かに言われたこともないし、そもそもそんな人間と関わった覚えすらない。

だが、どこかに刷り込まれたようにその言葉は心の奥底で反響している。

黄泉川 来栖の意識は闇の中。黒なのか白なのか、もしくは色など存在していないのか闇の中で呪詛のような、しかしこの世のものは思えぬほど美しく、澄んだ声は響く。

――エリ・
主よ、何ゆえに我を見捨てたもう
エリ・レマ
・サバクタニ

美しき声は歌う。まるで天使のような……だが、どこか悲しい。苦しい。痛い。負の感情が歌を通じて流れる。空間が染まる。闇に闇が上書きされる。闇と闇が対立する。

一つの世界を形成したような意識の底で、もっと深く奈落へと、深淵へとまるで天使と堕天使の争いを形容したような幕引きの舞台が墜ちる。――――喜劇の終わりを告げるように、終えた舞台と役者がカーテンの向こう側へと消え去るように、その舞台――――またひとつの世界が終わりを迎える。そして墜ちていた存在は天へと上昇し、その瞳は開かれた。

白い天井。今や見慣れてしまったそれが目の前に広がっている。第七区の病院。もやは自分の主治医と化してしまったカエル顔の医

者がいる病院の一室だろう。朝の象徴たる太陽の光が差す窓を見ると、やはり見慣れた景色が広がっていた。

「……………また説教かな……………」

あと数時間すればその真っ白なドアから出現するであろう姉の表情を思い浮かべてぼつり、つぶやく。一方通行との戦闘についてはよく覚えてない。記憶が途切れ途切れになっていて、断片がばらばらに散らばってしまったようにほとんどのことを覚えていない。――

――声だけだ。覚えているのは。

――
『ダークマター未元物質』

どこからか響いてきた男の声がその言葉を告げた後の記憶はない。だが、自らの能力名であり、旧名である『アンチマター反攻物質』と酷似した、能力名のようなその言葉は妙に頭に残っている。まるでその存在を欲するかのような衝動のようなものすら起こっており、自らの存在と無関係なものとは思えない。……俺と同じ研究所から生み出された実験の産物か？ いや、今は考えても無駄だ。答えなんて出るはずがない。

「……………あの……………」

どこか気まずそうな声が向いている方向の反対から聞こえた。……

ん？ドアが開いた音なんてしていないし、どこから侵入してきた？
そんな疑問を持ちながらも振り向くと、そこには御坂美琴……否。
御坂妹がじーっと目を細めて不満げな表情をこちらへ向けていた。

「……………いつから居た？」

「あなたが目を覚ます数時間前、あなたが病院に入院した時から居ました。どうして気が付かないのですか？ 影がそこまで薄いのでしょうか？とミサカは心配していたミサカに対しての第一声が「すいません」でも「ありがとう」でもない恩知らずのうつけヤローへの不満をぶつけます」

……………ひどく饒舌。感情の欠片もないと思っていたコイツから一度にそんなたくさんの言葉を聞けるとは思わなかった。……つーか、なんだようつけヤローって、誰から教わったそんな言葉……

謝った方がいいのか？　こういうときはとりあえず謝った方がいいのか！？

ジト目で未だに睨んでいる御坂妹に少々気圧される来栖はきよろきよろと視線を病室に彷徨わせる。と、ドアの辺りに何かを見たような気がした。――――――姉と上条、そしてカエル顔の医者だった。

（（――――グッ！））

……一瞬でも助かったと思った俺がアホだった。
姉である愛穂と上条、あぐくにカエル顔の医者までげんこつの上に親指を立ててニヤニヤとこちらをいやらしい瞳で来栖と御坂妹の様子を見ている。愉しんでいるのは明らかであり、絶対に有り得ないラブコメ的な展開を望んでいるに決まっていた。わざわざ乗ってやる必要はない。

「……とりあえず、ゴメン。あと、ありがとう」

「……、女性の期待する気の利いた言葉が出ないところがあなたのダメなところですね、とミサカは改めてあなたへの認識をうつけやローと、認識します」

……俺にどうしろと……。

ハア、わざとらしく御坂妹は深くため息をついた。ちらりとドアを見ると覗いている三人はあきれた表情で来栖を見つめ、「この根性無し」とでも言いたげだったが、もちろん無視。いちいち反応してたらキリがない。

「で、実験はどうなったよ？ オマエがいるってことは中止か？ だったら万々歳。オマエも普通の生活送れるんじゃないか」

「あ、それについてなのですが、ミサカはまだ、あなたと同じ世界で生活することはできません、と正直に告げます」

「……ハァ？　なんだ実験は継続ってか？　だったら、俺が寝てる間にも何人か死んでるってのか！？　ふざけ…！」

突然。そう、突然だった。妙に暖かいような、柔らかいような……そんな感触に包み込まれたのは。それを御坂妹のものだと認識するのには数秒も有さない。だが、彼女が自らを抱きしめる意味は不明だった。だが、どこか心地いい。彼女の腕は子供を慰めるように背中をゆっくりと擦りながら……

「————子供みたいですネ、とミサカは————」

「————」

「……台無しだ………」

心底うんざりしたように言うと、いたずらが過ぎたか、みたいな顔をしているのだろうこほん。と咳払いをして告げた。

「……落ち着いてください。『実験』は一方通行アクセラレータの敗北と共に中止こんせつていねいに向かう事が決定したようです、とミサカは懇切丁寧に報告します」

「だったら……、」

「元々ミサカの体はお姉様オリジナルの体細胞から作られたクローンであり、そこへさらに様々な薬品を投与する事で急速に成長を促した個体です。だから一時的に研究施設の世話になって個体を調節する必要がありますのですが……とミサカはあなたの耳元に囁ささやきます」

「………なんでさりげなく吐息を耳に吹きかけるかなあ………」

「気にしないでください。急速な成長を促すホルモンバランスを整え、細胞核の分裂速度を調整する事である程度の寿命を回復させる事ができます、とミサカは答えます。回復したらまたあなたの元にお世話になるつもりなのでそのように、とミサカはさりげなく告白します」

「………ドアから覗いている姉へと視線を移すと………親指を立てたままこちらにウィンクしていた。

全然問題ない、ということだろう。同居人が欲しいとか、妹が欲しいとか言ってた気がするし……家主が問題ないなら反対する理由もないか。

当然のごとく柔らかい感触のする胸に顔を預けたまま、言葉を返す。

「わかった、その時まで待ってる。ちゃんと身体良くして戻ってこい」

「!………はい。すぐに戻ります、とミサカはここに宣言します」

今度は来栖が。御坂妹の背中へと腕を回して、壊れ物を扱うかのよう
うにそっと抱きしめた。

H o l l o w 2 0 (後書き)

御坂妹フラグが完全に立ってますね……後悔はしてませんが。さて、次の構想を練るとしましょう。

感想、評価、ご意見などお待ちしております。

H o l l o w 2 1

「……何言ってるんだ、アンタ。手遅れかもしれないが頭の方は大丈夫か？」

窓のないビル。学園都市の第七学区に存在するそのビルの一室にて、その対談は行われていた。

対談者である学園都市元・第一位。能力名『アンチマター反攻物質』を有する能力者、黄泉川 来栖は様々な経験とメディアによって確実に八年前よりも多数の存在、空間、建造物などの情報を記憶している。

だが、今現在彼が存在している部屋はそのどのれよりも奇妙、異質。室内と呼ぶにはあまりにも広大な空間には、一切の照明もないはずなのに光り輝く恒星のような光で満たされていた。それらはすべて部屋の四方の壁を覆い隠すかのように設置された夥おびただしい数のモニターや怪しく輝くボタンが放つ光である。大小数万ほどだろうか、研究所でも目にするような機械の数。それらから生えるケーブルやチューブは機械の数の軽く十倍はあり、全て植物か欠陥のように床を這い、全て空間の中央の赤い液体で満たされた巨大な円筒の容器へと集約されていた。

「—————生憎とまだ手遅れではない。私は正気だ。して、もう一度言うがイギリスへ飛べ。そこでイギリス清教の人間と合流しろ」

直径四メートル、全長十メートルを越す強化ガラスでできた円筒の中に満たされた赤い液体。その中に逆さで浮かぶ、銀髪で緑色の手術衣の『人間』は男にも女にも、子供にも大人にも、聖人にも囚人にも聞こえる声で言った。

――学園都市統括理事長 アレイスタ

――クロウリー

わずか十四歳でルーンを極めた炎の魔術師とイギリスで五つの指に入るほどの魔術師を退けた来栖でさえ、その姿『人間』としか形容できない姿には畏怖の念を抱きざるを得なかった。

……そもそも何故このような場所へと呼び出されたのだろうか？
時間を少し遡るが、数時間前。

「学園都市統括理事長から出頭命令が出ているわ」

病院から退院した翌日、寝起きで頭も冴えていない来栖に朝一番に鳴り響いた家のチャイム音が知らせた来客はひとりの少女だった。歳は来栖と同じくらい。髪型はお下げ髪のように耳より低い位置で左右に結った髪を、自分の背中の方へと流しているそんな少女が発した言葉の意味を理解しかねた来栖だが、問答する暇もなく一瞬で

その場から連行……拉致ともいう。来栖をアレイスターの前に連れてくると、空間移動系能力者だったのか彼女は一瞬で消えた。そして、状況があまり掴めない来栖へとアレイスターが放った一言。

「――――――――――学園都市を出てイギリスへ行け」

正確にはもう少し内容と口調が違うが要約するとこんなものだ。うすら笑いを浮かべているように見える学園都市統括理事長の存在と放たれた言葉の内容を理解した来栖の思考が一瞬で回復したのは言うまでもない。

「……情報統制のために時間が必要なのはわかる。が、なぜイギリス清教に合流しなければならぬのだ？ まさか俺にスパイでもしろと？ ゴメンだなそんな話だったら――――――――」

「イギリス清教側が君に言いたいことがあるらしい。山ほどな」
あちら

……どうして今になってそんなことになるかなあ……。来栖は心の中で意気消沈しながらため息交じりにつぶやいた。魔術側であるイギリス清教が科学側の超能力者である来栖に言いたいことがある。一見すれば疑問だが、心当たりが有りすぎる。

――――――――――イギリス清教の十四歳の不良天才ルーン魔術

師をあと一步で殺害するところだった。

――イギリスで五本の指に入るほどの魔術師と互角に戦闘した。

――インデックス
禁書目録に付けられた枷の嘘。それを暴いた。

薄々感じていたことだが、科学側の人間がこれほどまで魔術側に関わり、挙句わざわざ付けたであろう魔道書図書館の枷を解く大幅な手助けをしてしまった。これはもしかして大変なことをやらかしたのではないか？

イギリス清教と学園都市がお互いに不干涉同盟でも結んでいるのなら、来栖の行動は教会側に対する裏切り行為だ。「裏切り者をこちらに渡せ！ 肅清してくれる！」みたいなことになっても可笑しくはないかもしれない。

どんどん浮かんでくる破滅のビジョン。……考えろ、考えるんだ。どうすれば許してくれるのかを！ 頭を抱えながら必死に様々な謝罪の方法を模索する。……菓子折りでも持っていくか？ 逆に舐めてるのかコラァッ！！って怒られそうだ……没。

「心配する必要はないだろう。悪くても説教くらいで済むだろう――
――ではな」

――飛行機は二十三学区だ。

そう付け加えると何か合図をしたように、来栖をこの空間まで運んだ少女がどこからともなく出現する。虚ろな表情でぶつぶつと念仏のようにナニカを唱え続ける来栖に少々いぶかしげな顔をするがまたも来栖とともに一瞬で姿を消した。

嫌な話。科学が進みすぎているのも考え物だと思う。b y黄泉川来栖。

超音速旅客機という最高時速七千キロオーバーの怪物旅客機からロンドンの西部にあるイギリス最大規模の空港であるヒースロー空港に降り立った来栖は半ばげっそりとした様子で空港の内部にあるカ

フエへと脚を運んだ。

いかにも体調が悪そうな様子の外国人である来栖を見たプラチナブロンドの綺麗な髪をもった中々の美人だといえる店員が心配して「大丈夫ですか？」と、外国人だから気遣ってくれたのかイギリス英語ではなく、アメリカ英語で訪ねたので、「心配ありません。ありがとうございます」来栖もだいぶ前に覚えた英語で返し、ホットチヨコレートを注文する。

席に着くとほのかに熱い掌のカップの温度を堪能しながら、一口。本場というのは的違いかもしれないが、暖かくシナモンが香る甘さ控えめのチヨコレート味の液体は先ほどかなりのGに耐えてくれた身体を癒し、心の余裕を与えてくれるほど良きものだった。見知らぬ外国人である来栖を気遣っていた女性店員が淹れてくれたもので、心から感謝したいと思う。と、次の客の相手をしているその店員の方へと頭を下げる。そのまま鞆をこそご探り、普通のノートパソコンの四分の一ほどの大きさしかない黒色のノートパソコンを取り出し、キーボードを叩いていく。

「えと、……『イギリス清教の本拠地である聖ジョージ大聖堂はロンドン中心街、ウォータールー駅から徒歩10分の距離にある』……なんかアバウトだなあ。って、付属ファイルが地図かよ！ うわっ、逆に細かすぎてわかりづらい……」

アレイスターに渡された小型ノートパソコンに送られてきたメールの付属ファイルであった地図には一般市民の住む住居のことすら記載されており、個人情報への配慮が感じられる。

カップの中身を飲み干し、カフェから出ると地図の画面を開いたま

まのノートパソコン片手に会社員と見受けられる大勢のスーツ姿の人間が流れていく空港内の鉄道駅へと向かった。

H o l l o w 2 1 (後書き)

御使墮し編開始です。原作通り上条さんは海に行きますが、来栖はイギリス清教側に何故か行くことになりました。まあ、あの人が一枚噛んでいるのですが……

感想、評価、ご意見などお待ちしています。

H o l l o w 2 2

歴史を感じさせる街、ロンドン。

そう言われても納得のいく光景を来栖は歩いている。

築三百年を軽く越すという石造りのアパートが道の左右に建ち並び、その古い街並みの中を携帯電話を持った会社員らしき者たちが忙しく歩いている。その中には神父らしき男の姿も見受けられて、日本ではお目にかかれない赤い二階バスがゆっくりと走る横ではバスと同じ色をした伝統であったはずの電話ボックスが作業員によって撤去されていく。歴史の新旧が入り乱れる、日本人にとっては新鮮だが現地人にとってはいつもの光景だった。

「——————全く……どうして君がイギリス清教なんかに来るんだ……」

ハア、と来栖の隣をあるく神父の男はあからさまなため息を吐いた。その男は赤髪で2mを越しているであろう長身。指にはメリケンのようにずらりと並んだ指輪、右目の下にはバーコードの刺青タトゥーという明らかに周囲をあるく神父と一線を画した存在に見え、尚且つスーツ姿の人間が多い朝のロンドンの街では明らかに浮いた存在だった。そのため駅のホームでは物凄く見つけやすかったのだが。

「文句言われても……ってか、そっちが呼び出したのでしょくに。」

ウチのトップが言ってたぞ『イギリス清教側が君に言いたいことがあるらしい。山ほどな』って」

赤髪の神父————ステイル・マグヌスは再度、あからさまなため息を吐くと聞き取れないような声で「^{アーキbishョツプ}最大主教め……」とうらめしげにつぶやき、懷から煙草の箱を取り出す。

「つか、よお……オマエさ、俺よりも年下だよな？ 止めやしねえけど、大人になった時に後悔すんなよー？ 知ってるか、^{ウチ}日本じやガンによる死亡率が一番高いんだぜ？」

来栖が若干脅すように言うと、モクモクと煙を上げる煙草を加えている口と表情が一瞬歪んだが、「ニコチンとタールのない世界の名前は地獄と言う。そして僕のような善良で敬虔な子羊は、地獄へ落ちるようなことがあってはならないんだ」と呪詛のようにぶつぶつと自らに言い聞かせるように唱えるところからは普通に煙を吐き出していた。

聖ジョージ大聖堂。

ステイルたちが所属している『必要悪の教会』ネセサリウスの元・本拠地であるその建物は大聖堂というには小さく、ウェストミンスター寺院や聖ポール大聖堂などの世界的観光地などと比べてしまえば一目瞭然。普通の教会とそこまで変わりはない。

それでもどこか威圧感のようなものを感じてしまうのは「現在ではイギリス清教の実質的頭脳」というステイルの説明が観念を後付けしているからであろう。

「君は少し待っていたまえ。いいかい、僕が許可しない限り教会の中へは入ってくるなよ？　わかったなら………どふぁッ!!」

来栖の注意をしてから教会の扉を開けようとしていたステイルが……吹っ飛ばされた。扉に。いや、正確には吹っ飛ばした者がいるのだろうが………っていかどこか悪意を感じたのは気のせいであって欲しい。

「あらあら、ステイル。せっかく学園都市から参上つかまつった客人に対する礼儀が欠けているのではなきかしら？ 聖職者としてのあ
るまじきことなのよ」

ステイルを吹っ飛ばした扉の向こう側から聞こえた声とともに姿を見せる。十八歳くらいだろうか、幾重かに折りたたんだ長い金髪は宝石のような輝きを放ち、純度の高い宝石と並べても劣らない美しさを持っている。持ち主もほとんど誰でも美少女であろう容姿。……ただ、なんだその口調は！？

若干困惑している来栖の目の前へと少女は歩を進めた。

「イギリス清教最大主教、アーキbishoppローラ・スチュアート。ローラって呼ぶことを欲したるのよ。よみかわくるす黄泉川来栖」

「……大方、ウチのトップが俺の素性をバラしたかそこで伸びてるヤツが話したかのあえて聞きませんけど……————率直に聞きます。要件は何ですか？」

古語になっているのか、なっていないのかすら解らない馬鹿口調の少女がイギリス清教の人間を束ねる存在というのは若干信じ難いが、高校のクラス担任のことを思い浮かべればまだマシなのかもしれない。と、自己完結して一刻でも早く要件を終わらせたい。

意思をはっきりと伝えると、少女——————ローラは悪戯な微笑みを浮かべて、

「黄泉川……呼び辛い名なのね。来栖、と呼びたるわ。さて、来栖
——あなたには必要悪ネセサリウスの教会の仕事をしてもらうのよ」

魔術側の人間、それも一宗派の総帥が申すべきではない台詞セリフをいとも容易く放った。

H o l l o w 2 2 (後書き)

テストが終わったので更新です。

感想、評価、ご意見などお待ちしています。

H o l l o w 2 3

『必要悪の教会』 ネセサリウス

ラテン語で「避けられない」という意味の名を冠したイギリス清教の一部であるそれは魔術師に対抗するための魔術師の組織である。

所属している魔術師、ステイル・マグヌスや禁書目録インデックスらは正に対魔術の技術に優れた人材であり、重要な役割を担っている。だが、その組織や所属している人間は同じ宗派の人間からさえあまり快く思われていない。

そもそもこの組織では「魔術は穢れたもの」としてみなされている。にも拘らず魔術を習得した者。つまり魔術師で構成された組織である。という大きな矛盾を抱えながら異端中の異端と呼称される「汚れを一手に引き受ける」機関。いわゆる宗教内部の汚れ役というヤツだ。

現在ではイギリス清教内部で最も力を持つ部署となってしまうたその「汚れ役」の長。最大主教アーキbishoppであるローラ・スチュアートが学園都市の人間である黄泉川来栖よみかわくるすに放った放った一言。

『あなたには必要悪の教会の仕事をしてもらうのよ』
ネセサリウス

かつて学園都市で様々な悪意を持った人間を見てきた来栖だが、そ

れを言い切った後のローラはそれはもういい笑顔だった。外見が美少女なだけに気を抜けば惚れてしまいそうなくらいに。思いとどまらせたのは籠ったとてつもない悪意を感じ取ったからだろう。無意識に背中や首筋に冷や汗が流れる来栖は学園都市にやってきた神裂やステイルのように人を殺すもの厭わないような仕事を確実にやらされるのだろう――――――なんて思っていたのだが……

「スペードの10・Jack・Queen・King・A……――――ロイヤルストレートフラッシュです」

……だ、ダメだ。まだ笑うな………！

得意げな表情を無理やり引き締め、上ずりそうな声を必死に抑えながら、指の間に挟んだカード計五枚をテーブルの上に見せびらかすように置く。……いや、これは仕事なんだ。あくまで仕事。

ポーカー。

コントラクトブリッジ、ジン・ラミーと並ぶ三大ランプゲームの一つで、心理戦を特徴とするものであり、それをするのが黄泉川来栖が現在行っている仕事である。

テーブルに置かれた五枚のカードは全て来栖の手。

一枚目は数字の10。二枚目は騎士^{Jack}。三枚目は女王^{Queen}。四枚目は王^{King}。最後の五枚目はA。

全てのカードに振られた記号は全て剣を表し、騎士を象徴するスぺード。王国に欠かせないものが揃っている。カジノでポーカーをやったとしてもここまで高位のものを出すのはかなり運がいる。その確率六十四万九千七百四十分の一という驚異的な確率だ。通常のポーカーなら絶対に負けはない。

来栖に最高の手札を見せつけられたのは所々に真っ赤なレザーがあしらわれた赤いドレスを着た金髪の女性。恰好から判るとおりに高貴な生まれの女性で容姿もかなりの美人の部類に入る。少なくとも来栖が今まで見てきた女性の中では五つの指に入るほどだった。

「……………」

女性は一言も言葉を発さない。明かされていない五枚の手札でわずかに口元を隠しながら来栖を眺めるように見ている。

目の前には最高の役が揃っているがそれに驚いた様子も気圧された様子もなく、ただ瞳は真っ直ぐに来栖の瞳を射抜いている。……少々眼を合わせるのが辛くなってきた。

「あの……、なにか？」

「ん？……ああ、こちらが勝てば本当に一度だけなんでも願いを聞いてくれるの、と思ったただけだし」

「……まあ、無理でない範囲なら。ご期待に添えるように頑張りますよ」

「ふーん……。じゃ、ほい。ショー・ダウン」

女性の掌からばら撒かれるカード。クラブの4、ダイヤの4、ハートの4、クラブの4……。ここまではよかった。せいぜい「フォー・オブ・ア・カインド」。同じ数字を揃えるというのめかなりの低確率なのでせいぜいと言ったら少々誤りだが、それでも来栖の手札である「ロイヤルストレートフラッシュ」よりランクは二つ及ばないが、

「——————ジョーカーJoker……………!?!?」

五枚目のカード。記号の振られていない白色のカードの中心で口が大きく裂けた道化師が来栖を嘲笑っていた。その笑みを見た瞬間に悟った。悟らざるを得なかった。

「あ、有り得ない……。ファイブ・オブ・ア・カインドとか、どんな確率だよ……」

五枚目の道化師。それは来栖の敗北を決定づける最悪のカードだった

た。ポーカー最高のハンドで挑んだにもかかわらず負けた。

驚きを通り越して唾然としている来栖を見て女性はクスクス、笑いながらテーブルに滑らせるようにして、綺麗に自らのカードを揃えている。

「……はあ、キャーリサ様とのポーカーでなんとか人生の運をほとんど使い果たした気がしますよ……ホント」

「……はあ、キャーリサ様とのポーカーでなんとか人生の運をほとんど使い果たした気がしますよ……ホント」

「……はあ、キャーリサ様とのポーカーでなんとか人生の運をほとんど使い果たした気がしますよ……ホント」

「……はあ、キャーリサ様とのポーカーでなんとか人生の運をほとんど使い果たした気がしますよ……ホント」

「……はあ、キャーリサ様とのポーカーでなんとか人生の運をほとんど使い果たした気がしますよ……ホント」

「……はあ、キャーリサ様とのポーカーでなんとか人生の運をほとんど使い果たした気がしますよ……ホント」

自分のことでもないのに腰に手を当てながらえっへん、と自慢げな顔でそう言い切ったローラと本気で言っているのか？とでも言いたげなイギリス女王含め王女三姉妹の怪訝な顔は今でも忘れることができない。

その後何故かイギリス女王エリザードは大声で笑い出し、「なんとも頼もしい助っ人じゃないか。正式にイギリス清教に入れたらどうだ？」なんて高らかに言い。第一王女リエメアは「興味がない」とでも言いたげな瞳で見ると踵を返し、第三王女であるヴィリアンはどこか怯えた様子でそそくさと去って行った。

結局どんな仕事をやるのかは決まっていなかったらしく、三人の中で『軍務』の才に秀でた第二王女キャーリサがローラの言う『天地創造すら可能』という来栖に興味を持ち、護衛兼遊び相手の仕事を承ったということだ。

「で、クルスはどんな力を持っているというの？ いい加減知りたいのだけど」

「アハハ……え、っとまあ、簡単に言ってしまうえば世界のあらゆる物質と逆の性質を持つ物質と物理法則を逆転させることができる物質を生み出して、操ることができますね」

「……よくわからないけど、それがなぜ天地創造につながるの？いくら逆の性質をもった物質を操れたり生み出すことができたりした

って世界を滅ぼして再創造することなんて不可能だと思うのよ」

キャーリサの意見は尤もだ。いくら普通の物質の逆の性質をもった物質を生み出し、操作できたところで『神の奇跡』再現することは常識的に考えて不可能だ。

だが、創造は不可能にしても世界を滅ぼすことなら可能かもしれない。おそらく衛星程度の大きさの反物質が地球に衝突したら世界は終わるだろう。まあ、そこまで巨大な反物質を生成することなど不可能に近いのだが。

「まあ、アレはローラの戯言と考え――
――騒がしいですね」

来栖はいったん言葉を切り、周囲に耳をすませる。と、部屋の外からドタドタと慌ただしく人が移動している音が何回も何回も聞こえてくる。キャーリサもそれに気付いた様子、怪訝な表情で扉を睨んでいる。と――――――ボタンと勢いよく扉が開き、若い衛兵の男が焦った表情で部屋に飛び込んだ。

「キャーリサ様、ヨミカワ殿、一大事です！ ウィンザー城の防壁が破られようとしていますっ！！」

――――――天使が……、墜ちた。

H o l l o w 2 3 (後書き)

少々遅れた次第にございます。

感想、評価、ご意見などお待ちしております。

人は誰でも嘘をついて生きている。

それは例え長年連れ添った友人や家族でも知り合って間もない他人でも。よっぽど心の純粋な人間か生まれて間もない赤子を除けば全くの例外など存在しないだろう。

「いやー、まさか学園都市からの協力者がくるくるだったとは夢にも思わなかったぜよ！人生わけのわからないことばかりだにゃー」

神奈川県某海岸を歩く黄泉川来栖の隣で世にも奇妙な猫ボイスを発しながら男、土御門元春は笑っている。

上条当麻にも劣らないツンツンの短い金髪に病気でも眼が弱い体質でもなく単なる伊達で付けているサングラス。地肌に直接アロハとハーフパンツでオマケに金の鎖を首にかけた「いかにも不良です」と自己主張しているような格好の”友人”改め、”変人”に来栖は心底うんざりしていた。

学園都市の同じ学校、同じクラスの人間がイギリスに呼び出されたと思えば現地におり、しかも魔術師だというのだからこれで気持ち逆が高揚する人間などそうそういないだろう。

「『人生わけのわからないことばかりだにゃー』……じゃねえっの。ソレ、俺の云うべき台詞だっていうことわかってんのか？”魔術師”サマよお。どうせ俺が呼び出されたのだってオマエが一枚

噛んでんだろ。ペテンが」

「おお。普段は無気力クールなくるくるに怒られるとゾクゾクするぜよ……クセになっちまいそうだぜい。まあ、それはいいとして、な。確かにくるくるが言った通り、お前がイギリス清教から呼び出されたのには確かにオレも一枚噛んでる。だがな」

馬鹿にしたような高笑いの表情から一転。一気に雰囲気を変えた土御門に若干の違和感を感じなくもない来栖だったが、真面目に話をする気になったのだろう、と違和感を抑え込んで話に耳を傾ける。

「―――――オレはただ、ねーちゃんの恋路を応援したかっただけだぜい」

……時が止まった。否、止まったように思うほど来栖の周囲は静かで、しかも凍りついたように感じられた。波の音も聞こえず、世界は白黒。もちろん錯覚だが、それを現実に見えるほど思考はクリアで心は沸騰していた。

今なら神さえも殺せる自信すら湧いてくる。

「そうか、よっぽど痛い現実を見たいのだな。マゾヒストクン？」

「え？　なんかオレ、スイッチ入れちゃったのか？　ちょ、くるくる眼がヤンデレの妹みたくなってるぜよ！？　ギャアアアアアアア

アアアアツツ！！！！ あ、もう痛いを通り越して気持ちよく……
なるわけがないにゃーッ！！ 痛い痛い！ 舞夏ーッ！オレは先
にあの世で待つて」

それはとても綺麗な、砂浜に一人の変態の叫びが海岸中に響き渡り、
それは少し歩いた所で遊ぶ家族たちの耳にも微かな音として届いた。

「――で、反省しているのか？」

「ハイ、ソレハモウ。マジメナハナシニフザケテスイマセンデシタ
……」

よろしい。

アロハの着衣が乱れ、サングラスの位置も若干づれたままで砂浜に膝をめり込ませた状態。元々は神道での神、仏教で仏像を拝む場合や、征夷大將軍にひれ伏す場合にのみとられた姿勢である正座の土御門は砂が直で脚に突き刺ささり相当痛いのかぷるぷると震えながら、正面から見下している来栖にカタコトで許しを乞うていた。サングラスで見えない瞳からは一筋の雫が流れ落ちた跡すらあり、これを見たほとんどの人間はこう思うだろう「鬼だ……」と。

「あ、脚が未だに痺れてるぜよ……って、うにゃーっ！ カミヤーン、やっと見つけたんだぜーい！」

立つことすらままならなかった土御門は未だに遠く、まだ見えない所にいる上条を恐るべき眼力で見つけると、痺れていると言ったのが嘘だったのか、一目散に駆けていった。砂浜を走る金髪の男のサマは恋人に駆け寄る様にも、助けを求める様にも来栖には見えて仕方がなかった。

「……楽しそうですね。ハア……」

「んあ？ ああ、神裂か。……また、不景気な顔して……そんなんだと小さい幸せを逃しますよ？」

「余計なお世話です！！ 世間から見ると私は身長二メートル強の赤髪長髪の大男で、手洗いや更衣室に入っただけで警察を呼ばれる

し、おまけに電車で揺られているだけで痴漢に間違われる気持ちかわかりますか!？ わかるんですか!？」

「ちょ、顔近い……まあ、頑張れ?」

「頑張れ? 何を頑張れと? 初めにこんなことになったときは本当に世界が私に喧嘩を売っているのかと……ああ? だったら買つてやろうじゃねえか、バカヤロー……」

突如ため息を吐いて意気消沈していると思ったら、急に熱弁を始め、最後には水平線に向かって涙目で叫んでいる女性、神裂火織の様子に来栖は苦笑いするほか反応の仕様がな

来栖がイギリスに呼ばれ、それを狙ったかのように起きた大魔術、名を『エンゼルフォール御使墮し』という。その効果は『天使の魂を天界から人間界へと引き摺り下ろす』というもの。

どうやら天使という存在は人間の肉体に入り、その人間の魂を肉体から追い出すらしく、次々と魂が入れ替わってしまいうらしい。

ウィンザー城の魔術結界のおかげで来栖と神裂。自らが結界を張った土御門は術の効果を中途半端に防いだため、精神の入れ替わり（「自分が本来誰なのか」という自覚を失う事）は防いだが、術の影響下にある者から見た外見は『本来入れ替わるはずだった別人』のものになってしまう。

ついでに土御門は人気女優に手を出した事が週刊誌にすっぱ抜かれた超美形らしいアイドル、ひんがしあ一一一。

神裂は云わずとも知れた赤髪長身でヘビースモーカーの14歳魔術師、ステイル・マグヌス。

来栖はよくわからないが、長身・茶髪でヤクザ予備生に新人ホストのような風貌を合わせた少年に見えるらしい。

どうやら神裂は上条が『エンゼルフォール御使墮し』の術者と思っているらしく、飛行機内でブツブツと呪詛を吐き出し続けて乗務員に冷や汗をかかせていたことはまだ来栖の記憶に新しい。

「…………そろそろ行きますか。まったく、厄介なことで…………だるいなア」

いつの間にか上条に問い詰めている神裂の様子を見止め、一息つくとあくまでゆったりとした足取りで三人の元へと歩を進めた。

H o l l o w 24 (後書き)

主人公が入れ替わったのは……まあ、言わなくともわかりますよね。そういえば口癖なのに最近場面がなくて「だるい」を言ってなかった気がします。

―――上条当麻！　あなたがこの入れ替わりの
魔術―――『エンゼルフォール御使堕し』を引き起こした事は分かっています！　今
から三つ数えますからその間に元に戻しなさい！

憤怒の表情で三つ数えるもなく今にも斬りかかりそうな眼と鼻の先の
神裂に上条はたじろく。もちろんのこと二メートル近い刃物を携
えた人間がたとえ女性であってもかなり恐ろしいということは誰だ
って同じだろう。しかも帯刀している人間が怒っている。このまま
では何をするかもわからない、ということだって無くはない事態だ。

明らかに上条当麻の危機だというのにそこまでの歩を普通に進める
黄泉川来栖の行動は捉え方によって冷酷と取れなくもないが、一種
の信頼から成り行きを見守っているに過ぎない。……仮に自己満足
だったとしても『必要悪の教会』ネセサリウス所属の魔術師である彼女たちの友
人である禁書目録、……今はどうやら青ピだが、”それ”を救った
人間には違いないのだから。間違っても切りかかるようなことはな
いだろう。

「いやー、ホントに怒ったねーちゃんは恐いにゃー。カミヤんには悪
いが巻き込まれると厄介……おっと口が滑っちゃったぜい」

「オマエも中々に最悪なヤツだな………」

「お褒めにあずかり光栄だぜい。最悪なヤツ同士これからも仲良くしようにゃー」

いつの間にかコソコソと来栖の元へと逃げてきた土御門が差しだした腕を微笑ながらガシィ、握ると、来栖は上条と神裂が口論……否、神裂が一方的に問い詰めている現場の方向へと視線を移した。すると何故か問い詰められている当人、上条当麻が来栖と土御門の方向へを見ていた。そして叫んだ。

「——————土御門、テメエ一人で逃げてんじゃねえ！」

来栖と向かい合わせになっているため上条からは後姿の土御門はビクリと体を震わせ、逆方向へと向いた。光のせいで薄い青のレンズがきらりと光ったが、それは冷や汗のようで「バレたか」という心の焦りを顕しているようだった。

そんな土御門が来栖に助けを求める子犬か、または哀れな子羊かのような表情をするが、生憎と身長百八十ほどもある大男がそんな行動をとっても気持ちが悪いただけだった。

「ご指名だぞ？ 最低ヤロー」

「ちくしょーッ！！ こうなったらくるくるも道ずれにゃー！
——————なあ、俺達って友達だよな？」

意味不明な叫びと言動を吐いた後、左薬指でサングラスの中央をカチリと鳴らす土御門。それとなくとてつもない悪寒を感じ取った来栖はもちろんのこと、逃避行動に移ろうとするが、両腕がガッシリと。しかも万力で絞められているかのように動かないほど、強く”握手”をしていた。

「……ちよ、まさか、おま……ッ！」

「飛んでけや最低ヤロ オオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオツツツ!!!!!!」

土御門はそのまま来栖の両腕を掴んでいる状態で上体を後ろに大きく反らせると、その勢いで後方へと来栖の体をぶん投げた。プロレス技で有名なジャーマン・スープレックスの亜種というか、酷いバールジョンとか、普段の来栖ならそんなくだらしないことを考えたのだろうが、さすがに空中ではそんな余裕はなく一時的に無酸素状態に陥ったかのような感覚を体験した後、顔にめり込む砂の痛みを感じて初めて友人というヤツを恨んだ。

———に近いうちにあの猫男……絶対^{シスコン}に病院送り決定。

そう志しながらパラパラと立ち上がり、纏わりつく砂を払い落すと

目の前には上条当麻。案の定、来栖の表情を見ての反応は土御門と同じようなもので、偶然会った友人に対する態度ではなかった。

「ま、まさかお前と土御門は………!」

「待て、上条。それはごか『そうだぜい。オレもくるくるも』^{ネセ}必要^{サリウス}の教会』の一員ってことなんだぜい」

上条の見当違いを解こうとした来栖の言葉に上書きされた土御門の言葉は上条の心を惑わすには十分なほど効果的だった。現実、土御門の言葉を理解するのに上条は多少の時間を有しただろう。……同じ学校の友人であり、隣人でもある存在のふたりが魔術師。記憶を失っている上条当麻でもステイル・マグヌスという魔術師と遭遇している。記憶を失う前の、魔術師と黄泉川来栖という人間と共に闘った上条であったなら、土御門の嘘を確実に見抜けたであろうが、その嘘は上条の中で現実として受け入れられようとしていた。

「ちょ、待てよ。何だそりゃ？ お前ら二人が、魔術師？」

「いや、俺は「おうよ。オレとくるくるは学園都市^{サイエンス}の敵である教会^{マジ}世界からの工作員^{カル}ってわけだ。別におかしくはないだろうに。要するにスパイだ」

「俺の言葉をいい加減遮るな！ 俺は魔術師でもなんでもない！」

どちらかと言えば科学サイドだ！ 捏造するな。俺はただ、ローラのヤツに脅されてるだけだ！」

言葉に詰まった上条の隙をついて来栖は溜まりに溜まった叫びを全て解き放った。”俺は同類なんかじゃない。あくまで嫌々仕事を手伝っているだけに過ぎない”という思いを込めて。

だが、それは土御門の言葉によっていとも容易く砕かれた。

「おやゝ、おかしいにゃー？ 確か必要悪の教会の名簿にはくるくるの名前が追加されてたし、^{アークレシヨツプ}最大主教も『黄泉川来栖が必要悪の教会に所属することになったりけるのよ』^{ネセサリウス}って、言ってたぜい。ねーちんも聞いただろ？」

「……………確かに、あの女……………いえ、^{アークレシヨツプ}最大主教がそのようなことを高らかに申ししていたことは記憶に嫌というほど残っています。……………何せくるくるくる踊りながら叫んでいたものですから」

ローラ・スチュアート、オマエも後で病院送り決定な！

神裂の言う”くるくる踊りながら叫んでいた”という光景が容易に浮かんでしまった来栖はとりあえずイギリスに飛んで金髪馬鹿言葉の女性を殴りたくなったが、「や、やっぱりお前も魔術師だったのか」とまるで失望したような口調と瞳の上条を見てしまうと、誤解を解くのはもう無理そうだ。というか、疲れそうだ。と、諦め十字教徒ではないが神に祈った。

―――どうか身近にマトモな人間が現れて
くれますように。

それは非日常を求めながらも日常を心から愛しているというとても
矛盾した考えを持つ少年の心の叫びであった。

H o l l o w 25 (後書き)

あー、ダメだ。やるが多すぎて執筆がどうしても遅くなってしまいます。誠に申し訳ありません。

暇な時間なるべく執筆に時間をかけたいと思っていますのでどうかご容赦を。

天使が地上に墜ちようが墜ちまいが、結局のところ変わったのは姿だけで時間の流れというもののへの影響は全くなかった。と、思う。

上条一家および魔術師二人の泊まる海の家の際下で窓のキッチリ真っ暗に染まった空を眺めて黄泉川来栖は少々気を抜いた。

天使なんて大層なモノが墜ちてきたのだから世界を変えてしまうようなことが起きても可笑しくはない。いや、実際は大きく世界は変わっているのだが人的被害が無いだけマシと言えばマシなのだろう。精神的に被害を被^{ひこう}っている女性はずいぶん近くに居るが……

「……ん？」

ヴーヴーヴーヴ。と、右足の腿辺りに振動を感じた。もちろんのことでマナーモードにしている携帯電話である。そして着信相手も解っている。大方心配して電話してきたのだろう。……ったく、いつまでも子供扱いか。

若干のため息とともにポケットの携帯を取り出し、開く。

「もしもし。姉さん？」

『おー、来栖じゃん。元気にしてるじゃんかー？』

ピシッ！世界にひびが割れるような錯覚を来栖は起こした。……失念していた。全世界中に広がっている大魔術が特別な魔術防壁を張っているわけでもない科学の街、学園都市に影響を及ぼさない筈がない。

『おいしい、来栖ー？ 聞こえてるじゃんかー？』

『……来栖、なんか変じゃん。まあ、声聞いて安心したじゃん。上条もそっちにいることだし、問題はない……いや、大有りか。とりあえず体調崩さないようにするじゃん。それじゃ』

[illegible]

[illegible]

遂には高らかに、まるでどこかに居るような悪役のように笑い出した。……茶番だ。ああ、心底そう思う。下手な喜劇や漫才を鑑賞するよりもよっぽど可笑しい！　だって、そうだろう？

――神裂の声でじゃんじゃん言われればさア……

「あー、楽しい。やべエよオイ最高過ぎだろ、コレ。あ、録音しとけばよかった。ま、いいか」

三日月状に歪んだ口元から剥き出しになった齒を晒しながら、そろそろ風呂でも入るか。とそんな考えを頭に過よぎらせると廊下の角から見間違えようのない人物を来栖は発見した。首から下げた金のチェーンに肌に直接は織ったアロハシャツ。

「いやー、偶然だけにやー。くるくるはカミヤんのところに行ってるのかと思ったんだけどにやー」

人の神経を逆撫でする猫言葉。おまけに金髪にサングラス。ここまで個性的な人間を来栖はほとんど知らない。そして”魔術師”という肩書を加えれば土御門元春の完成だ。

……ん？　　そういえば前に聞いていたロシアからの協力者はまだ来

ないのか？　しかし土御門も神裂も特に不自然に思っている節も無い……ま、そのうち来るだろう。

それよりも問題は目の前だ。持ち前の変態ぶりよろしく「くそう、くるくるだけ姉さんに電話しやがって……オレも舞夏に電話したいにゃー！　けど、別の人間の声を舞夏と認識したくはないぜよ……」のような感じで叫んだり、意気消沈したりと忙しい動作を繰り返す土御門を如何にして排除するだろうか？

模索する来栖を土御門は一目見ると、一瞬。サングラスの薄いレンズの向こう側の瞳が来栖を鋭く射抜いた、ような気がした。

「そういえばくるくるのレベルはいくつなんだぜよ？」

うつらうつらに空を彷徨う視線とは打って変わってその言葉には確かな確信と嘘が混在していた。知っている。俺は知っているぞ。だが、お前の口から言わせる。という意思の下その言葉は放たれ、同時にあわよくばそこから更に深くまで探ってやる。という欲望の混じった、例えるならば一種の言霊だ。

しかし、それは同時に知っていることはあるが、そこまで深くは知らない。という事実を露呈しているのも同じであり、単なる好奇心かそれとも別の目的か。知る由も来栖にはないがそう易々と教えてしまうのはどこか嫌な予感がする。……触れるな。手を出すな。お前風情が触れていいほど軽いモノを隠しているわけではない。自らの意志とはまた別の意思がまるでそう侮蔑を表しているかのように拒絶の言葉は簡単に飛び出した。

「知らん。能力測定もまともにしていない俺にそんなこと聞くな。レベル3か4くらいじゃないのか」

「アハハ、そういえばそうだったにゃー。小萌先生の涙のお願いを『だるい』の一言で切り捨てる男はくるくるぐらいしかないからにゃー」

「結局は小萌先生が折れるんだ。……まあ、マジで一日中涙目で追いつけ回されたのはさすがに堪えたがな」

「そんなこともあったにゃー……買い物袋ぶら下げながら運動会でつか？みたいな言いたくなるような小萌先生の姿を見て青ピが24時間張りついて撮影していたのが物凄い印象的だったにゃー」

「そして土御門元春くんは夜中に義妹であることをいいことに舞夏サンとギシアンしていた、っと」

「へっ!? や、やだにゃー、ま、まさか、ボクガソンナコトスルワケナイジャナイカー」

「動揺スンナ、バーロ。……つか、俺にはどうでもいいし」

本当は若干。いや、結構な具合に驚いた来栖だったが、表面には露呈しないようにポーカーフェイスを貫いていた。これはイギリスで短い間だが、覚えた数少ないモノの一つである。

そんな来栖とは完全に対称。土御門は完全に動揺したまま、ソワソワと落ち着かない様子で来栖を偶にちらりと見ている。先ほどまで完全に攻め口調だった人間とは思えない痴態だ。はっきり言って気持ちが悪い。

「あー、あー、解った忘れてやる。俺は何も言わなかった。『土御門くんは近親相姦なんてしていません』これでいいか？」

「……別に認めたわけじゃないんだけどにゃー……。まあ、恩にきるぜい。お礼と言っちゃなんだが少しイイコトを教えてやるにゃー

」

「――――――イイコト。ねえ……」

自らが浸かる湯の水面をばしゃばしゃ、と掌で叩くと来栖は囲いの石に肘をつき息を吐いた。

土御門いわくここの風呂にしばらく浸かっていると何かイイコトが起こるらしい。

健康的な面かと思ったが、特別な効能の温泉というわけではないだろう。ただ、海水の塩を流すための風呂にそこまで求める方がお門違いだ。大方、騙されたのだろう。適当なことを言っておけば口封じできるとの考えからかもしれない。……そんなに入っていないけど、そろそろ出るか。

「――――――ふう、久しぶりの湯浴みですね。少々ゆっくり……え？」

ガラガラと開いた先から登場し、キョトンとした様子で動きを停止したのは女性。しかも一糸纏わぬ生まれたまの姿。しかも神裂火織である。

待て、少し待とう。土御門が言っていたのはコレか？ 考えるまでもない。土御門元春はコレを狙っていたのだ。……まあ、確かにお礼としては十分すぎるが……って、冷静に思考している場合か！

「待った！ ちょ、さりげなく刀を持ってこようとするの止めない！？ 速攻で出ます！ 上がらせて頂きます！」

「…………べ、別にいいですよ。どちらにしろあなたに刀の攻撃は効きませんし……それに、あ、あなたも入ったばかりなのでしょう？」

そりゃあ、そうですが……

神裂を見ないようにして、背を向ける来栖はではな風呂の温度のせいではなく他の要因で紅くなった頬を搔きながら、この状況どうしたものか……と考える。その直後、水面に波紋が広がった。言うまでもなくそれは神裂が湯に入ってきたことを意味している。

なんと言えがいいのか分からないが……うん。結婚前の女性が特別な関係でもない男と風呂を共にするのはどうかと思う。やっぱり出よう。

背中越しの神裂の熱が湯を伝っているような気がして落ち着かない来栖はタオルを手に取り、上がろうと試みるが……

「……………少し、」

顔は見えないだが、その声の主はどこか寂しそうで、懇願するように。

「少し、待ってはくれませんか？」

そんな声で呼び止められたら逆らえるはずもない。正直、早々に安らかな気持ちを取り戻したかったのだが、言うなれば痴態を晒して

いるのはあちらも同じなわけでここで逃げるのは卑怯かもしれない。ハア、不幸だ。上条ではないが心の底でため息と不幸というワードを吐きだすと、来栖は湯にタオルをつけ、搾ったそれを頭頂に乗せ、神裂が吐きだそうとしている言葉に耳を傾けた。

「ずっと言えませんでしたけど……その、……」

必死に言葉を紡ごうとしているのはわかる。だが、それは放たれることがなければ相手に伝わるはずなどない。

歯切れの悪い神裂に若干の心配が沸くが、ここで自らが干渉するべきではないのだろう。来栖への言葉と言ったら特に思い当たる節など本人にはなかったが、それは唐突にしかも大音量で放たれた。

「――――あ、ありがとうございますっ!!」

H o l l o w 2 6 (後書き)

今回は今までに比べると若干(?) 長めです。……嗚呼、学校がツライ。

感想、評価、ご意見などお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9131u/>

とある虚けの反攻物質《アンチマター》

2011年10月17日16時59分発行